

ワンパンマン世界に怪人TS転生だって？

八虚空

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンパンマンとは強すぎるヒーロー、サイタマが人類の脅威をワンパンで片付けるギャグ漫画である。

その世界に怪人としてチート転生者を送り込んだら果たして何処までイキれるのかを検証してみようと神様は思い付いた。

果たして主人公はこの先生きのこれるのか！

目次

プロローグ	1
一話 バンパイアレディ	6
二話 怪奇、恐怖の寝取られ男！	10
三話 サイタマ異星人説	15
四話 最強の種族	20
五話 原作との戦力比較	25
六話 中世のヒーロー協会	29
七話 怪人一族	32
八話 女騎士はもはや響きだけでエロい	37
九話 ワンパンマン世界に人間いない説	42
十話 伝説の地へ	46
十一話 円卓の騎士トリスタン襲来！	50
十二話 真祖の吸血鬼vs幻影飛翔剣の達人	54
十三話 幻の強さ	61
十四話 清流拳のジェントル、抜剣術のソウル	66
十五話 円卓の騎士と伝説の魔術師	69
十六話 バンパイア傭兵団の仕事風景	73
十七話 スーパー妄想タイム	77
十八話 『女キラー』カーミラ	83
十九話 武術の最果て	87
二十話 悪魔の囁き	91
二十一話 バンパイアと言うよりサキュバス	95
二十二話 ローマ帝国vs円卓の騎士	99
二十三話 原作と史実と伝説の闇鍋世界	103

二十四話	ローマと書いて世界と読む	108
二十五話	ベデイヴィエール	113
二十六話	理想の王を強いられているのだ！	117
二十七話	バンパイア傭兵団の仕事風景2	124
二十八話	爆裂流爆破	129
二十九話	S級とA級の格差	133
三十話	不貞寝とヤケ食い	138
三十一話	ローマ帝国	142
三十二話	怪人バンパイア女王、災害レベル鬼＋＋	146
三十三話	空賊スカイ団	150
三十四話	捕らぬ狸の皮算用	154
三十五話	カーミラさんによる現状解説回	157
三十六話	S級の戦闘速度	160
三十七話	絶望のち希望	163
三十八話	笑うという行為は本来攻撃的な（ry	167
三十九話	嵐の航海者	173

プロローグ

「フハハハッ。我は数千年を生きる真祖の吸血鬼。たかが人間如きが敵うとも思ったか！」

「ふーん。そっか」

「泣け、叫べ。絶望に打ちひしがれる。生まれてきたことを後悔するが良い。見逃して貰えるなどと考えぬ事だ！」

「どうでもいいけど話なげえな」

「何だと、このハゲマントめ。お前こそ額が眩しくて直視出来ぬわ。グハハッ」

「髪の話はするな！」

「ひでぶっ」

笑った3メートル近くの化物をマントを羽織ったハゲヒーローが一発ぶん殴った。それだけで化物の上半身が消し飛ぶ。

まるでギャグアニメのような光景だ。凄く見覚えがあるのは気のせいだろうか。

ワンパンで散った吸血鬼の親玉を指さして神様は俺に言った。

「あれが君の転生先ね」

「いやー、勘弁して欲しいっす」

ども。テンプレなチート転生者です。

例のごとくトラックにはねられて死んで神様と会って新しい人生を貰う所です。転生先は吸血鬼の真祖だそうです。

なんと吸血鬼の弱点は全て克服済みの上、血を吸って長生きすればするほど強くなる最強生物なのとか。オマケに美形。

いやー、勝ち組で悪いね。最強系転生者としてブイブイ言わせて貰うわって感じだったんだけど。

転生する世界がワンパンマンでした。しかも怪人。

え、何その死亡フラグ。サイタマに勝てるわけがないじゃん。相手は地球をパンチで粉碎するような化物だよ。

しかも確か苦戦すれば更に強くなるって設定のサイヤ人的な人

じゃなかった？

念の為に俺vsサイタマで対決したらどうなるか神様に見せて貰ったけど、お試し動画じゃ数千年も生きてせいで前世の記憶が薄れた俺がサイタマにワンパンで片付けられる光景が映っていた。おい。血を吸って長生きすりゃ強くなるんじゃないやなかったのか。

「強くなつとるよ？ 災害レベル竜クラスはあるじゃろうな」

「最初は竜ですらないのかよ……」

「そりゃ地底王や深海王が災害レベル鬼なんじゃし」

確かに一種族の王がその強さなら、吸血鬼の王である真祖が災害レベル鬼なのは道理か？

ちなみに災害レベルってのは怪人の強さのランクな。狼・虎・鬼・竜・竜以上・神と強さが上がっていく。

ヒーローはC・B・A・S級。最強のS級ヒーローでも竜には苦戦したり敗北したりする。いや場合によっちゃ鬼に負けるパターンもあったな。

まあ、所詮は目安に過ぎないから相性があつたり同ランクでも強さに開きがあるんだ。

「そーいや吸血鬼って作中に登場してた気がする」

「バンパイア（血統書付）じゃな」

「確か災害レベル鬼だったよな。おい、子孫と同じ強さって真祖としてどうなんだよ」

「子孫も長生きしちよったか努力したんじゃろ」

「覚醒すりゃ急に強くなるもんなワンパンマン世界って」

死んでもおかしくない状態を潜り抜けたら急激に強くなる事がワンパンマン世界じゃある。代償に確か欲求が希薄になるとか言ってた気もするが。

怪人細胞つー特殊な生肉を食った人間が怪人になる時なんかも急激なレベルアップをしてるし身体の細胞が変異してんのかね。それか怪人を食ったら強くなるのかも。人間じゃ腹を下すらしいが。

「蚊の怪人のモスキート娘も血を吸ってパワーアップしてたし怪人流の強化方法も確かにあんだよな。もしや人より怪人の血を吸った方

が強化されるのか？」

「場合によるの。毒で死ぬ可能性も無視は出来んし。まあ数千年を生きたお主があなんじゃし誤差だと思っくんじゃが……」

「だよなー」

そもそも比較対象にサイタマを出すことがオカシイのだ。アイツは竜クラスの怪人を相手にして他の怪人よりも強かった気がする。多分？とか言っちゃ奴なのだ。

サイタマにとって本当に他の怪人と違うと理解できるのは竜以上の怪人だけだ。それすらもリップサービスの可能性があるが。

複数の町が壊滅する竜クラスを越えるって国家滅亡レベルの大災害だよな。有名な竜以上の怪人のボロスとか数多の星で略奪するドラゴンボールのフリーザみたいな奴だったし。

だからサイタマと敵対するのは死亡届にサインするのと変わらない。関わらないのが吉だ。でもな。

「なあ神様、人類を滅ぼせとか言っちゃったりする？」

ワンパンマン世界じゃラスボスとして作中に神の存在が示唆されている。最初に出てくるワクチンマンという怪人は環境破壊を繰り返す人類を病原菌と見なし地球の意思によって生み出されたと言っていた。つまり俺の目の前にいる神様こそがワンパンマン世界のラスボスである可能性があるのだった。

「いや？ 好きにすりゃ良いんじゃないかの？」

「あ、そうなんだ。怪人に転生させるから、てっきり人類を敵視してるのかと」

「向こうの神様が転生者を送るなら怪人以外は認めんと言っておつてな」

「なるほど」

たとえ人類側に味方をして神様が力を取り上げるなんて事はないらしい。向こうの神様に睨まれるかもしれないらしいが。

いやいや、十分アウトだよ。災害レベル神とかサイタマのマジ殴りで死ぬのかもしれないが、俺にとっちゃ絶対強者なのは変わらないんだ。

人間側に立つてもヤバい。怪人側に立つてもヤバい。どないしろと。

「何ならチート能力を増やすかの？」

「マジで？ 良いの？」

「一個増やす度に千年間、生まれるのが遅くなるかの？」

「そんなくらい……いや、配下組織の結成に支障が出るのか」

大昔に生まれるってのは不老不死の奴にとっちゃアドバンテージなんだよな。過去から歴史知識でカンニングして有利な行動が出来るし。

ま、俺ってそんなに歴史に詳しくないし、いいか。ワンパンマン世界で有象無象の配下とか無意味だし。

「準備期間として現代の千年くらい前に生まれるとして何個チートを貰える？」

「2つじゃな」

「3千年も生きてワンパンで死んだのか俺」
貰えるチート候補は。

1. 眷属が血を吸えば俺も少し成長する。
 2. 俺が血を吸ったら魂を獲得できる。
 3. 目を合わせたら魅了できる。
 4. 状態異常に強くなる。
 5. 使い魔を作成できる。
- 以上だ。

なんとというか地味。

「魂を獲得しても多少の知識と技術が手に入るだけって。もうちよつと何とかならない？」

「研鑽すりゃ魂を利用して元人間の眷属を配下に出来たり魂の所持しとる異能を手に入れたりも出来る優良チートじゃぞ。これ以上は無理じゃわい」

ちなみにノーマル状態だと眷属はランダムな人型イエスマンを血液を代償にして生み出す感じだ。5の使い魔を選べば眷属作成に自由度が出るみたいだな。

バンパイア（血統書付）は眷属同士の子孫なのかもな。人間要素はないらしいし。

この中じゃ1と2かな。基本的なスペックが足りない。でもワンパンマン世界で小手先の技術はなあ……。

いや、サイタマが変なだけで武術や科学でS級になったヒーローもいるし捨てたもんじゃないか。

うん。人間の可能性を信じろ。基本性能の違う怪人とサイタマなしで何千年も対峙してきたんだ。やれるって。

ま、俺がその対峙する怪人なんですが。

「じゃ1と2で」

「うむ、それじゃ送り込むぞい」

「色々と便宜を図ってくれてサンキューな爺さん」

地獄に落とされるようなもんだが、神様に礼を言っておこう。チート能力は素直に嬉しいし。

ボンツと煙に包まれて目を開けたら薄暗い森の中だった。初期地点としてはまあまあだな。下手に城の中とかだと逆にやりづらい。

「ククク。サイタマが生まれる千年後まではやりたい放題なのよね。何をしようかしら」

ん？ 口調がおかしくね？

確かめてみたら物の見事にTSしてました。銀髪赤眼のボンキュツボン東欧美女です。

動画じゃ美形の男だったのに何で……。

一話 バンパイアレディ

どうも。ワンパンマン世界にTS転生したバンパイアレディ、カーミラちゃんです。

女に生まれてしまったものは仕方がないと百合百合しい妖しげな女バンパイアを目指して頑張っている所です。

試しに森に生息していた猿を仕留めて血を飲んでみればちゃんと糧になりました。魂をゲットしたオカゲで群れの位置も把握できるし完璧。これで人間が減んでも安心ですね。

はい、とりあえず今は怪人側として活動するつもりでいます。

サイタマが生まれる前に人間を滅ぼせば怪人側の勝ちじゃね？

と思いついたんで仕方ないね。時間切れになったら姿を消します。

「今はその人間を発見できないのだけれどね。もう3日、彷徨ってるわ」

怪人なので木の上で寝ても問題ないし何なら寝る必要もないんですが、こんな原始的な生活をチート転生したのに送りたいくない。

元現代人なので虫が湧く森ですつと暮らすとかメンタル的に無理。昨日なんて吸血鬼なのにヒルに血を吸われたし。

人間を滅ぼすにしても文明は維持しなくっちゃ。

「カーミラ様。野生のイノシシを捕獲しました。お召し上がりください」

「ありがとうございます」

「勿体なきお言葉」

スツと音を立てずに現れたのが私の生み出した眷属、ノイちゃん。

災害レベルは虎で大した強さじゃないけど、それでも普通の人間では勝ち目のない怪人。

猿の群れを乱獲した程度の血液で生み出せたし、とつてもリーズナブル。思ったより真祖の吸血鬼ってヤバイ。

ま、眷属を維持するのにも血液は必要だし現状じゃ増やし過ぎると痛い目を見るけどね。他の勢力に目を付けられるだろうしジワジワやらないと。

でも自分好みの黒髪ショートのナイスバディな美女を簡単に生み出せるこの力はベネ。夜のお世話もOKな絶対服従の配下とか別の意味でヤバイ。

ガチャで大当たりを引いた気分だ。もっとガチャして好みの美女眷属を揃えてハーレムを作らなきゃ。

「でも魂の蒐集を選択して良かったわ。まさか眷属の実質的な不死化を実現できそうだななんて」

血を材料に生み出した眷属も魂はちやんとある。今はまだ眷属が死んだら同一個体を再誕させる事は出来ないけれど、私の内部に魂を確保したまま外部端末を動かすように身体を操る形にまで持つて行ければ私が死なない限り眷属も死ななくなる。戯れにノイの血を飲んでみたら、そんな感触を得た。

死ぬことのない吸血鬼勢力が世界に広がったら人を滅ぼすなんて実は簡単なのではないだろうか。勝ったなガハハ。

「んあっー」

パーンとハゲマントに粉々にされる未来が見えて思わず悲鳴を上げてしまった。

そうよね。私が死んだら全部解決するとかワンパンマンのストーリー的にはむしろお約束な展開だったわ。

「カーミラ様!」

想像だけでハゲマントにダメージを負わされた私をノイが心配して慌ててくれている。

良い娘だ。うん。諸共死ぬ危険性はあるけど死なせたくないお気に入りには不死化処置が出来るよう頑張ろう。それ以外はもう野良でいいや。よく考えたら嫌いな奴が死なないとか逆に不都合だし。

今はそんな心配するような段階じゃないけどね。ノイの持つてきてくれたイノシシでも食べて英気を養おう。

そんなこんなで一週間。やっと人間の集落を見つけました。

マジで大昔の農村。日々の暮らしがやっとのギリギリ状態でガリガリ。うーん、マスそうだなあ……。

ここら辺の土地って痩せて大した作物が収穫できてないみたいなのよね。それなのに森には入ろうとしない謎の生活様式。もしや森に入るにも税金を払わなきゃ駄目だとか？

疑問に思っただけ聞いてみようかと村に侵入したら話が通じない。せやった千年前の海外やん。

「ニヤモゴウノオンゾ」

「ピッチフォークと言ったかしら。武器を向けてきたんだし一人くらいは殺して良いわよね」

食器のフォークを大型化したような農機具を向けて威嚇してきたのがいたんでサクツと血を吸って魂を奪いました。

村人が騒いで悲鳴を上げている。ククツ。怪人となつてから弱者を踏みにするのが楽しくて仕方ない。この全能感は癖になる。人間の血は野生動物よりも臭みがなくて飲みやすくて美味しい。

野生になつている青臭くて酸っぱい果実と品種改良されたフルーツくらいの違いはある。怪人は美味しいとは限らないし毒の心配もしなきゃいけないから人間が吸血鬼の主食になるのは仕方ないな、これ。

で、人間の魂を奪って発覚したんだけど、ここは西ローマ帝国が衰退して人口が減少した暗黒の時代である中世前期のヨーロッパだった。5、6世紀くらいかな。

移民に戦争に疫病にと史実でもヤバいらしいってアニメで見たことあるけど、ワンパンマン世界じゃ更に怪人が跋扈してる。

森に入らないのは怪人に襲われるから。何時、村が消滅してもおかしくない瀬戸際だったみたいね。

別に村が減びるのはどうでもいいけど、また野宿はな。近場に村もないらしいし、しばらくの拠点にしたい。

「そこのお前。死にたくなきゃ村長の家に案内しなさいな」

「ひゃ、ひゃい！」

「ノイ。今は村の人間を殺しちゃ駄目よ」

「仰せのままに」

魂を得てここらの言語をマスターした私は村長を丁寧に説得して

この村の実質的な領主になった。

国家滅亡の只中だし武力独立なんて珍しくもない。しばらくはこの農村を実効支配しようかな。

二話 怪奇、恐怖の寝取られ男！

しなびた農村を裏から実効支配したのだけど、思ったよりも村の重要度が増してる。

何故って眷属ガチャをあれから二人も引いたのに爺さんとオツサンしか出現しなかったから。今の私じゃ美女眷属は狙って作成できない。

ノイは本当に大当たりだったらしい。絶対に死なせないように注意しなきゃ。

でも村人に痩せてはいるけど美少女姉妹がいたのでハーレムは拡充できた。一人は人妻だったけれどね。

いつそ未亡人にして本格的にハーレム要員にしましょうかと囁いたら泣いて腰を振ったので、これはこれでベネ。心が満たされる。

眷属は何をされようと今のところ嫌がった事がないので新鮮だった。うん。人を滅亡させるのはまだ早いな。

むしろ保護して増やそう。人間牧場を運営するのだ。強力な吸血鬼の登場する作品に偶に出てくる設定だし、餌は豊富な方が良いよね。

やろうとしてる事はどう考えても怪人側の所業だし、神様も機嫌を損ねないでしょう。いや、自然破壊をし過ぎたら吸血鬼まで討伐対象になりそうだから気を付けなきゃいけないのか。面倒な。

「カーミラ様。野生動物の捕獲完了しました」

「やはりイノシシが家畜にするにはちょうど良いようですね」

新参眷属二人。ぶっきらぼうなオツサンがボンゴで爺さんがジェントルだ。名付けは適当。

が、任せた仕事を熟したよう報告に来た。今にも倒れそうなくらい痩せ細った人間を肥えさせるために狩猟と家畜化を任せていたのだ。

他にも食べられそうな植物を教えて採取させたり村の畑の肥料として森の土を持ってこさせたりしてる。最初に血を吸った村人の知識や聞きかじった現代知識の賜物だ。でも、まだ配下は周辺言語が話

せないから村人との意思疎通は私が通訳しなきゃいけないけれどね。

眷属はどうやら転生前の私の知識の一部を持って生まれてくるらしく日本語を話している。現代日本の知識もあるし怪人なのに村人よりも文明人に見えるくらいだ。まあワンパンマンの原作知識は聞いてみても誰も答えられなかったが。ここに関してはむしろ知られずに済んで良かった。何かの拍子で原作知識が拡散してしまう恐れがあったし。

言語の問題はノイがマスターしようと私の世話の傍ら頑張っている。ハーレム、いや性奴隷の方がらしいかな。の姉妹とベッドで頻繁に話しているし。

「そう。では引き続き治安維持活動と周辺怪人の探索を継続なさい。難民も場合によつては受け入れていいわ」

「了解しました」

今にも崩壊しそうな限界集落は私達が来た時から間違いなく改善に向かっている。少なくとも今月くらいは食べる食料に不安を覚えずに済む。これはゲルマン人に脅かされて隠れ住んでいるローマ人にとつては望外の幸運だった。

その証拠に明らかに村人の対応が変わってきているしね。

もう村長一家への信頼よりも私達に対する畏敬の感情の方が明らかに大きい。村長は私の代理人に過ぎなくなってきている。

現状に不満を持っているのは最初に殺した村人関係者と寝取ったキャサリンの夫くらい。

思ったより遙かに人間つて手懐けやすいな。

「そう思わないノイ？」

「確かにそうですね。まさか一月も経たずに懐柔されるとは」

「フツ。ねえキャサリン。ノイが貴女は淫乱だって」

「あん。言わないで。言わないで下さい」

「お姉ちゃん」

「ほらリリシアも見えてないでお姉ちゃんを舐めて上げないと」

「ああっお願い。やめて」

うーん。最終的に滅ぼされても後悔しないくらいには現状を楽し

めてるな。

キャサリンとリリシア姉妹も何とか眷属にして末永く弄びたい。姉は16で妹は13くらいだからもうちよつと成長したら魂を吸い取るか。

そんなことを考えながら私は性行為に耽っていた。



「ちくしょう、あの怪人共！」

「おいイワン。酒はその辺にしとけ聞かれちまう」

「女房を浚われて飲まずにいられるかっ」

キャサリンの夫は酒を飲んでやさぐれていた。滅亡寸前の村落で、いや追い詰められていたからこそ熱々であった新婚家庭の花嫁を怪人に生贄として差し出す羽目になったからだ。そのイワンを苦笑しながら他の村人が慰めている。

怪人が村にやって来た時に血を吸われて殺された被害者の事もあり当初は他の村人も怪人達を苦々しく見ていた。

だが、今現在とは言うともむしろ逆に怪人は歓迎されている風潮すらあった。

憎きゲルマン人の襲来によつて交易網が寸断され、無限に侵食し続ける森を伐採して利益に還元する樵きこりの稼業は破綻し村は滅亡寸前であった。

意図的に特殊な呪術によつて土地を弱らせて切り開いた村落では畑を耕してもろくな作物は育たない。食料は全て定期的によつてくる商隊任せで自給自足など村人達にとつても初体験であったのだ。

ゲルマン人達がやって来た森林地帯に生息する野生動物は獰猛な肉食動物ばかりで狩人が逆に狩られることも多い。場合によっては怪人に後を付けられて村が壊滅する危険性もあった。森の中への採取は常に滅亡の危機と引き換えの博打なのだ。

実際に森の中から怪人達が現れてこれまでかと思われた村落はしかし、怪人達の気紛れで生き残る事が出来ている。

豊富な森の恵みを採取し、獰猛な肉食動物を家畜とし、村人達にもよく分らない呪術によって弱った土地を一部だけ再生させ、これ以上ない程の利益を村は受け取っていた。

正直な話、既に一人二人の生贄など村では必要経費だったと納得済みなのだ。

その程度の人的損失など珍しくもない。森を自分達で探索するより被害は圧倒的に少ないのだ。

これで花嫁が怪人に命を奪われていたら他の村人もイワンにもつと同情していただろうが、怪人は花嫁を性的に弄ぶだけで命を取ろうとはしていない。

こうなるとイワンはただ女を寝取られただけの甲斐性無しに過ぎず、影で他の村人に嘲笑われる事すらあった。

今、イワンが飲んでいる酒だって怪人達が採取してきた果物から作られた物なのだ。今更、怪人を排除しようなんて村人は誰も思っていない。

「ちくしょうちくしょうちくしょう」

嘲笑った村人の声が怪人の含み笑いが女房の享樂の音がイワンの中で反響し、ついに男は人間であることを止めた。

【許してなるものかあ!!】

身体が二倍以上の大きさに膨れ上がり、ドス黒い血管が身体中に浮かび上がり、男は怪人として新生した。

「ヒイイツ」

【俺は怪人、寝取られ男。この村諸共、怪人を潰す!】

大声で咆えた男を村人達は恐怖の眼差しで見つめ、たまたま通りかかったボンゴとジェントルに発見された。

「フオフオ。災害レベル狼。雑魚ですな」

「そうだな」

真祖の吸血鬼が眷属、怪人バンパイアは災害レベル虎。

人数と武装さえ整えれば普通の人間にも倒せる災害レベル狼とは次元が違う。そんなことも知らずイワンだった怪人は二人に激情のまま襲いかかった。

「良いお土産になりましたよ。女王の前に生かして連れて行くとしたらどうかの」

【グガアツ】

ジェントルの掌底によって寝取られ男の足の骨が粉碎され怪人は地面に崩れ落ちた。

その2メートルを超える怪人の大きな身体をボンゴが片手で掴み引きずっていく。

【止めろ。やめろおー!!】

暴れる怪人の手を溜息を吐いたボンゴが軽くねじ伏せると哀れにも寝取られ男は吸血鬼の女王の前に引き連れられて行ったのだった。

三話 サイタマ異星人説

生み出した眷属に村の治安維持を任せていたら村人の一人が怪人になったらしく引き連れてきた。人間時代の名前はイワンでキャサリンの夫だつたらしい。怪人名は寝取られ男。ね・と・ら・れ・男。直球ネーミングに腹筋をヤラレタ。怪人名って自分で決めたんだろうか。面白すぎるんだが。

「イワンっ！」

「おっと」

怪人になってしまった夫を見てキャサリンが涙目で駆け寄ろうとしたので抱きしめて拘束した。

場合によっては無理心中なんてツマラナイ結末になってしまいかもしれないからな。単なる人間に過ぎないキャサリンを怪人に接近させるわけにはいかない。

【おのれ、妻を放せ！】

怪人になっても愛情は変わらないのか、独占欲と嫉妬心で憤怒してるのかイワンが咆える。

ボンゴに両腕を背中側で拘束された上に身体を地面に押し付けられているんだが、今、一瞬だけが抵抗したな？

怪人になって暴れた際の周辺被害から災害レベル狼だとボンゴとジェントルは判断したらしいが、何らかの異能持ちの可能性があるな。試してみるか。

「ククツ。可哀想にねえイワン。お前の溺愛する女は既に私の物。さっきまで激しくベッドで喘いでいたのを知ってる？」

「や、やめて」

キャサリンの美しい金髪を一筋、手で掬ってキスをする。サラリとした感触が飽きない。

耳元で囁く私にキャサリンは頬を赤く染めて目を潤ませる。拘束した手がキャサリンのささやかな胸を撫で回して愛撫する。

プチプチとキャサリンの着ている服のボタンを外して肌をはだけさせればイワンは面白いほどに憤怒して暴れ狂った。

【殺じゆ。ゴロジュー!!】

もはや真面な言葉すら話せなくなつたイワンの抵抗は更に激しくなり、災害レベル虎であるボンゴが拘束するのに苦労している程だった。

やはり、強化されている。もしや細胞が更に変異し始めているのか？ 場合によっては一気に虎を飛び越して鬼クラスの変異をするのかもかもしれない。危険だろうか？

だが、この程度のリスクを背負わねば何も出来ない。格下が覚醒して一気に強くなるのがワンパンマン世界だが、理不尽なまでの力量差に踏みにじられるのもワンパンマン世界だ。私の災害レベルは鬼。最下級の狼にビビる訳にはいかない。

「フツ。イワンが怒ってるわよキャサリン」

「アナタ……」

「言つて上げなさいな。実は満更でもなかったって」

囁く私にキャサリンは頬を染めた。

連日連夜の性行為にキャサリンが調教され始めていたのは本当だ。不本意だろうが耳で睦言を囁かれては身体が反応してしまう。

だが、イワンから見てそれは裏切り行為に他ならない。騒がしかったイワンの声が静まりキャサリンの表情を直視した。

「ぬうこれは!？」

拘束していたボンゴが弾き飛ばされイワンが無言で立ち上がった。

【殺す。妻諸共、殺してやる】

圧倒的な怒気にキャサリンは涙を流しながら座り込んだ。

その様子を私は呑気に眺めて。

「やってみれば?」

そう微笑んだ。

警戒して動き出そうとしていたボンゴ・ジエントル・ノイを片手で制止し、突進してきたイワンの体当たりを反対の手で押さえ込んだ。少し痺れた。今の一撃は虎クラスは間違いなくあったわね。

しっかし背後にはキャサリンがいるってのに、寝取られたと思つた

瞬間に殺そうとするとは。流石は怪人、寝取られ男。憎しみ無念・嫉妬の感情が渦巻いている。

「こんなもの?」

【ぬおおおおおおおっ!!】

拳の連打が私の全身を殴り続ける。私は特に防御せず甘んじて受けた。

ふむ、微妙に痛いな。血は流れないにしても青痣くらいにはなるかもしれない。ま、その程度のダメージなんて吸血鬼ならないうなものだけだ。

それに時間が経つにつれて目に見えて力が弱まっていく。疲れたとか息切れしたとか、そんな理由じゃなくこれは。

「へえ。殴ってる内に多少はスッキリしたのかしら。女を殴るタイプにも見えないしね」

【な、何故、防がない】

「防がなきゃいけないほど脅威じゃないし、虎クラスの攻撃を受けてみたかったから」

結論。コイツは災害レベル狼だ。

激情によって一時的、数十秒間くらいかな? 肉体をエネルギーの過剰放出によって強化しているだけだ。

嫉妬の感情をエネルギーとして使用できるのは利用価値がありそうだが、それだけね。

怪人化による細胞の変異を再び起こした訳でもサイタマのように肉体のリミッターを外している訳でもない。

生物の持つ成長の限界『リミッター』

それを限界を超えた訓練で常時外していたからこそサイタマはあそこまで強くなったんじゃないかと私は思っている。

①怪人と戦う↓②瀕死状態↓③特訓↓④限界突破↓①怪人と戦う
こういうループを繰り返したんじゃないかって話ね。

要はドラゴンボールのサイヤ人達が自分の限界を超えた修行で瀕死になって急激なパワーアップをするようなもの。正直、真似できるとは思えない。

サイタマ以外だって似たような事をやった人間はいるだろう。武術家なんて自分自身を越える為の修練の道を歩む人種だ。誰もがサイタマと同じ境遇を乗り越えれば急激なパワーアップをするならS級ヒーローの武術家達はもつと強くないとオカシイ。

なら、何故サイタマだけがああも強いのか。簡単だ。

ドラゴンボールで例えるならばサイタマがサイヤ人だったからだ。選ばれた人種なのだ。

①怪人と戦う↓②瀕死状態↓③特訓↓④身体を壊す

おそらく、これが常人の末路だ。誰もがサイタマになれるとは私は思わない。

そしてサイヤ人全員がキチガイな修行馬鹿である訳がないし、修行馬鹿がサイヤ人である可能性も低い。

故にサイタマは特別なのだ。

それに本家のドラゴンボールのサイヤ人達だって常時瀕死になる修行をしている訳じゃない。強敵を打倒するためにインフレ的成長をするのだ。

競い合うライバルもいないのにドラゴンボール的インフレである成長リミッターの解除を常時やっていたサイタマが如何にオカシイかよく分かるだろう。

常時とは言わないまでも一回でいいから成長リミッターを外して強化したサンプルが手に入れば、多少は後追いも出来るかと期待したのだけだ。

残念ながら期待外れだったらしい。

「もういいわ」

【え?】

私の攻撃によって腹に大穴が空いた怪人、寝取られ男が腹を二度見して遅れて激痛に叫んだ。

悠々と私は怪人の背後に回り込み血を吸ってイワンの魂を取り込んだ。

【キャサリン】

最期に怪人、寝取られ男は妻へ手を伸ばして灰となって消えていっ

た。

血を吸った事による強化は人間ときさほど変わらないわね。所詮は災害レベル狼か。

ま、研鑽すれば嫉妬のエネルギー化とエネルギーの過剰放出による肉体強化の異能が手に入りそうだし満足しておきましょうか。

四話 最強の種族

イワン。怪人、寝取られ男の魂を取り込んでから未亡人となったキャサリンは塞ぎ込んでいたけれど、私なら眷属として復活させる事が出来ると囁いたら以前にも増して私に奉仕するようになった。亡き夫に対する愛情と、快楽に乱れる事への罪悪感に対する免罪符を手に入れたのが理由かしらね。

調教が進んだキャサリンはもう内心では私に抱かれる事を嫌がっていない。そんな自分への自己嫌悪が塞ぎ込んでいた理由。

良いわね。生前は理解が出来なかった寝取り物が人気な訳が分かった気がする。

「どうでしょうか。オリーブの実を石臼でひいて圧縮機で油を搾油した物です。マッサージオイルの再現が出来てますでしょうか」

「ええ、良い感じね。フフツ。でも胸で性的マッサージをするなんて変な知識が伝わったものよね」

私がキャサリンに夢中になっっているのが気に食わなかったのか、眷属のノイも競うように私に奉仕をするようになった。

どうやら眷属の吸血鬼ではなく、人間が寵愛を受けていることにプライドを刺激されたらしい。積極的に性に関する知識を現代日本の記憶から掘り起こしているようだ。

良い感じにエロくて退廃的な組織になって来ている。やっぱり吸血鬼とはこうでなくてはいけない。強くて美しくて残酷で、だけど何処か救いがある。呑み込まれてしまうような妖しい魅力がある。悪だと分かりきっているのに人間達が自ら望んで血を献上しに来るようなそんな存在。

拠点としている村にも何人が吸血鬼の眷属になりたいと自ら私のハーレムに加わろうと模索してる女性がいることを知っている。

別に隠すように言っていないからキャサリンから人間が吸血鬼へ生まれ変わる事を聞いたのだらう。密かに色めきだっている。不老不死。遙か太古から人間が求めてやまない物だ。

「人間の眷属化は魂に関する秘術だから研鑽しても私にしか出来ない

のよね。何とかバンパイア一族全体へ伝えられたら良いのだけれど」
「……その必要があるでしょうか」

「眷属同士で普通に子供を産む事は可能だと思うけれど、それだと普通の怪人一族と変わらないのよね。吸血鬼って人間を仲間に取り込めようになつてやつと一人前だと思ふの」

「何故、あのような弱者を仲間などに」

「クスクス。不満そうね？」

確かに人間、いや一般人は弱い。怪人で最弱の災害レベル狼を相手に人を集めて武装を整えて包囲してやつと打倒できる戦力バランスだ。

だが、それは単に非戦闘員と最弱の兵士との戦力比較をしたというだけの話に過ぎない。

ワンパンマンの原作に登場した地底人に深海族は明らかに生まれながらの怪人一族であり、王を考慮に入れなくても一体一体が災害レベル狼以上の実力を持っていた。地底人は単体で災害レベル虎で、深海族は10体で虎クラスになるんだったかな。この差は軍隊としての練度や生物学的ステータス、種族内での序列闘争を考慮に入れれば不自然ではない。地底人は後で内乱が勃発したようだしね。武力を尊ぶ種族だったのでしよう。

それにも関わらず彼らは素では災害レベル狼に敵わないはずの人間に追いやられて地底や深海に隠れ住んでいた。いや、他にも竜クラスの怪人が何人もいたにも関わらずヒーロー協会を潰す為に怪人が集まって怪人協会を結成するくらいに怪人は人間に追い詰められている。

これは明らかにサイタマ一人の功績ではない。

S級ヒーローは確かに災害レベル鬼にすら負ける事のある人間の弱さの象徴であるが、同時に災害レベル竜を葬る事の出来る人間が何人もいるという人間の強さの象徴でもある。

地球に生息する何十種族もの怪人の強者を集めただろう怪人協会に複数の惑星から人材を集めただろう怪人ボロスの暗黒盗賊団ダークマター。

怪人のトップ層を集めただろう組織の幹部達が災害レベル竜である。そしてそれに対抗していたヒーロー協会は基本的には人間だけで構成された3年前に発足したばかりの組織である。

明らかに人間が強すぎるのだ。サイタマがいなければ人間は滅んでいたとワンパンマンのファンはよく言うが、本当にそうか？

災害レベル竜であるムカデ長老はS級ヒーロー1位であるブラストに負けて逃走したという。サイタマ以外にも災害レベル竜が泣いて逃げ出す強さの人間はいるのだ。

それに天才科学者のジーナス博士。若返りの研究を成功させて老いに打ち勝つたばかりか、自らのクローンを作成して共に研究したというマッドサイエンティスト。

彼の組織、進化の家は災害レベル鬼がゴロゴロしていた。強すぎて制御できなかったとはいえ、災害レベル竜である阿修羅カブトを作成できた。3千年を生き抜いた私と同等の怪人を生み出したジーナス博士はまごう事なき大天才と言って良いだろう。

だが、ジーナス博士は確かに天才ではあるが、科学によって尋常でない成果を残した人間は他にもいる。

一発屋だが、科学者フケガオの開発した究極のステロイド『上腕二頭キング』を摂取した弟のマルゴリは災害レベル鬼、もしくは竜クラス巨人へと変貌した。

S級ヒーローのメタルナイト・駆動騎士はそれぞれ別の科学者が生み出した災害レベル竜に届きうる機械だ。機械であるからには量産できる可能性がある。

他にもS級ヒーローの参謀である童帝は天才的頭脳を持ちS級に相応しい成果を上げているにも関わらず、未だに10歳の少年なのだ。

サイタマの弟子であるジェノスはクセーノ博士に改造されたサイボーグだ。確かに本人の経験や努力もS級ヒーローになれた大きな要因だろうが、クセーノ博士はその気になれば何人ものサイボーグを生み出せるだろう。S級ヒーローのサイボーグ集団。悪夢かな？

ジェノスの故郷を滅ぼした狂サイボーグをサイタマが既に倒した

可能性があるかという話になったとき、ジェノスは倒したのならその強さでサイタマの記憶に残っているはずだと答えた。思い出補正を加味してもそんなサイボーグを生み出せる人間がいることを示唆している。

狂サイボーグを生み出した候補である「組織」と呼ばれるロボット怪人を送り込んだウィラン組織は機神ツシモフと機神G5という災害レベル鬼の機械を作製可能だ。おそらくは人間が背後にいるものと思われる。

S級ヒーロー2位、戦慄のタツマキは災害レベル竜を容易く倒す圧倒的な超能力を誇る。研究機関で英才教育を受けていた過去があるが、妹であるフブキは姉とは比べ物にならないシヨボい超能力しか扱えていない事から、超能力は血筋で遺伝はするが努力よりも才能で出力が決まるものと思われる。人間種族は災害レベル竜に匹敵する才能を持つ異能者が突然、生まれてくるのだ。

S級ヒーローの武術家バングは竜以上の怪人ガロウを育て上げた事で有名だが、本人も災害レベル竜の怪人を打倒できる強さを持つ。兄に己と同じ実力を持つボンブがいて別流派の達人同士である。素手で災害レベル竜を打倒可能な流派が2つも人間社会にはあるのだ。

同じくS級ヒーローのアトミック侍は3人のA級ヒーローを育て上げている。体系化された流派は間違いなく人間を圧倒的な強者に変える。

災害レベル竜を打倒できる可能性を持つのはヒーロー協会だけじゃない。

S級賞金首、音速のソニック。彼はS級ヒーローに匹敵する忍者の里で育成された暗殺者だ。

非人道的な手段を用いたのだろうと定期的にA級やS級の卵を育成して世に送り出す隠れ里が存在した時点でもう怪人と人間の戦力比を比べる事自体が間違っている。

「人間が弱い、ねえ……」

笑ってしまう話だ。単に人間の敵を人間が生み出しているだけで最初から怪人と人間の間にはかけ離れた断絶がある。

だが、だから怪人側から人間側に鞍替えすれば良いかと言えば話が違う。

怪人側のラスボスは少なくとも地球では災害レベル神だろう。宇宙規模の話になると神以上なんて新たな階級が出てくるのかもしれないが、それは置いておいて。

怪人ワクチンマンは地球意思によって生み出されたと語った。地球意思と神がイコールではない可能性はあるが、もしイコールであったのなら。

神を滅ぼせば地球も一緒に滅ぶのでは？　そういう疑問を抱かずにはいられない。

少なくとも地球意思は死ぬだろう。普通に意思のなくなった地球が残るのかもしれないが、それはつまり地球の死骸の上で暮らすということだ。

サイタマがそれで困るシーンが漫画で描かれるとは思えないから人間の一生分の時間は間違いなく平穩に過ぎる。でも、その後は？

吸血鬼は不老不死なんだぞ。地球が死んで自然が消えて生物のいなくなつた星でも生きろというのか。

駄目だ。サイタマ陣営には決して入れない。認めるわけには行かない。

「覚悟しなさいノイ。これから嫌でも人間の強さを思い知る羽目になるわ」

強くなる必要がある。最悪の場合に備えて他の星へ渡る術を手に入れる必要がある。

その為にはやはり人間を仲間に取り入れなければならない。
人間を滅ぼす為に。

五話 原作との戦力比較

「コオーツ」

深呼吸を一つして、腰を落とし右肘を背後に構えた。

体内のエネルギーを一ヶ所に集めるように意識をすると右肘から鋭利な鎌が生え始める。原作の怪人バンパイア（血統書付き）も行っていた武器生成。

吸血鬼は血を材料に衣服や武装といった無機物を生成できるのだ。肉体のコウモリ化も含めた生まれながらの異能。

私が生み出した眷属達も可能な基礎技能だが、習熟度があるらしく現状では意識を集中させないと行えない。

「シツ」

気合いと共に右腕を振り回せば周囲に生えていた樹木が一瞬で輪切りになった。

刃の届いていないはずの樹木すら切れている事から衝撃波が発生したのだと思われる。災害レベル鬼の身体能力は物理法則を凌駕するのだろうか。

「おおっー」

見学していた眷属と人間達から歓声が上がった。彼らからすれば視認できない速度で一瞬で樹木をぶつ切りにされたのだ。畏敬の念が湧き上がってもおかしくはない。

私はそれを微妙な顔で見つ、切り倒した樹木を小屋に運んでおくよと言いつけた。樵としての稼業は既に破綻しているが暖を取る為の薪や新たな家の建築材など需要は多いし、無駄な自然破壊をしていると判断されたら後が怖い。

まあ工業廃水なんかの分かりやすい自然破壊じゃなきやOKだとは思うけれどね。それでも樹木怪人なんか仲間敵とか言いながら生まれる可能性はあるが、それは単なる生存競争なので踏みにじって良い。

問題なのは。

「カーミラ様どうぞ。お飲み物です」

「ありがとう。ねえ、ノイ。貴女は今の動きが見えた？」

「いえ、私などにはとても」

「そう……」

災害レベル虎であるノイに視認できないのはある意味、仕方ない話ではある。そもそも真祖の吸血鬼である私がノイを生みだしてから、まだ一月も経ってないのだ。

その上、材料は猿の群れの血液。食料として計算したら人間の集落を一週間も養えないだろう。破格である。

十分チートだ。美女だし、素直で健気だし。

でも、S級ヒーローのアトミック侍なら今の一瞬で周囲の樹木を粉微塵にしてタバコを吸う余裕があったはずだ。武器も長物なら何でも良い。爪楊枝で怪人をバラバラにした描写があつたしね。

私の実力はせいぜいアトミック侍の弟子であるA級ヒーローの一人と同等といったあたり。この実力で周囲の誰も付いてこれないのはマズい。

「怪人化の秘法か」

怪人協会のギョロギョロが語っていた怪人化で起こる細胞変異の繰り返し。人としての死を繰り返す事で上位の怪人へと変異するサイタマのリミッター解除の怪人版。地球の全ての生物が健全な営みを続けていけるよう存在する神様の設計図、成長リミッター。これを解除しないままに爆発的な成長をするもう一つのバグ技。

おそらくこつちなら理論上は私達でも真似できる。問題は吸血鬼の再生能力が逆に足枷になって尋常な地獄では起こらないだろうという事か。

「いや、まだ早い。吸血による強化も技術の研鑽による強化も試していない。それで外法に手を出しても三流怪人にしかない」

原作で起こった怪人の急激な弱体化を思い出して私は首を振った。ワンパンマン世界はおそらく、ドラゴンボール世界と同じく鍛錬での強化にこそ重きを置かれている。精神的なベクトルがプラスかマイナスかでリミッター解除か怪人化か分かれるんだろう。原作に登場した怪人王オロチ・ヒーロー狩りガロウ・ハゲマントのサイタマは

全員が同じサイヤ人的な人種なのだと思う。似たような魂を持っているのだ。

彼らと同じように壁を乗り越える為には正攻法での鍛錬の下積みが必要不可欠。

「面倒くさ」

別に私って強くなる事にカタルシスを覚えるような人間じゃないのよね。

エロと蹂躪は大好きだけれど。もっと楽にチート転生者としてブイブイ言わせたい。

いいや、どうせ時間は唸るほどある。百年くらい遊ぼう。

「リリシアを呼んできて。ロリを楽しみたい気分」

「かしこまりました」

「あの。その。お友達を呼んでも良いでしょうか」

「ん？ 家の前で様子を窺ってる娘達？ いいわよ」

「ありがとうございますっ」

キャサリンの妹であるリリシアを伽に呼んだらオマケに数人の女の子が付いてきた。

全員がリリシアと同じ年頃で、吸血鬼の眷属になりたいとハーレム入りを目指している女性達とは別人。

何が目的なのか最初は首を傾げたが、オズオズとこちらを見上げてくる態度でピンと来た。こりゃ性に対する好奇心ね。

リリシアから色んな話を聞いて耳年増になって身体を持て余したんでしよう。この年齢なら年上のお姉さんに憧れる事も多い。

私は美男美女がデフォルトのバンパイアの真祖だし、魅了の異能を持たずとも素の魅力で人間がなびいても不思議じゃないしね。

流石にバンパイアの眷属レベルの美貌の持ち主はキャサリンとリリシア姉妹だけだったが、頬を赤らめて見上げてくる様は可愛らしくて魅力的に映る。

一夜の相手くらいはしても良いわね。どうせならお互いに慰め合わせて性癖をねじ曲げて上げよう。

「フフツ。今日は特別にうんと優しくしてあげる。皆、こっちにおいで」

「は、はい」

「脱水症状が起きないように果物を絞った果実水を寢床に持ち込んで、一晩中、楽しんだ。」

「こういう日が続けば良いのに。」

六話 中世のヒーロー協会

ワンパンマン世界にやって来て半年。私はダラダラと最初に居着いた村で遊び呆けていた。

周辺には特にこれといった脅威もなく怪人の姿も見えない。最初からいかなかったのか、災害レベル鬼である私に恐れをなして逃げ出したのかは不明だが、全く姿を見かけない。ワンパンマン世界にあるまじき平和な日々である。

ま、それもそうか。原作が異常だったのよ。災害レベル鬼の深海王と地底王と天空王の三つ巴で覇権を争っていたなんて本人達が言うくらいなのだしね。

単に格下相手にイキって災害レベル竜からは逃亡してただけだと思うのだけれど。災害レベル竜のムカデ長老あたりは大昔から生きていたはず。

それでも数千年続いただろう種族の長が災害レベル鬼なのに、ロン毛を大事にしてたり着ぐるみが脱げなくなっただけなんて理由で災害レベル鬼がポンポン誕生していた原作は何かがおかしいのだけど。

ギャグ漫画要素を深く考察しても無駄か。怪人化するのはそういうモノだと思っておこう。

でも、出落ちで終わった天空王あたりがそこまでイキれるのなら私も羽目を外しても良いのでは？ 村じゃなくて国くらいなら支配下に置いても構わないのでは？ 昨今はそんな気分が拭えない。

あまりにも平和で身体がムズムズしてくる。眷属も増やしすぎると生態系が崩壊しそうだから我慢して、人間の眷属化を目指して研鑽するに留めているし。

この半年で変わった事なんて怪人、寝取られ男の持っていた異能。嫉妬エネルギーの獲得とエネルギー過剰放出による身体強化技術の習得だけ。

嫉妬エネルギーは私とは相性が悪くてあまり出力を得られないし、エネルギーの過剰放出はせっかくなか蓄えた血液を消費してしまう上に災害レベル竜に届く気配は全くないしで、大した強化には繋がらな

かった。間違いなく身体能力は強化されているのだけだね。災害レベル狼から虎へ格上げされる程度の強化では鬼の上位クラスに届いたかも怪しい。上の階級は同ランクでも実力に大きな隔りがある。「漫画が読みたい。アニメが見たい。ゲームがしたい」

何より暇。娯楽がない。エロと美食を追求するくらいしか楽しみがない。

昔の貴族階級は下層民を辻斬りして遊んでいたなんて話が残っているけど、実は残虐なんじゃなくて暇すぎて苛ついていただけなんじゃないかしら。

そりゃ立身出世を目指して英雄になろうと武術を磨く人間が多かった訳ね。そっちの方が絶対に楽しそうなもの。

「申し訳ありませんカーミラ様。ボンゴを派遣しましたが、村の地図に残っていた町は既に滅亡していたらしく文明を感じさせる物は発見出来ませんでした」

「そう、仕方ないわね。今はローマ帝国の衰退時期のはずだし」
西ローマ帝国が滅び、東ローマ帝国が細々と千年近く続いたのだったかな。原因はアツティラ。

野蛮人と恐れられるガリア人の中でもひととき恐れられるヘルウェティイ族ですらビビるゲルマン人すら追い散らしたフン族の親玉である。

ちなみに言ってるのはローマ帝国であり、ローマ帝国はヨーロッパを支配した歴史上唯一の帝国だ。

有名なアールサー王はローマ帝国の言う野蛮なガリア人であり、物語上で闘争していたのはフン族に追い散らされたゲルマン人である。

文明を滅ぼすことに掛けてアツティラの右に出るものはいない。中国を統一した始皇帝は騎馬民族こそが中華を滅ぼすと占い師から託宣を受けて歴史遺産の万里の長城を築き上げた。宇宙にある人工衛星にすら姿がクッキリと映る巨大建築物を作り上げてでも戦闘を避けようとしたのだ。

その予言が正しいというかのように中国は歴史上、遼・金・元・清と四度も騎馬民族に支配されている。

世界史は騎馬民族によって揺り動かされてきたのだ。

と、ゲームで言ってた。

「アツティイラはこの世界なら怪人のような気がするわね。文明を滅ぼす行動はそうとしか思えない」

ん？ ヤバくないか？

アツティイラは酒宴の席で突然死したのよね。怪人ならその程度で死ぬはずがない。

それに架空の物語に過ぎないアーサー王物語。円卓の騎士ってワパンマン世界で解釈するとまんまヒーロー協会じゃない？

今は5、6世紀。ちやうどアツティイラやアーサー王が活動している時期で……。

あ、千年間の準備期間が欲しいって言ったのに1500年前に飛ばしたのってもしかして。

「失礼します女王。帰還途中でゲルマン人の襲撃から生き延びた難民を発見、保護しました。どうやらラウンドナイトと自称する者達によつて庇われた模様ですな。難民の中にB級ナイトの生き残りが混じっていて女王との面会を望んでいるのですが」

帰還したボンゴによつて私の予想は当たっているのだと証明されてしまった。

B級ナイト。つまり12人の円卓の騎士がS級な訳ね。

こちら辺に怪人がいなかったのは災害レベル鬼や竜とS級ヒーローのぶつかる最前線だったからか。

私もさつさと逃げりや良かった。

七話 怪人一族

ラウンドナイトのB級ナイト。これがB級ヒーローと同じ階級なら災害レベル狼を単独で対処できるくらいの実力になる。

でも原作じゃA級ヒーローが災害レベル虎をボロボロになりながら死闘の末に倒したかと思えば、一撃で災害レベル鬼を始末するような奴がいたりするのよね。B級1位の地獄のフブキはA級上位の実力を持っている上に相性によっては災害レベル竜と渡り合える可能性があったりと階級で戦闘力は正確には測れない。

眷属で簡単に蹴散らせる可能性もあるが、私ですら問答無用で討たれる可能性がある。

その上、人類の味方だからといって本当に敵に回して良いかも分からない。最終目的を考えるとアツティラに加勢した方が良くに決まってるんだけど、怪人バンパイアを奴隷階級にして従えたりしそうなのよね。歴史的な人物像だと。

とりあえずは様子見かな。

「いいわ。B級ナイトとやらを連れて来なさい」
「はっ」

ボンゴは頭を下げると家を出て行った。ちなみにこの家は元村長宅。村長一家は近隣に住む親戚の家に引っ越しさせた。

狭っ苦しくて古くさいが時代を考えると仕方ない。我慢して使っ
てやってる。他の村人より学はあるから小間使いとしては村長一家は便利だし殺さなかった。感謝して欲しい。

ビクビクしながらゴマすりをしてくるウザったい爺を思い出しながら自分の寛大さに感心しているとボンゴが難民を引き連れて戻ってきた。

これがB級ナイトか。ボロボロになった鎧に剣。泥で薄汚れた外套を纏った集団。オマケに代表はむき苦しいオッサン。

「我々はキャメロットから参ったラウンドナイトと申すもので……」

「チエンジ」

「はっ」

「挨拶は横の可愛い女の子にさせてくれないかしら。むさ苦しい男となんて会話する気になれないわ」

私の発言にヒソヒソと「おい、どうするよ」「どうって、そのくらいなら譲っても」「いやだが、リーダーは俺だぞ」ってしばらく内輪もめをしていた様子から思ったより一枚岩な組織ではない事が窺えた。

原作のヒーロー協会同様、我が強いな。たかが村の代表に頭を下げねばならない屈辱と、見下していた部下が逆らった様子に代表は面白くなさそうに顔を歪めた。

馬鹿にしたようにそんなリーダーを見るメンバーもいて、チームとして上手く纏まっていない。町が滅亡した故の急造チームなのでしようね。そうじゃなきやお粗末すぎる。

「失礼しました。私達はキャメロットから派遣されたラウンドナイトのB級ナイトチーム。カマセ部隊です。怪人一族ゲルマン人から避難を引き連れて逃亡中にボンゴさんと出会い、補給と難民の受け入れをお願いしに立ち寄った次第です」

「カマセ。部隊長の名前かしら。さっきの人？」

「え、ええ。何故それを？」

「何となくね」

カマセか。こりやチームで災害レベル虎あたりかな。B級ナイトでも下位チームな気がしてきた。

いや、ワンパンマンだと逆に変な名前の奴が強者だったりするからな。ブサイク大總統なんてブサイクを馬鹿にされ続けた怨念で災害レベル竜に至った化物すらいるし。私の転生先が美女バンパイアで良かった。ブサモンなんて種族名まで付けて弄られるブサイクモンスターに転生するくらいなら例え災害レベル狼スタートだったとしても美女バンパイアになるわ。

「怪人一族、ゲルマン人。恥ずかしながら噂に聞くだけで詳細は知らないのよね。その情報と引き換えに難民の受け入れと補給は請け負いましょうか。もう近隣に出没していたりするの？」

「ありがとうございます。はいゲルマン人は……」

B級ナイトの少女が言い終わらない内に悲鳴と笑い声が村に轟い

た。

「もう村に侵入したみたいですね」

ゲツソリした顔で少女は溜息を吐いた。

「グハハハハッ。我々はアングロ・サクソン七大王が一人、憤怒のラー
ス様の配下だぞっ！」

「早急に頭を垂れる。我らが寛大な対応でいるうちになあ！」

「ヒイイツ」

「ゲルマン人が、この村にまで来やがった！」

「野郎、お前らのせいで餓死した奴もいんだぞ。誰が頭を下げるかっ
！」

「良からう。ならば死ねえい！」

現場に辿り着いた時にはもう騒乱が起こっていた。ふむ、群の数は
30ちよいか。何匹かには逃げられてしまうか？

ボスならともかく明らかに格下の怪人一族の雑魚に負ける気はし
なかつた私はそんな計算をしていた。怪人達を呑気に見ている私を
心配してかB級ナイト、カマセ部隊の少女が前に出て言った。

「怪人がこんなにもつ。私達では撃退仕切れません。時間稼ぎをする
ので村の方を連れて脱出をお願いします！」

「おい、シノン。お前勝手に何を言ってやがる！ 誰が時間稼ぎなん
ざするかっ！」

「ええ!? カマセ隊長、戦わないんですか!？」

「馬鹿が、死ぬじゃねえか。もう難民は村に引き渡した。貰った金の
分は働いたんだ、これ以上は契約外。守って欲しけりやもつと金をよ
こせてんだ！」

うっわ、マジか。ここで仲間割れに敵前逃亡するのか。流石は中
世。原作ほど倫理感が高くない。

唾然とした私を置いてカマセ隊長他数名のカマセ部隊が逃亡しよ
うと走り始めた。怪人とは逆方向に。残ったのは女隊員シノンを含
めた3名。怪人の半分はいたのに残った人数はこれだけ。なるほど
御恩と奉公か。意外と中世の騎士ってビジネスライクで利益が得ら

れなきや従わないっていうしね。

だが、ヒーロー協会を思わせる騎士の理想と語られたアーサー王の配下がそれはマズいんじゃないの？ ああ、だから左遷されたのか。色々と納得のいった私は身体の一部をコウモリと化して密かにカマセ部隊の後を付けさせた。アイツらなら別に食つてもいいでしょ。でも今は怪人ゲルマン一族の対処を優先しよう。死者はまだないけど怪我をしてる村人も多い。

怪我で済んでるのを見ると災害レベルは狼。カマセ部隊が時間稼ぎは可能だけど負けるつてことはアイツらも個人で狼クラス。うん、雑魚しかいない。

「ボンゴ・ジェントル・ノイ。逃がさないよう注意。怪人一族ゲルマン人も出来るだけ魂を吸い取りたいけれど無理なら殺して良いわ」

「御意」

影のように現れた眷属達が頷いて、蹂躪が始まった。

「ば、化物。血を吸う化物だっ！」

「貴様らも怪人だろうが。人みたいに情けない声を上げるんじゃない！」

「うわあ！ 隊長、コウモリが、コウモリが首に噛みついてきて！」

「よし、生き餌が死なない内に逃げるぞ！」

「隊長のクソ野郎お！」

「え、え？ 血を吸って。怪人？ でも村人を守ってる……」

「あら。カメラロットには私達のようなナイトはいないの？」

「そんな人はっ！ ………………結構、いますね」

「そうよね（原作にだって変な人間多いし）」

最終的に村に来た怪人一族ゲルマン人は全滅。カマセ部隊は5人逃亡7人死亡3人客人という結果となった。

もっとカマセ部隊に戦力を割くべきだったわね。シノンに聞いた所、あれでもカマセ隊長は災害レベル鬼が闊歩する戦場を毎回生き延びているらしかった。

生存特化型か。逃亡時のみA級クラスの働きをするのかもしれないわね。戦場じゃ確かに頼もしい。

もしかしたら私に最も必要だったのはカマセの力だったかもしれ
ない。ミスったわね。

八話 女騎士はもはや響きだけでエロい

怪人一族ゲルマン人とカマセ部隊の人間を何人か食らった後、念の為に三人の眷属を生みだして配置した。生き残りのラウンドナイトに能力がバレないように密かに。

美青年・美少年・美少女。名はソウル・ファーン・エレナ。うーんガチャ結果はイマイチ。美少女が年齢一桁じゃなかったら手を出してただろうけれど、私はロリコンの気はあってもペドじゃないのよね。ハーレムには入れられない。

エレナもバンパイアである以上、成長もしないと残念そうだった。やはり眷属は主に絶対服従とは言わないが絶大な好意を抱いている。人間が神に抱くような崇拜の感情を生まれながらに持っているみたい。

個性がある以上、私から離反するバンパイアも未来には現れるだろうけれど。ま、その時はぶち殺せば良いしあまり気にならない。

問題なのはやはり強さね。生まれた時から眷属は災害レベル虎の強さはあるけれど、虎クラスでも下位のような気がする。

「怪人一族ゲルマン人は災害レベル狼。10体で虎相当。本来ならボング・ジエントル・ノイで拮抗できたはず。でも現実にはシノン達の協力があってもゲルマン人が全体では優勢だった」

「も、申し訳ありません」

「良いわノイ。ゲルマン人の記憶を探ってみただけれど彼ら下級兵士の間にも序列がある。災害レベル狼でも強さにはバラツキがあるみたいね」

原作では基本、サイタマ視点でストーリーが進んでいくので災害レベル狼は戦闘すら省略される。

だから一律で同じ強さだと思いついていたが、そりゃ生き物なのだし強さが一定の訳がない。カマセ部隊の人間だって元々は災害レベル狼に一方的に負ける立場の人間が努力して怪人に並んだのだし。

「私も災害レベル鬼の中では大した強さじゃないわね。攻撃威力・頑丈さ・スピード・器用さ・異能とバランス良く強いけれど、逆に考え

るとバランス良く弱い。器用でもろくな技術を習得していないから攻撃が単調だし複数ある異能は練度不足で咄嗟に利用できずにモタつく。テクニクや罫で戦うタイプでもない。ただの器用貧乏。スタミナと回復速度だけが取り柄ね」

ゲルマン人の記憶にあつたアングロ・サクソン七大王には私ではおそらく誰にも勝てない。真祖の吸血鬼の戦闘スタイルは格下を刈り取りながら眷属を無限に増やしていく物量戦法が基本なのでしようね。弱くて隠れ潜まなきやいけない今は問題外な戦闘スタイル。

そもそも明らかにアングロ・サクソン七大王は強さに個人差があるのよね。傲慢と憤怒の王が他の王を実質的に率いている。鬼の上位と竜の下位の怪人が混ざっている印象ね。たとえ一部の王を打倒可能でも手は出さない方が無難でしょう。

災害レベル竜が逃げ出したフン族か。アツティラは竜以上の怪人？

長生きしてる下級兵程度じゃそこまでは分からないわね。フン族と戦う前に逃亡しているみたい。下級兵じゃフン族と出会ったら生き残れないのかも。

「いや、あの。あつという間に戦況をひっくり返されたカーミラ様に謙遜されると、私達の立つ瀬がないと言いますか」

「あら。シノン達3人はカマセ部隊の中でも上位に位置する強者だったはずでしょう？ 立ち塞がる壁は高いほど燃えるのじゃなくて？」
「私の何時かの台詞を!? やめてください。世界の広さが全く分かってない頃の若気の至りなんです」

うわああつと頭を抱えてもだえ苦しむシノンを仲間の二人が分かつと頷いて慰めていた。

中世の片田舎だと怪人と戦えるという事実だけで、まるで選ばれた勇者のような扱いを受けるらしく、災害レベル狼相当の実力でも天狗になるらしい。

テレビでヒーロー協会の活躍を見れる原作とは情報の習得し易さが違うから仕方ない事よね。それで村に来たラウンドナイトの部隊に志願兵としてキヤメロットに連れて行ってもらって現実を知ると。

カマセ部隊の人間の記憶を見るとカメラロットの上位陣もまたS級らしく人外ばかり。一部は私でも倒せそうと思えるほど弱く見えるけれど、それは何らかの一芸特化型ってだけ。むしろ他より警戒するくらいでちょうど良い。

災害レベル竜に対抗可能なのはS級ナイトでも一部だと思っただけ、下位の鬼は確実に葬るようなバグキャラに見える。最終目的とか余計な事を考える前に生き残る為にラウンドナイトは敵にしちゃいけない。

しばらくは人間に協力的な怪人か、怪人めいた部分のある種族の間違ってノリでシノン達を通じて交流しましょうか。

カマセ部隊の人間を殺してるけど、あれは難民を釣り餌にして怪人に村を滅ぼさせようとしたテロリスト犯罪者だから私に瑕疵はない。ラウンドナイトでも問題にはならないとシノンに確認している。もつとも、カマセ部隊に対する処罰もないらしいけど。

敵わない怪人から逃亡するのを禁じたら部下に離反される上、カマセ部隊は確実に怪人の情報を持ち帰ってくる優秀なB級ナイトチームだ。

対外的にはカマセ部隊が悪いとラウンドナイトは取り扱うでしょうけど、内部では補給可能な拠点と強力な怪人か期待のナイト候補を発見したことで報酬を受け取るでしょう。実際に何度かそんな感じに落ち着いた事例がカマセ部隊の人間の記憶にあるし。

「それで、難民の保護と補給をお願いしに来たのだったかしら。難民の保護はともかく補給はどうしようかしらね。逃げずに協力してくれたシノン達には悪いけれど、村に怪人を引き連れて来たのも貴女達なのよね」

「ま、待ってください。もう3日は保存食のビスケットしか口にしてないんです。補給がないとカメラロットに帰ることも」

「フフツ。困ったわね。それで一つ提案があるのだけれど」

勿論、シノンちゃんは美味しく頂きました。

このくらいの役得がないと怪人なんてやってられないわ。

「あつ、あ。そうですつ。私達は気を主軸にした鍛錬をしてつ。ドリイドは別のグループに」

「そう。他が変わった人はいないの？ 血を扱うナイトもいるんでしょ？」

「ヘルウエティイ族出身のつ、方ですね。暗器を身体に隠してつ。敵の返り血で入れ墨を装飾のようにつ」

何故かハツハと息の乱れているシノンに私の記憶にないキヤメロットのナイトの事を詳しく聞いている。

魂を吸い取る事による他者の記憶の取り込みも完全じゃない。虫食いだらけの印象に残った記憶を覗き見る程度が限界。これも研鑽すれば本人すら忘れた記憶すら閲覧できるようになるでしょうけど、今は直にシノンに聞いた方が早い。別に内緒にするような重大な情報じゃないようだし。

まあ、喘ぎながら説明しようとするシノンが可愛くて、当たり障りのない事を説明させてるだけなのだけでも。

言葉を遮るように舌をペチャペチャ絡ませたり、柔らかい身体を抱きしめてお尻をスリスリと撫で回していると人間を滅ぼす使命なんてどうでも良くなってくる。

快適に暮らす為に必要だからやる。私にとって人類滅亡に邁進するのはその程度の動機だ。あまり拘らないで臨機応変に動かないと怪人特有の全能感で暴走しちやいそうね。気を付けないと。

「あの。その。もう4時間はやってて。ちよつと休憩をつ」

「えー。今日は最低でも明け方まではヤルつもりなのに。もう音を上げたの？」

「そんなに持ちません！」

「鍛錬が足りないわ。せつかくだし24時間耐久に挑戦してみましよう」

「だ、誰か助けてえー」

泣いて許しを請うシノンに明日も身体を重ねる約束をして今日はお休みした。

このままズルズルとシノンもハーレムに引き入れよう。正義漢な

女騎士とかその属性だけで美味しい。

九話 ワンパンマン世界に人間いない説

怪人一族ゲルマン人の襲撃は幸いなことにあれ一度きりだった。生き残りを出さなかったのが良かったらしい。

ワンパンマン世界じゃ下級兵士なんて消耗品だしね。どつかで野垂れ死んでも気に何てしない。部下が死んで心を痛めるような人物、ヒーロー以外じゃ人間だろうとほぼ出てこなかったし。うーん、原作のヒーロー協会も腐敗しちゃってるわね。私が協会に生け捕りにされてしまったら口では言えないような事をされそう。実際、本部に災害レベル鬼を実験の為に何人も捕獲していたり、弱くて見目の良い怪人を愛玩動物として販売していたりするし。

血液のある限り無制限に眷属を生み出せるなんて奴隷階級としちゃ最高の逸材ね。しかも災害レベル虎と程々に強いと。

うん、例え死んでも降伏するのだけは止めておきましょう。

「スウー、ハッ」

パンと拳を突き出せば良い音がして軽い衝撃波が走った。記憶にある型を真似て反対の腕で鞭を振るうように腕をしならせて振り下ろせば、まるで剣で切りつけられたかのような跡が地面に刻まれていく。

なるほど。確かに気は身体機能を強化するみたいね。血液で強化された身体を持つ吸血鬼ならば人間よりも強化率は高い。

これが原作で人間じゃ怪人には敵わないと武術家達が絶望していた理由か。

「凄い。爆裂流をこんな簡単に習得するなんて」

「カーミラ様ならば当然の事。比べる事自体がおこがましい」

シノンにノイが何故か偉そうに誇っているのだけれど原作のジェノスを思い出すわね。従者って皆こんな感じなの？

「攻撃に重きを置いた武術流派、爆裂流。確かにこれは天狗になっても仕方ないかもしれないわね」

魂を吸い取ったカマセ隊の一人が体系立った流派を多少は修めていたから気の習得と併せて訓練してみたけれど、大当たり。武術は吸

血鬼と相性が良い。

吸血鬼は血さえあれば無機物も生成できるし高位の怪人になるほど硬度も上げられる。剣を利用した流派も修めてみたいわね。

他に原作では登場しなかった魔術の類い。超能力以外の明らかな異能。いや怪人フェニックス男が似たような異能を使用していたか。精神世界の共有に死者蘇生。あれは怪人固有の生態染みた異能ではなく、体系立った魔術の一端だった可能性もある。欲しいわね。

「決めた。私もキャメロットに行くわ」

村に居たままでは強化も頭打ち。危険だけど原作まで隠れ潜むより技術を磨いて研鑽した方が何倍も良い。

そう宣言すると畏まりましたと特に異論も無くノイは従った。付いてくる気ね。

「ええっ！ 村の防衛はどうするんですか!?!」

「何人か眷属を置いていくわ」

「カ、カーミラ様。誰を……?」

「ふむ。武術の研鑽に興味がある人員を優先するわ。人間に頭を下げる事になるけれど、付いてくる?」

「なっ。頭を下げる……など。でもこのままの強さでは失望を。しかし」

特に人間種族への偏見が強いノイが葛藤してるけれど、他の眷属はノイほど隔意がないのよね。何でかしら。

単にキャサリンやリリシアに対する嫉妬? でもシノンとは意外と打ち解け合ってるし。戦友だから。いや、格上の存在としてシノンが私やノイを敬ってるからか。

そういえば身体を重ねたからかキャサリンやリリシアは私に必要な以上に畏まったりしないわね。そういう女としてのしたたかな部分が気に食わないのかも。

半端に語学を学ぼうと交流を深めたから逆に不快に思ってしまったか。せっかくの眷属候補を密かに始末されては敵わない。ノイも連れて行こう。

「ノイ。これからもハーレムは増やし続けるわ。人間だけじゃなく純

粹なバンパイアの眷属もね。貴女、下手をしたら埋もれちゃうわよ？」

悪戯っぽく笑うとノイは愕然として顔を上げた。ちよつと涙ぐんでる。可愛い。

「強くなりなさい。私は女好きだけど強者には敬意を払うわ。特別になりたいのなら奉仕の術を学ぶだけじゃなく圧倒的な強さが必要なの」

そもそも数百年も経てば現存してる眷属は全員死んでいても何もおかしくないしね。私ですら生き残れるか怪しいくらい。

人間の眷属化すら手間取って研究が進んでいないのに眷属の不死化は相当な時間が必要になる。多分、眷属が死ぬ方が早い。

「いつそ私より強くなれば力尽くで好きに出来るしね」

「なあ!? そ、そんな事は、あり得ませんし実行しません!」

「フッフ。そうかしら。怪人ってそういう生き物でしょ?」

笑ってノイを見ると真っ赤になってうつむいていた。お? 性癖に刺さったか?

ノイの人間に対する態度を和らげるにはそういう路線で行ったら意外と何とかなるかも。

ふむ。毎回、私が全員を相手にする形だったけれど。試しにノイにキャサリンとリリシアを抱かせてみるかな。面白そうだし。

「うわあ。邪悪な笑顔……。本当にキャメロットに連れて行っていいのかな。でも強力な一族が人間側に付くか怪人側に付くかの瀬戸際な気がするしなあ」

うーんと悩むシノンを見て、やはり人間と怪人の分別などその程度のアヤフヤなものだと理解した。

明らかに人間には怪人の血が流れているんじゃないかって描写がワンパンマンにはある。サイタマという例外を除いても鍛えれば災害レベル竜と張り合える人間の素質は異常だ。人間種族には元から複数の怪人のDNAが混ざっているのだと解釈すれば色々納得できる。

怪人を丸呑みにする豚神とか鉄よりも堅い筋肉を持つ超合金クロ

ビカリとかのS級は、そうじゃなかったら普通に怪人化してるんじゃないの？ それ以外にどんな理由が？

そのくせ、ちよつと外見が人間離れしていたら怪人だと騒いでヒーローを引退して逃亡しなきゃいけないくなるのよね。ワンパンマン世界は分からない……。

やはりアレか。民意を配慮してんのか。ヒーローは人気商売だと原作でも言い切っていたしね。人間種族滅亡の危機なのに。

「人気。いや、この時代なら金や食料に物資。無機物を生成できるバンパイア一族ならそつち方面を賄える可能性もあるわね」

戦闘力だけではなく、生産者としての強みを持つば有利な立場に立てる。

科学方面はまだ早いとしてもそつちの道に興味を持つような眷属もキヤメロットに連れて行くべきかもね。

何だかんだで都会に上京するようで楽しみ。やはり文明は良い。

十話 伝説の地へ

キャメロットに上京する眷属はノイ・ジェントル・ソウル・エレナの四人。ジェントルは武術にソウルは剣術に興味を示した。

エレナは生産。その中でもとりわけ薬品に興味を持つている。毒とか薬じゃなくて化粧品や乳液なんかを作れるようになりたいらしかった。どうやら性で貢献できない分、美でもって尽くそうと考えてるようね。私だけではなくキャサリンとリリシアのファッシュョンコーディネートをしてる様子を何回か見たし。

私が村人の魂經由で学んだ言語をエレナは生まれた時から習得していたから、既に片言のノイより村に馴染んでいて、キャメロットに行くと言ったら友達に泣かれたらしい。まだ生まれて一週間くらいしか経ってないはずなのに友達がいるのか。凄いなエレナは。

頑張つて言語を学んでいたノイが納得がいかなそうに眉を潜めていたけれど、そこは仕方ないと諦めて欲しい。チートつてのは理不尽なものなの。

眷属が私の知識を持って生まれてくる性質を利用した意図的な知識の贈与。これがソウル・ファーン・エレナには施されている。生まれた時からの言語習得は私の研鑽成果。この調子で眷属作成の秘術を解析していつて魂の贈与による元人間の眷属を作成するのが、とりあえずの目標になるかな。

まるで科学者が魔術師になった気分ね。

それで残ったボンゴとファーンは農地弄りと家畜の飼育にそれぞれ夢中だったから村の防衛要員として置いていく事になった。場合によっては新しく駐在人員を作成する必要があったし、全員が上京を望まなくて良かったわ。流石に多少はどんな人格をしてるか様子を見ないと怖いしね。怪人が直ぐに調子に乗るのは自分のことのように分かるからちよつと心配。

「私達の出発準備は終わりましたが、キャサリンさんとリリシアさんは本当に連れて行かなくて良いんですか？」

「必要ないわ。この時勢で無力な女を旅に連れ出すなんてとんでもな

い。少なくとも眷属化するまでは荒事に巻き込むのは避けるつもり」
私でも危うい怪人が近隣に存在する中で足手纏いなんて連れて行く余裕はない。

「カメラロケットまで強行軍が可能な災害レベル狼の実力を持つシンノ達が最低ラインね。場合によっては眷属の無限作成で時間稼ぎをしなくてはならなくなる。」

「理屈ではそうですが」

「何だシンノ。貴様、カーミラ様に異議を唱えるつもりか？」

「ノイさん。その、人間達がカーミラ様に不敬を働かないよう間を取り持つ人間が必要ではないかと思ひまして……」

ああ。シンノは逆に私達がカメラロケットの人間を害さないか心配なのね。

馬鹿ね。害するに決まっているのに。魂を吸い取らないと技術獲得に支障が出るわ。

でも、怪人として本格的に敵対視されるのは何とか避けたい。この問題を解決するには。

「その役割はシンノが担いなさいな。ついでに始末しても良い荒くれ者を選別してくれたら嬉しいわね」

「そういうスタイルで動くんですね。うーん、犯罪者に限定するなら構わないのかな。記憶を辿れるのなら大規模な犯罪組織の検挙も可能だし」

暫く悩んでいたが、記憶を覗き見れるのは私だけだという情報を教えてあげたら、私をS級の卵だと理解したのか納得して都市に案内してくれる事になった。

本当にギリギリまで葛藤してたわね。とうにカメラロケットの位置なんてカメラセ隊の隊員の記憶を持つ私なら知り得ていると分かっても良さそうなのに。無理に侵入して怪人扱いされるのも面白くないから情報を与えて上げたけどシンノって微妙に抜けてるのね。本当にシンノに折衝を任せていいのかちよつと不安になったわ。

その上、私をラウンドナイトなら御しきれると最終的に判断したし。

ま、現状なら間違いじゃない。でも面白くはないから早く都市毎、蹂躪できる化物にならなくちゃね。

「ケケケツ。俺らは怪人ならず者！ 女なんかを旅に連れ出すとは血迷ったな！」

「はあ？ お前、今、私を見下したの？」

「あつたり前だろうがっ！ 何だ腕を回して、デカイ胸を揺らして誘ってやがんのか？」

「ノイ達は手を出さないでね。殺す前にちよつといたぶるから」

「はっ！」

「うっわ、怪人がゴミ屑のようになっていく……」

道中、6人組の山賊上がりの怪人がちよつかいを掛けてきたんでストレス解消にサンドバッグにした。全員で災害レベル虎程度の強さで私を挑発するとは身の程知らずがっ。

私って自分から謙遜するのは気にならないけれど、相手から舐められるのは死ぬほど嫌いなよね。例え相手が格上でも。

正直、シノンが無意識に私を侮ってラウンドナイトの下に見たとき、思わず殺さないよう自制するのに必死だったし。

「この怪人の魂も、何の異能も手に入らなかった。イワンって実はレア怪人だったのね。怪人一族、ゲルマン人も数と身体能力任せで格下を狩るスタイルだったし。人間の方が技巧を磨くだけ何倍も魂を吸い取る価値があるわ」

「その、無差別に襲いかかったらいいけませんからね？ 下手したら本当に一族毎、怪人認定されますよ？」

「何だシノン。それは脅しか？」

「ち、違いますっ！」

慌てているシノンをノイが虐める何時もの光景を見ながら私は溜息を吐いた。これで意外とノイってシノンの事を気に入っているのよね。

好きな子を虐めなくなる性分かな。微笑ましいけれど他のカマセ隊の生き残りは息を殺して私達の様子を窺ってるし、全ての人間が怪

人を人間側として隔意なく扱うかといったら厳しそうね。

「アレがカメラロット？ 結構、村から近い！」

「それは道中、人間を抱えて飛行したからだろう」

無邪気に騒ぐ年相応の振る舞いをするエレナにソウルが律儀に付き合っている。

そういえばコウモリのように翼を出しての飛行は可能だけど、超音波を出して位置・速度・大きさを把握するエコーロケーションの使用は出来るのかしら。今度、試してみないと。

ふむ。使用できたらバンパイア一族は暗闇の中では更に厄介な怪人となるわね。基本異能だけでも極めたら強そうな気がする。

「カーミラ様。怪人ならず者の拠点に多少の物資がありましたぞ。生き残りの始末のついでに漁りましたが金銭は我々にも有用でしような」

「良くやったわジェントル」

怪人、寝取られ男を殺さずに私の前に引き連れて来た事といい、ジェントルは気が利いて有能ね。

もし眷属の不死化に成功したら男だけどジェントルも対象にしましょうか。こういう部下は失ってはならない。

「ん？」

誰かに見られた気がして周囲を見回すけれど人影はない。

方角的にはカメラロットの方から。異能か望遠鏡のような文明の利器か、それとも単に数キロ先を視認できる視力の持ち主。

「面白そうなところね」

様々なサブカルチャーに取り上げられてきた白亜の城。カメラロット。

12人の伝説に謳われる選ばれし円卓の騎士。最高峰の魔法使いとして歴史に名を残した宮廷魔術師マーリン。

そして聖剣を引き抜いた騎士の理想、アーサー王。

私は今、伝説の只中にいる。

十一話 円卓の騎士トリスタン襲来!

「みんなー、今日はトリスタンのライブに来てくれてありがとうとおー!」
「スタンちゃん。こつちを向いてー」

「ウオオツ。お前ら声出せ。いつせーの!」

「T・R・I・S・T・A・N」

「もういつちよ!」

「T・R・I・S・T・A・N」

「声援ありがとう! 私にも皆の声、聞こえてるよおー!」

ワアアアアアという歓声が五月蠅い程、石畳のキャメロット城に木霊した。

そう、このアイドル会場のような場所が伝説に謳われるキャメロット城であり、アイドルのようにフリフリの衣装を着て踊っているのが円卓の騎士が一席、トリスタン卿なのだ。

トリスタンの伝承はアーサー王伝説とは元は別の逸話であるが、為に矛盾している事も多いが、それでもトリスタンはリオネスの王子、王族であることが明記されており。出生前に父親が亡くなったか浮気したかでいなくなったことから母親にトリスタン、悲しみの子と名付けられるようなシリアス系のキャラだ。

その実力は高く円卓の中でも最高峰の騎士と謳われたランスロットと並ぶほどでありヘドラゴン殺し<狩人>狡知にたけた者<メランコリー>楽師<と数々の異名を誇っている。

また、アイルランドの王族であるイゾルデ姫と仮想敵国の王族同士であるにも関わらず恋に落ち、叔父であるマルク王の許へ花嫁として連れて行く最中に関係を持ってしまいう昼ドラめいた悲恋の逸話がある名で、死に際にイゾルデ姫の顔を一目見ようとした程のドラマを展開する……。

「トリスタンちゃん、頑張つてー」

「イゾルデちゃん、ありがとうおー」

キヤーつと最前列で友人のトリスタンを応援しているらしいイゾルデ姫を見て、私は考えるのを止めた。

魂を幾つも吸い取った事でその中でも最高峰の頭脳の持ち主と同程度に向上した頭脳が前世の知識を詳細に思い出させ、自分ながら賢くなったなと思っていたのだけれど、どうやら気のせいだったらしい。最初に魂を吸い取った村人の頭の出来が思ったよりも良くて密かに喜んでただけで、所詮は村人に過ぎないしね。

いやー、トリスタンの逸話を間違えて覚えてたなんて前世の私って馬鹿ね。アハハ。

「女王。俺に贈与された知識じゃトリスタンは陰鬱で生真面目な男だったはずなんだが」

「ソウルの馬鹿。そんな愚直に聞いちゃ駄目よ。ここは空気を読んでトリスタンちゃん可愛いって言っとけば良いの」

「そういうものなのか……」

私に質問してきたソウルをそうエレナが諭すのを聞きながら、なるほどと私も頷いた。

そもそもアーサー王伝説は元の世界じゃ架空の話だったんだし気にしても仕方ないのよね。うん。トリスタンはアイドルだった。それだけの事。

12人の円卓の騎士が一席。S級ナイトのトリスタンがアイドル？ いや、ワンパンマン世界なら十分あり得るか。

「カーミラ様、運が良かったですね。吟遊詩人トリスタン様の音楽祭が生で聴けるなんて。滅多にないんですよっ」

「シノン。この催しは毎回、やってるの？」

「はい。キャメロットに怪人の被害が及ばないように歌唱魔法で建築物に防護の祝福を施してるんです。都市内部なら武装にも影響が及ぶので戦略的価値すら含む、大規模な魔術儀式なんですよー!」

「あつ、ちゃんと意味があるのね」

ビックリした。ワンパンマンの原作でアイドルやYouTuberが歌ったり踊ったりしながら怪人を退治したりするから、何の脈絡もなく円卓の騎士の一人がアイドルをやっているのかと思った。

そうか、吟遊詩人か。トリスタンは楽師として豎琴を演奏する場面もあるし、確かに変じゃ……ないか？ コジツケじゃない？

煌びやかなシルクの舞台衣装は大目に見るとしても、あのトリスタンが手に持つてるマイクとか周辺に置いてあるスピーカーとかは何処から出てきた。

今は中世だぞ。時代背景を無視するんじゃない。

「あのね、シノン。トリスタンが持つてるのは何？」

「マイクですよ？ 魔道具の一種です」

「なるほどー。まどうぐなのかー」

進みすぎた科学は魔法と変わらないって言うしね。一周回って現代のマイクが中世に魔法の道具として出て来る事もあり得るんだろう。多分。

真面目な話、ワンパンマン世界だしねえ。ないとは言いつれね。

「みんなー、ノリが悪いぞーう？ もっと大声で、さあ一緒にー！」

「おい！ おい！ それそれぞれそれ！」

「もう一声!!」

「うーっ、はい！」

何かファンもオタ芸のような糸乱れぬ芸術的な踊りを披露してるんだけど。

これがキャメロット。なるほど。伝説になるだけはあるわね。未恐ろしい。

「うーっ、はい！」

「エレナ……気に入ったの？」

「はい。出来ればトリスタン様に弟子入りしたいのですけど、良いでしょうか！」

「……………好きにして、いいわ」

宿屋に泊っても尚、騒いでいたエレナに確認してみたら案の定、トリスタンのファンになっていた。

文化侵略で眷属の一人がラウンドナイトに持って行かれた。

戦わずして敗北する。これがS級！

なるほど。尋常な相手じゃないわね。場合によっては冗談みたいな手段で気付いたら陣営毎、敵に寝返っていたなんて事もあり得る。

エレナを筆頭にいずれバンパイア一族にアイドルグループでも結成させてみるか。

目には目を。アイドルにはアイドルを。

歌唱力こそが戦場を支配する世の中が、もしかしたら訪れるのかも
しれない。

十二話 真祖の吸血鬼 V S 幻影飛翔剣の達人

キャメロットの城下町にある宿で一夜を明かしたら昨夜の混乱が嘘のように治まった。

歌唱魔法を習得してるらしいトリスタンにエレナが弟子入りするのは良いとしても、バンパイア一族でアイドルグループを結成させる？ 歌唱力が戦場を支配する未来がやって来る？ お前は何を言っているんだ。

昨夜の自分自身にドン引きして冷静に事態を振り返ってみると、おそらくはトリスタンの歌唱魔法によって魅了状態になっていたのだと思われた。

魔法の効果はキャメロット城を中心とした都市の建築物の頑健さの向上。範囲内なら余波で無数の無機物にすら効果を及ぼせる極大魔法。

アイドルを他のあらゆる要素を無視して優先的に陣営に引き入れようとしていたのは、それだけトリスタンが魅力的に見えていたから。彼女の歌は無条件に人を惹き付ける魅了効果がパッシブで付いているのだろう。凶悪すぎるわね。

そういえば、トリスタンの逸話には『彼に怪我を負わせる者は、彼が怪我を負わせるあらゆる敵と同じく命を落とす』という物があつた。

つまり魅了によってトリスタンには攻撃できない。例えば攻撃できても怪我を負わせたら自ら命を絶つて事なんじゃ。

「なるほど。これがS級ナイト。ただの色物粹じゃないわね」

原作に登場した怪人メガミメガネや怪人弩Sと同じ系列の力の使い手。精神力が高ければ抵抗できるらしいけれど、昨夜は私も危うかった。性欲に弱い私では抵抗仕切れないのかもしれない。

これが神様を選ばせてくれたチート特典に状態異常の耐性強化が含まれていた理由か。獲得可能なチートに魅了の異能もあったし、状態異常の中でも特に気を付けるべき症状なのかも。

「魅了は魔法を覚えたら対抗可能なのかしら。純粋な精神対決は避け

たい。身体を鍛える事で精神も鍛えられるなんて脳筋戦法は取りたくないし」

この世界に来たばかりの私や三千年バージョンの私なら笑ってその対処法で乗り切りそうなんだけれど、変に頭が良くなったせいで逆に抗えなくなつた気がするのよね……。

精神力の差というよりはキャラクター性の違いでそうなるのだと思う。アホキャラなら変に対処しようとして下準備するより真つ向から対決した方が良いけれど、天才キャラなら対処法を考案して事前準備をしてない段階で負けが確定してしまっているような。

そういう自分らしさを貫けるかが精神対決には重要なポイントとなるのだ。多分。

「オマケにあれ程インパクトのある催しをカマセ隊の人員は恒例の行事として大して意識してなかったし。魂を介した情報収集では限界があるのね。詳細に記憶を探るには落ち着いた場所で一定時間以上の瞑想が今の私だと必要。これは情報収集を異能に頼りすぎるのもよくないわね」

まだ転生して一年も経ってないし自分の力を把握しきれてない。仮想敵の本拠地にやって来るには早すぎたのかもね。

険しい顔で考え込んでいるとエレナが不安そうな表情で私の事を見ていた。

「あの、カーミラ様。トリスタンちゃんに弟子入りするのは止めた方が良いんですか？」

「それについては構わないわ。危険な相手だけれど、それだけあの力は魅力的だしね」

フツと強張っていた顔をリラックスさせて私はエレナに答えた。最終的に人間を滅ぼすのが目標ではあるけれど、別に最盛期のアーサー王が率いる円卓の騎士と敵対する必要なんてない。相手が強いなら歴史通りに円卓が内紛で弱体化するまで待てば良いだけ。そもそも100年もすれば寿命で死ぬでしょ。

S級ヒーローに比肩するだろうS級ナイトは可能な限り眷属として取り込みたいけれど、力尽くで眷属にしたところで離反されるのは

目に見える。エレナがトリスタンの籠絡に成功するのが最上の結果だけれど、それが無理でも逸話通りにトリスタンが重傷で倒れた時に眷属に勧誘すれば乗る可能性は高い。

うん、事前に繋がりを持っていた方が得ね。

トリスタンを完全に敵に回してしまつたらエレナが魅了されて敵に寝返るかもしれないけれど、眷属は無限に作れる。大したリスクじゃないわ。

「じゃあエレナはトリスタンに弟子入りが可能かシノンに相談してきなさい。ラウンドナイトへの加入が必須なら入って構わないわ。時間はあるのだし気楽にね」

「はい、頑張りますー！」

「ノイ・ジェントル・ソウルは私と一緒に資金稼ぎよ。アーサー王の私兵部隊であるラウンドナイトは原作のヒーロー協会とは違い、あくまで軍。任務として敵勢と戦争するのには慣れていても散発的に現れる怪人には手が回っていない」

逆に言うと、放っておいても構わない程度の脅威でしかないのだけれどね。

この世界に来て思ったのだけど、原作と違って異種族としてそう生まれついた怪人以外はせいぜいが災害レベル虎クラスの怪人しか発生していないような気がする。少なくとも何の力も持たない人間が突然変異をしても災害レベル竜にはならない。

無機物や何らかの思念から生まれた自然発生型の怪人も大した脅威じゃない。まあ、歳月の積み重ねで災害レベル竜に至るのかもしれないけど。

何というか全体的に戦力バランスが人間優位のような。これはS級ナイトが災害レベルの高い脅威を潰しているからかしら。

それとも原作に登場した大予言者シババワの最期の予言『地球がヤバイ！』に関係してるのかも。

私が死ぬ直前に更新してた原作だと、現状の私と同等の怪人である災害レベル鬼が月一で出現して災害レベル竜が同時に5体も唐突に現れるのよね。

これは意図的に怪人を集めて選別した怪人協会や暗黒盗賊団ダークマターとは話が違う。完全な自然発生というならば災害レベル竜が無限に生まれてくるような環境になりつつあるということ。

もう地球が意思を持って人間を根絶しようとしているとしか思えないような状況。

やはりラスボスは災害レベル神、地球意思なのかしら。『地球がヤバイ!』という予言は地球に住む人間がヤバいって意味じゃなく、地球自身がヤバいって意味？

それかサイタマによって地球意思が粉碎されて滅ぼされるって意味の、地球がヤバイ？

どっちもあり得そうだから、ワンパンマン世界は困る。

災害レベル竜の群れとか人間だけじゃなくバンパイア一族にとっても滅亡の危機なのよね。怪人同士って普通に殺し合うから。

「賞金稼ぎ。傭兵。どっちの組織にしる実力さえあれば仕事には困らないわ。情報収集の為、一旦バラバラに仕事を受けて。失敗しても構わないけれど死なないよう気を付けなさい」

「畏まりました」

「了解した」

「初めての命懸けの実戦ですな。腕がなりますわい」

眷属の怪人バンパイアが人間のように戦闘に忌避感がないのだけが救いね。

生き残りさえすれば多少は強力な個体が現れてくれるでしょう。

「ほう。女にしては中々やる」

「チツ」

朝食の後、人間の方が経験値が美味しいとカマセ部隊の人間の記憶にあったハンターギルドでB級賞金首の殺害依頼を請け負ったんだけれど。眷属より先に私が死にそう。

向かった交易路に潜伏していた山賊が思ったより手練れだった。

チームの構成員はB級。災害レベル狼程度の雑魚だったが、頭目が群を抜いて強い。A級ナイトでも上位。災害レベル鬼の私を殺しう

る力を持っていた。

これだからワンパンマン世界は嫌なんだ。道端のモブに圧倒的な強者が混じっていたりする。

「クソが。こんな山賊面の髭親父が何で一流の剣術家なのよ。そこまです強いならゲルマン人との戦争に参加してきなさいよ。弱い物イジメしか出来ないハゲが。頭頂部がツルツルなのに側頭部の長髪がウザいのよ」

「容姿は関係ないよね!？」

山賊の癖に一丁前に傷付いた顔をして縦横無尽に剣を振り回してくる。

生成した籠手で剣を受け止めようとしても幻影に騙されるように腕をすり抜けて私の身体を切り裂く。簡単に治るけど、痛いものは痛い。

「その自己再生は何時まで続くかな？ 我が流派『幻影飛翔剣』は現と幻の境を操るぞ。何重にも現れる剣先のどれが本物なのか見分けられるものなら見分けてみせるがいい！」

「グウウツ」

次々と繰り広げられる剣技に対応できず身体が切り裂かれていく。爆裂流で相手を破壊しようと拳で殴りかかろうと容易く受け流される。

B級ナイトでも戦闘力が底辺のカマセ部隊の武術じゃ相手にならない。

全力で地面を爆破する事で無理矢理に仕切り直しをしたけれど、このままでは勝機はない。

「負けたわ。私の武術では貴方の剣術には勝てない」

「ハツハツハ。だろう、そうだろう。伊達に30年も修行してない」

「マジで何で山賊やってんの?」

「だって、ラウンドナイトに入ると強敵と殺し合いになるし……」

「このチキン野郎が」

ワンパンマンの原作にも隠れた実力者が大勢いた。災害レベル鬼の上位である深海王くらいなら単独で倒せそうな武術家すらも在籍

していた武術界はヒーローとして怪人を倒すのは安易な道に逃げたのだと馬鹿にする風潮すらあった。

全身をサイボーグと化した身体改造者達が大金の為に命を掛けて戦うサイボーグファイトの機闘士に、砂鉄を詰めたグローブで殴り合うデスボクシングのボクサー、身長3メートル以上体重四百キロ以上の力士のみが土俵入りを許される超相撲の超力士。

他にもA級S級の實力を持つ忍者の里出身者で構成された忍天党や、S級ヒーローの閃光のフラッシュとS級賞金首の音速のソニックを同時に相手取って仕留めるのに1秒かからないとさえ言われる忍者の里を生み出した『あの御方』と数多くの實力者がワンパンマン世界にはいる。

そしてそいつらが、揃いも揃って誰も怪人を退治していないのである。

襲いかかるターゲットはむしろ人間の方が多く、『あの御方』なんて完全にヒーロー協会と敵対していてS級一位のブラストに重傷を負わされたくらいだ。忍天党は世界支配しようとか世迷い言を言って秘密裏に暗躍していた。人間種族が滅びそうな状況で。

やっぱ人間種族、余裕あるっていうか色々とおかしい奴らが多い。不祥事が続くヒーロー協会に対抗しようと思まれたネオヒーローズは在野の人間を勧誘しただけのはずなのにS級ヒーロー並の人材が何人かいた。つまりS級ヒーローレベルの人材がまだまだ民間に多数いるわけで。

まさかサイタマ並の人材がモブに紛れているとか言わないだろうな。流石にキレルぞ。モブサイコロ1000っていうワンパンマンと原作者の超能力者主人公の作品があるんだが、クロスオーバーして主人公がひよいっと作中に登場してきても変じゃない雰囲気はワンパンマンにはある。

「はあ。嫌になってくるわね、ホント。こいつも強敵との殺し合いが嫌だとか言いながらラウンドナイトと敵対する山賊を稼業にしているし」

「うぐっ。いや大丈夫だ。円卓の騎士が出張らなきゃ負けるはずがな

い」

なるほど。格下だけをターゲットにして金を稼いだらトンスラする気だったと。

私と思考回路が似てるわね。嫌になるくらい。

「心配しなくてもS級ナイトと戦闘にはならないわ。貴方はここで死ぬから」

「ぬ？ 敵わないと諦めたのではなかったのか？」

「まさか」

ニイっと笑って私は全身をコウモリと化していった。

「覚えてたての武術じゃなく怪人として相手をさせて貰うわ。全身の血液を失う前に貴方は数千以上のコウモリを殺しきれるかしらね」

「な、なんだと！」

ほら、頑張りなさいな。S級ヒーローのアトミック侍なら間違いなく出来るわよ？

同じS級ヒーローのゾンビマンがバンパイア（血統書付）に持久力と再生力で勝てたのは、彼の血肉がマズくて食えなかったのとバンパイア（血統書付）が精神的に敗北したから。

バンパイアは血がある限り再生する不死身の存在。サイタマのように非常識な威力の攻撃で血のストック毎、殺し尽くされる事がない限りは死ぬ心配はいらない。

「覚悟しなさい。ここからは死ぬほど面倒くさい泥仕合よ」

コウモリの鳴き声と山賊の悲鳴が荒野に木霊した。

「ギリギリだった。偉そうな事を言って七割も殺された」

勝ったのは勝ったけど、死闘だった。

本当に私って弱かったのね。自分でもビックリしたわ。眷属はまだ生き残ってるのかしら。

そう、ヨロヨロと立ち上がり帰還したら、眷属は余裕で任務を熟していたのを知って納得がいかに首を傾げる結果となるのを私はまだ知らない。

十三話 幻の強さ

「きひひ。アタシヤ怪人、金の亡者。大人しく身包みを置いていきなア！」

「ノイ。そこそこ溜め込んでるっばいから拷問して在処を吐き出させて」

「畏まりました」

「この、人でなしーっ！」

偶に気が向いたら依頼を受けて賞金首討伐の日々を送っていたらあつという間に月日が過ぎていった。

やはり怪人の方は災害レベル狼が殆どで、虎クラスが偶につて感じ。ドラゴンとかの大物もいるっちゃいるらしいが、そっちはラウンドナイトのS級が出張るみたいね。ゲルマン人との戦争は良いのかしら。

一流の剣術家の癖に妙に三下臭のするハゲ山賊を討伐した後、私は男の魂を参考に幻影飛翔剣を習得すべく研鑽の日々を送っている。

カマセ隊の隊員が習得していた手習いの爆裂流なら一週間もあればそれ以上の動きが出来るようになっていたし、寝取られ男の異能、嫉妬エネルギーとエネルギーの過剰放出による身体強化も半年で獲得できたから容易く習得できると思っていたのだが。7ヶ月経過した今も同じ動きが出来ていない。

「怪人としての生態の一種である異能获得に時間が掛かるのは分かるけれど、単なる技術の模倣にここまで苦労させられるとはね」

カマセ隊の拙い気の練り方とは練度の違う、複雑で繊細な気の動きは反復訓練を繰り返さないと真似が出来ない次元のものだった。

ギャグキャラみたいな残念な男だったが練り上げた武は本物だった。キヤメロットの各種流派の道場も少し見学してみたけれど、師範レベルの実力をあの男は備えていたのだ。うーん。道を踏み外すにしても、もうちょっと他にやりようはあった気がするのよね。実力に反して犯した罪がショボ過ぎる。そのせいで普通の山賊討伐と同じ程度の賞金しか手に入らなかった。

いや、或いは才能の問題なのかもしれないのか。私は魂を吸い取った最も頭の良い村人と同程度の頭脳を持っている。故に私の剣術の才能はあのハゲ山賊と同等だろう。30年は修行したとか言つたのよね、あのハゲ。7ヶ月でそこそこ模倣出来てるのは逆に凄く順調なのかもしれない。

剣を振るう時の体勢や気の動き、視線の向きに咄嗟の判断、頭に浮かぶ幾つもの戦術。

魂を獲得した事で私はハゲの全てを掌握し理解している。どんなに良い教本や指導者を得るよりも、模倣する事に掛けてなら魂を得る以上の近道はない。

もつともハゲの技術を模倣仕切ってしまったら、私にそれ以上はないのだけれど。私が普通に訓練しても、単にハゲの身体能力が向上して無限の時間を与えられたのと変わりはない。それでは恐らくS級には勝てない。そういう理不尽な壁がA級とS級の間にはある。

「数百年、訓練し続ければ何とか届く。そういう感じね。私が普通に生きたら災害レベル竜になるのに3千年も必要だったように」

遊び呆けただろう私と武にのみ数百年の時間を費やした人間が実力で伯仲するのは不自然じゃない。それでも戦闘になれば私の方が実力が高そうではあるが。

根性の一言でS級に上り詰めた金属バッドあたりとは生命体としての格が違うわね。

理不尽なまでの才能差。ただの凡人ではA級こそが限界なのだ。これこそが生物の持つ成長リミッター。

個体毎に成長できる限界は異なる。あのハゲ山賊はそこが強さの上限。逃れるには怪人化をするしかない。

そして、この限界を乗り越えた男こそがサイタマ。あの男に才能なんてものはない。ただ只管に筋トレをして非常識な身体能力を得た。それだけの男。

まあ、私は精神力で限界突破をする事そのものに別種の才能が必要だと思っただけだね。サイヤ人呼びはそれが理由。

でもサイタマを尊敬する人間の気持ち自体は分かる。不可能を可

能にした黄金の精神は人の目を惹き付ける。

弟子のジェノスなんかはその黄金の輝きに目を焼かれて足下が見えなくなっている典型。彼にリミッター解除は出来ないだろう。サイボーグだから何て理由じゃない。人の真似をして強くなるようにする。そのような精神性では己を乗り越えるリミッター解除は不可能というだけ。

ジェノスが弟子入りすべきだったのは武術家のバングの方だ。合理的な動きを追求する事で只人を圧倒的な強者に変える流派を学ぶ事がジェノスが身体の強化パーツを手に入れる以外の強化法。気を練れるかは不明だが、サイボーグは完全な機械ではない。生身の部分が残っているならば可能性はある。

奇しくもS級ヒーローである戦慄のタツマキの原作での発言通り。馴れ合いは個としての力を鍛えるのに邪魔となる。集団で切磋琢磨する事を否定しているのではない。そもそも流派とは集団で各々の力を高め合う形式だ。

否定しているのは思考停止をして現状に踏み止まる事。ジェノスが常を感じている停滞感は当然だ。強者の傍に居れば強くなれるのなら誰も苦勞はしない。

私もまた考え続けなければならない。リミッター解除も怪人化の秘法も都合の良い幻のようなものだ。

自分もそうなれると夢想して無駄に生命の危機を招いてはならない。

必要なのは限界を超える為の道筋。冷徹なまでのロジックだ。

とりあえず目指すべきは忍者の里を生みだした『あの御方』と怪人協会のギョロギョロね。

一桁の年齢の孤児を味のしない食事に死ぬ一步手前の鍛錬を常に続けさせ意思を根こそぎ奪う事でS級並の暗殺マシオンを大量生産した忍者の里。そこまで無理をしたにも関わらず孤児は忍者の里の秘薬で死ぬことはなく、どんな人間でも超人へと変える技術の粋を凝らした指導法の極致。

S級でも上位の達人である閃光のフラッシュを最低でもS級下位

の実力を持つ音速のソニックと同時に敵に回して、簡単に倒せる実力。複数の心臓を持つとか、他者の皮膚や内蔵を自分に移植したとか、3百年も生きてるとかで『あの御方』は怪人疑惑を持たれているが、おそらくは人間か人間あがりの怪人。ヒーロー狩りのガロウと同じく技術に傾倒し過ぎているもの。純粹な怪人ではない。

そう、極まった才能と研鑽で生物は災害レベル竜上位、もしかしたら竜以上に到達できるのだ。ガロウのように怪人化の秘法を利用したとは思えない。それでは『あの御方』の秘伝の巻物を得ただけの閃光のフラッシュが急激に強くなる訳がない。特定の思想や激情とは対極の冷徹な思考回路が『あの御方』にはあるのが読み取れる。

この『あの御方』のスタイルにギョロギョロ日本人は個体の実力に等しい怪人しか生み出せないとあまり評価していなかった怪人細胞を組み合わせる事で良いラインまでは到達できると思われる。怪人王オロチの肉体を切り取ったものだろう怪人細胞は血液からバンパイアを生み出す真祖の吸血鬼である私なら研鑽で真似できるはず。

「とりあえずはシステムの至れる上限に到達しましょうか。限界を超える方法はそこから改めて考えましょう」

そうゴチャゴチャと原作知識を思い出しながら結論を出した私はキヤメロットを出て最初に訪問した村に里帰りをしていた。

エレナのラウンドナイト入隊やトリスタンへの押し掛け弟子化とか、ジエントルとソウルの流派への入門に際してのゴタゴタとか、ノイを部隊長とした新しく生み出したバンパイア一族による傭兵部隊の結成とか、色々あった。色々あったが、忙しくて性欲を発散する機会が少なくて溜まっているのだ。

ノイも別口の依頼を受けて不在な事が多いし。シノンはトリスタンにエレナと一緒に弟子入りしたから呼び出すのに躊躇してしまうし。

そういうのが重なってムラムラが限界に来たら思い出したように村に里帰りをして発散するのが繰り返している。

私単独なら飛行で一日もせずには辿り着けるしね。

「んうー」

ジュツポジュツポと指を咥えさせたキャサリンの身体を後ろから抱きしめて獣のように背後からのし掛ければ良い声で鳴いてくれるのが堪らない。

私は完全に女体なので男のモノは生えていないが、身体をコウモリに変えたり無機物を生み出したりと色々と肉体を操作できる。

それを応用して擬似的なアレを生やしてみたりもしたんだけど、イマイチね。

「うーん。豆を単純に大きくしても刺激が強すぎて痛覚として処理されちゃって感覚が鈍くなるのね。喜んでるキャサリンには悪いけれど普通にヤルわよ」

「よ、喜んでなんかア」

ヘラヘラと笑っている事に気付いてないのか涙目で見上げてくるキャサリンが可愛くてズンズンとリズムよく突き上げてあげた。

妹のリリシアや新しくハーレムに加わった眷属希望の女が二人、横に限界で倒れているのを見ながら我を忘れて欲に溺れてはならないと改めて自制した。ノイじやないんだし、本気でやったらヤリ殺してしまう。リヨナは好きじゃない。

「じゃ何処を使って欲しい？ 指？ 舌？ キャサリンの好きな所を教えて？」

「——っ！」

耳元でヒソヒソと囁いてみたら真っ赤な顔で目を泳がせたキャサリンは黙ってハグの体勢になった。

どうやら恋人のように抱き合ってドロドロに溶かして欲しいようだ。可愛らしい。

実はもうちよつとで人間の眷属化が成功しそうなんだけれど、イワンが見たらなんていうかしらね。フフツ。

十四話 清流拳のジェントル、抜剣術のソウル

「止めとけって爺さん。うちの道場は素手で武装した兵士を打倒する事を前提とした実戦武術だ。確かに力で押し切る他流派と違って戦いの流れを制するうちの清流拳は女子供でも習得できるってのが売りだが、衰えていく肉体を抱えて今から学ぼうっつーのは無謀だぞ。健康維持や肉体の若返りに特化した老克流の方が爺さんにはあつてるんじゃないか？」

「ほお、老いを克服するような武術流派すらキャメロットにはあるのですな。興味深いですが、私の目指すスタイルとは別物でしょうな。なに、身体の丈夫さには自信がありますので、心配しなくても大丈夫」「うーん。じゃあ試しに軽く型稽古の指導をするが、身体を壊してもキャメロットにや教会組織のセイントスは進出しないんだぞ？」

清流拳の男の言葉にジェントルは目を光らせた。ラウンドナイトやハンターギルド、傭兵ギルドとはまた別の対怪人組織の名が出て来たからだ。

「セイントスとは如何なる組織なのですかの？ 恥ずかしながら田舎の出で、都会の事は詳しくなくての」

「ローマ帝国のセイントスを知らねえの!? あの何処にでも湧いて出る修道士集団を？ 爺さんの出身は余程の山奥なんだな。いや、うちは竜を敬い共に生きる竜盟会よりだしな」

「ふむ。竜盟会はセイントスとは敵対関係にあるのですな」

「まあな。他にも魔法を操るピクト人なんかとは折り合いが悪い」「ピクト人」

「アイツらすら知らないのか。キャメロットにだって円卓の騎士のトリスタン様がいらつしやるだろ」

「あの歌唱魔法は種族由来の力なのですかの」

「んー、アイドルなんてやってるピクト人なんざ初めて見たが、魔法と言えばピクト人だな。呪術ならヘルウエティイ族。奇跡ならセイントス。竜術なら竜盟会。錬金術と黒魔術はローマ帝国。精霊術はドルイド。気功はキャメロット。気功の本場は東方らしいが、キャメロッ

トだつて負けん」

スラスラと出てくる異能力者の情報にジェントルは上機嫌で頷いた。

「どうやら、女王の可能性は本人が思っているよりも遙かに高いようであつた。眷属としては嬉しい限りだ。」

「ほつほ。清流拳に入会できたら世間話の相手をこれからもしてもらつて良いかの？ どうやら世界は思ったより広いようだな」

「話し相手くらいなら構わないんだが、頼むからギツクリ腰なんかにやならんでくれよ？」

「やれやれと面倒見の良い門下生の男はジェントルを道場に連れて行き、自分よりも爺さんの方が身体能力が高かつた事に世界の広さを思い知つたのであつた。」

「テメエのような生つちよろい男が抜剣術の期待のホープだあ？ 顔の良さが強さと関係があるとでも思つてんのか？」

「俺は思わないが、どうやらお前は思つてるらしいな」

「ザツケンナよ!?! 円卓の騎士がどいつもこいつも美形ばつかなのは明らかに変だつっの！ 絶対に差別されて実力を評価されてないブサイクが影で泣いてるはずだつっの！」

「俺に文句を言われても困るんだが……」

何時ものように抜剣術の訓練に出向いたソウルは妙な不審者に絡まれて困っていた。

「どうやら自分の事が影で噂になつていたらしく、早朝から出待ちをしていた男が道で通せんぼをしていたのである。ここから先は通さないと言わんばかりに両手を広げて反復横跳びをしている。物取りやチンピラというよりは変質者の一種のようにすら感じる血走つた目にソウルは奇妙な寒気を感じた。」

「あー、何だ。目的や動機がサツパリ分からない」

「へへ。俺は抜剣術の道場の向かいの速剣流の師範代のセガレの友人よ。お前が訓練で休憩をする度にキヤーキヤーと女性ファンに囲まれているのが妬ましくて遅刻させてやろうと2時間前からスタン

バっていたのさ」

「すまん。目的や動機がサッパリ分からない」

話をすればするほど理解が出来なくなっていく不審者の男にソウルは頭を抱えた。

見てくれはともかく、生まれたばかりのソウルに人間は理解の及ばない不可思議な生き物であったのだ。

「つまり、お前は女性と触れ合いたいんだな？」

「そつ、そうに決まってんじゃない！ でも、飢えてるみたいで恥ずかしいからオブラートに包んで欲しいじゃん!？」

「そうか」

オブラートもこの時代にあるのかとソウルは感嘆しつつも不審者に告げた。

「じゃあ、お前も抜剣術を習えばいいだろう。休憩中に他の門下生も女子マネージャーと会話しているぞ?」

「……………。いや、騙されないね。どうせお前狙いの娘ばかりなんだ!」

「確か門下生と付き合い始めた娘もいたと思うが…………」

カッと目を見開いた男は流れるように土下座の体勢に移行するとソウルに頭を下げた。

「アニキ! 一生、付いて行きやす!」

「困る」

問答無用でぶん殴れば良かったとソウルは後悔の溜息を吐き出した。

十五話 円卓の騎士と伝説の魔術師

アーサー王物語に登場する円卓の騎士とは、伝説の魔術師マーリンの作り上げた魔法のテーブルに名前の浮かび上がった騎士である。

魔法の円卓にはアーサー王を含めた13の席が用意されており、アーサー王の配下で最も相応しい者の名が自動で浮かび上がってくるように魔法が掛けられている。

新たな円卓の騎士は空席が生まれた時のみ迎えられ、その者は以前の騎士より勇気と武勲を示さなければならない。

ラウンドナイトのS級ナイトの証である円卓に名を持つ騎士はアーサー王を除いて12名。

最優の騎士との呼び声の高い湖の騎士ランスロット。

太陽が出ている限り打倒する事は不可能だと恐れられる陽光の騎士ガウエイン。

聖杯探索を終え荒廃した漁夫王の地を蘇らせたペリノア王の息子パーシヴァル。

アーサー王の義理の兄であり巨人戦線で多くの強者を打倒したケイ。

隻腕のハンデをもつともせず円卓の座を勝ち取った男ベディヴィエール。

怒り狂う災害の化身、ドラゴンを鎮めた戦う吟遊詩人トリスタン。暴威の化身。意識を失おうと勝つまでは決して倒れない狂戦士サ

グラモール。

父の形見のだぶだぶのコートを常に羽織っている小柄な復讐者ブルノー。

災害レベル竜の怪人同士である大蛇と獅子の戦いに介入し、獅子を友としたユーウエイン。

あらゆる脅威を肉体一つで潜り抜ける鋼の肉体を持つ漆黒の女パロミデス。

アーサー王の選定の剣カリブルヌスを砕いて勝利を収めた理不尽の権化ペリノア王。

そして、地下牢に閉じ込められて尚、円卓にその名が浮かぶ呪いの騎士ベイリン。

彼らがラウンドナイトが誇る決戦戦力。円卓の騎士である。

A級ナイトにもS級に引けを取らないと謳われるラモラック卿や聖杯探索に同行したボールス卿とガラハッド卿に常にアーサー王の背後に控える全能執事ルーカンと曲者が多いのだが、彼らの名が円卓に浮かぶ事はなかった。

予言に登場するキャメロット崩壊の象徴。反逆の騎士モードレッドの名も同じように。

そもそもテロリストの代名詞となっているモードレッドを名乗る騎士がラウンドナイトに加入するはずがないのだが、希代の大予言者にして最高峰の魔術師であるマーリンは黙して語らず微笑むばかりであった。

(やっべー、この世界ってFateじゃないの？俺に千里眼がないのってマーリン成り代わりの代償だと思ってたけど違うんじゃない……。そもそも円卓の騎士が別人な時点で気付けよ俺。トリスタンちゃんとか女の子じゃんか)

底知れないマーリンの叡智に多くの円卓の騎士が警戒の目を向ける中、今日もキャメロットはグダグダな日々を過ごしていた。

「そんでね。こう、うーっ、で溜めて。はい！で飛び上がるの。分かるっ。」

「ニャー！じゃ駄目なんですか？」

「むー。やり過ぎると可愛い子ぶってるとか言われちゃうんだよね。そういうのは猫耳モードの時だけにやるから特別感が演出されると思っの」

「なるほどー」

「どうしよう。何でこのやり取りで魔法が使えるようになっていくのか、まるで分からない……」

アイドル候補生としてトリスタンの押し掛け弟子となったシノン

は師匠のトリスタンとエレナのやり取りに取り残されていた。

武術に才能はないと見切りを付けて情報収集のスペシャリストであるカマセ隊に参加をしたり、S級ナイトの一人である吟遊詩人トリスタンに魔法を教えて貰おうと押し掛けたり色々と挑戦はしているのだが、どうしても空回りをしているような虚しさが拭えなかった。「ハハハッ、トリスタンちゃんは波長が合うと魔力の微細な動きだけを集中的に指導して基礎練度を上げようとするからね。普通は演奏や歌唱でジワジワと基礎は固めるものだからシノンちゃんは悪くないよ」

「タリエシンさん」

キヤメロットの宮廷詩人タリエシン。3代の王に仕え続けているブリテン五大詩人の一人。

女神とも混同される魔女ケリドウエンの召使いであった小男グウィオン・バハの生まれ変わりである伝説の魔術師である。

この世の全ての知識を得られるという秘薬を口にして殺害されたグウィオン・バハの魂を持つタリエシンは目の前の事象全てを理解する。

トリスタンとエレナのやり取りも、エレナの種族も、眷属の長であるカーミラも、力を与えた神も。

その全てを理解したタリエシンは記憶の中に居る神が自分を覗き返してくるのに身震いして視線を逸らした。

彼の本質は召使いの小男の頃のままだ。怖いもの知らずのマーリンと違って歴史に必要以上に干渉しようとは思わない。

本当に未来を予知できるから、何も変えようとはしない。それがタリエシンの在り方である。

「そうだ。シノンちゃんにトリスタンちゃんに代わって演奏指導して上げようか。君は理屈だって指導された方が伸びるし才能もある。アイドルじゃなく裏方のバンドマンの方が君もやりやすいんじゃないか?」

「い、良いんですか!」

「ああ。可愛い女の子をシヨンボリさせたくないからね」

現実逃避にキャバクラの女の子に注ぎ込むような男。そんなロクデナシがタリエシンなのであった。

十六話 バンパイア傭兵団の仕事風景

「我々の役目は何時ものように壊滅したカマセ隊とは別方面の哨戒だ。どうやらゲルマン人に巨人王イスバザデンの配下の生き残りが合流したらしい。新たな巨人族の女王となったオルウエンと旦那であり元円卓の騎士であるキルツフが助力すると約束したらしいが、怪人一族である巨人は虎の上位の実力を生まれながらに持ち下級兵士だろうと災害レベル鬼が混ざっている。癩しやくだがバンパイア一族よりも基本的に格上だ。戦闘は避ける」

「ノイ部隊長。もしかしてビビッてんすか?」

「格下にはイキつても格上には手を出せない。これが誉れあるバンパイア一族つすかー。幻滅ですわ」

「止めなよ。ノイ部隊長は身体で女王を籠絡しただけの名ばかりの隊長なんだから。それ以上、貶おとしされたら泣いちゃうわ。ププツ」

バンパイアで構成された傭兵部隊としてゲルマン人との戦争に参加したノイは部下の舐め腐った発言に額に青筋を浮かべた。

村に居た頃と違って気軽に吸血できるようになったカーミラは実戦で戦闘部隊としての強さを高めていく事を選択したノイの為に新たに8人もの吸血鬼を誕生させていた。既存の6人を上回る人数比のバンパイア達はノイの為に生み出したからと名付けすらもノイに一任された事に密かに苛立っていた。戦闘力でノイは部下と変わらないのだ。少し先に生まれたからと言葉の習得すらジェントルより遅いカタコトのノイに指図されたくはない。

特にカーミラ好みの女バンパイアである部下二人はノイの配下でさえなければ寵愛を頂けたはずだと嫉妬で燃えていた。ちよつと物欲しそうにしたカーミラの流し目に言葉にならない叫びを押し殺してノイに頭を下げた屈辱を二人は忘れていない。その上、無意識にだろろがノイはカーミラの寵愛を受けている事で二人にマウントを取ってくるのだ。

女としての独占欲がドロドロとした陰湿な関係を築かせ、巻き込まれた男達は辟易として遠巻きに見る。ノイのバンパイア部隊はそん

な雰囲気です。傭兵稼業を熟していた。

「あ、巨人族発見。一匹で彷徨っているし、ここで狩つちやいません？」

「確か巨人族は強さと引き換えに群れの頭数が少ないんだよな。我々より弱い人間の前線部隊を単独で荒らす事が多いらしいし、間引いた方が良いかもな」

「よし、決定！俺が一番槍な！」

一部のバンパイアはノイに発見報告をする前に独断で巨人に襲い掛かり、ノイが敵勢力の囷だと警告を発する前に戦闘へと発展していた。

「チヨロチヨロと鬱陶しいんだコビト風情がつ!!」

「グブツ」

「こいつ、腕力だけでカーミラ様謹製の鉄鋼鎧を粉々にしやがった」

「気を付けろ。尋常な強さじゃない！」

「この馬鹿者ども！ 畏だ。生け捕りにされる前にコウモリになって散れ！」

ノイの警告に一齐にコウモリになって消えたバンパイア一族のいた地点を意思を持った闇が覆っていた。

コールタールのように粘性のある黒い物体が取り逃がしたレアな餌にグオオツと唸り声を上げるのをキィキィとコウモリ達が騒いで遠巻きにする。

「変身能力。羨ましい羨ましいな。そんな力があるなんて妬ましい。私なんて泥を生み出す事しか出来ないのに。欲しい。アレが欲しい！」

物体の中から這い出てきた青白い女がそう言ってノイ達を見た。

ヘッドロミたいにネバネバした女の視線に不利を悟ったバンパイア達が一斉に散らばって逃げていく。これで少なくとも誰かは基地に帰り着ける。

得体の知れない女を鬱陶しいと巨人が蹴り飛ばそうとして、足にへばり付いた泥に引きずられて地面に引きずり倒された。

ぬおおつと手で泥を振りほどこうとするもあつという間に全身を

泥で覆われて姿が見えなくなっていく。いや、泥に覆われたのではない。元からその身体は泥で構成されていたのだ。自分が生物であると誤解していた巨人は粘性の泥と化して女に吸い込まれていった。

「ああ、これだから巨人は嫌だ。何度、言い聞かせても主の事を忘れる。あの怪人達は頭良さそうだったし教育したら良い部下になりそう。欲しい、欲しいな」

女、アングロ・サクソン七大王が一人、嫉妬のエンヴィーはそう何時ものように他者を妬んだ。

「グウ、まさか基地にすら手を回していたとは」

ラウンドナイトの前線基地に帰り着いたノイ達は基地を襲う巨大な怪鳥の姿に目を剥いた。

凄まじい大きさだ。カーミラの世界で最大の大きさを誇る鳥ボロンベ・ティタンの比ではない。体長が3メートル超え、体重650キロ以上というのが地球での鳥類の限界だったが怪人にとっては無意味な制限なのだろう。体長20メートル以上の空飛ぶ鯨とでも言うべき巨大な怪鳥が人間ののように笑いながら基地を襲っていた。

「ゲツゲツゲ。俺様はアングロ・サクソン七大王が一人、暴食のグラトニー様の配下。怪人ビッグチョー！ ヒヨコ時代から豪華な餌を大量に与えられてノビノビと育てられた鳥類界の勝ち組よ！ 単なるペットが怪人化してグラトニー様すら驚いていた俺様の勇姿に驚愕するが良い！」

何処か力の抜けるような事実を偉そうに語った怪人ビッグチョーは、しかし洒落にならない速度と巨大さで基地を蹂躪した。

おそらくは災害レベル鬼。下位の實力だろうと相性によっては格上のS級を狩れる可能性すらある怪人。災害レベル虎でも下位の實力で飛行速度の遅いコウモリであるノイ達に手を出せるような相手ではない。

「ケツ。ちまちま配下を送り込んで来やがって。どうせならアングロ・サクソン七大王、本人が来いっつーんだ」

燃えるような赤毛を逆立てた一人の男が巨大な怪鳥の目の前に一

人で仁王立ちした。手には剣ではなく、巨大な棍棒を握っている。

木で出来た簡単に折れそうな棍棒を振りかぶり、男は怪鳥を睨んだ。何の流派も学んでいない我流の構えに怪鳥は馬鹿にしたように笑って男を挽きつぶそうと突撃した。

「ビッグスクリュー!!」

高速で回転しながら突撃してきた怪鳥の攻撃を男は笑って迎え撃った。

「激・烈・殴・打」

メキヤメキヤつと膨れ上がっていく筋肉が男の身体を一回り巨大に見せ、振り下ろされた棍棒は怪鳥を粉碎するのみならず地面に数メートルのクレーターを作り上げた。

あまりの威力に男の身体すら衝撃で傷を追っていたが男は気にする素振りも見せずふいーつと汗を拭った。

「くっそ弱え。ペリノア王なら笑って無防備に受けた後、思ったよりも痛かったと怒り狂ってぶん殴ってくるぞ」

ペツと唾を吐いて男、円卓の騎士が一人、狂戦士サグラモールは吐き捨てた。

これがS級ナイトである。

「次元が違う」

冷や汗をかいてノイは主よりも強い人間がこの世にいる事をやっ
と認めたのであった。

十七話 スーパー妄想タイム

ノイのバンパイア傭兵団からの報告で、私と同じ災害レベル鬼が雑魚のように消えていく地獄が展開している対ゲルマン人戦線について知り、私は安全なキャメロットに引き籠もろうと密かに決意した。幻影飛翔剣の達人である山賊は意外と世の中を正しく認識していたってどうか、怪人特有のプライドの高さが知識としては分かっているとも認めなかったというか。少なくとも高く見積もってA級ナイト上位程度の幻影飛翔剣すらマトモに習得しきつてない私じゃゴミのように消し飛ばされる戦場だったのは理解したわ。

ビビってはいたけれど、引き続き傭兵稼業を続けていくつもりであるバンパイア傭兵団を尊敬してしまう程度には私はチキンである。

カマセ隊も思えば決して勝てない怪人に突撃していく蛮勇さを持ち合わせていた。ギャグキャラだけど有能なB級ナイト部隊だというのは本当なんでしょう。単独ではC級ナイトクラスの実力の人員が集まってB級でも有望な部隊だと認められているってのは一種の偉業ね。補充人員は燻っているC級ナイトから幾らでも補充可能。命の安い中世では思ったより良いシステムなのかもしれない。

「配下チートに関しては私の上位互換っぽいアングロ・サクソン七大王もいたし、ちよつとでも強くないとマズいわね」

基本、災害レベル虎でも下位の怪人バンパイアのみが配下の私と違って、泥での取り込みにさえ成功すればどんな強者だろうと無制限に配下出来るかもしれない嫉妬のエンヴィーは天敵だ。本格的に敵対してしまえば無限に眷属を生み出せる真祖の吸血鬼はエンヴィーの良い餌にしかないだろう。

こういう一筋縄ではいかない力を持っているから災害レベル竜が支配しているゲルマン人の中でもアングロ・サクソン七大王の一人にまで至れたのでしょうかね。

「そして、そのゲルマン人を追い散らしたファン族」

確かファン族はローマ帝国と戦争しにここまで辺まで遠征して来るのよね。アーサー王もローマ帝国と戦争してる。

にも関わらず、ローマ帝国はゲルマン人の西ゴート族を傭兵として雇って戦い続け、最後には説得してフン族を追い返している。結果的には滅んだけれど、ローマ帝国も只者ではない。

アーサー王に関しては伝説と史実が乖離してるから、どう転ぶか分からない。

伝説通りならアーサー王はアングロ・サクソンにもローマ帝国にも打ち勝ってヨーロッパの支配者へと反乱させなきや成り上がってる。史実通りならゲルマン人に負けてアングロ・サクソンが王国をブリテンに作り上げる。そう、このゲルマン戦線、キャメロットがアングロ・サクソン七大王に蹂躪される可能性があるのだ。

ローマ帝国は暗君ホノリウスが西ローマ帝国を実質的に支えていた將軍ステイリコを処刑した事で西ゴート族のアラリック1世と敵対関係に陥り、滅びの道へと歩を進める。アラリック1世は理性的な人物で給金をホノリウスに踏み倒されても、一族を蛮族だと不当な言い掛かりで処刑するような西ローマ皇帝と交渉しようとしたが、侮蔑と挑発の返答と会談といって騙し討ちするような西ローマ皇帝ホノリウスに愛想を尽かしてローマ市内に攻め込んだ。

西ゴート族はゲルマン人の一派。怪人だとしたら恐るべき忍耐の持ち主だ。

やはり史実と伝説とは乖離している。史実よりならローマ帝国はアーサー王には負けていない。

アーサー王が反乱で没落した後にアングロ・サクソンがブリテンを支配したのかと思っただけれど、恐らく違うでしょう。ゲルマン人がブリテンを支配して七王国を作り上げるにはアングロ・サクソン七大王が全員生きている必要がある。戦争に負けたにも関わらず、あの円卓の騎士から密かに全員が生き残れるとは思えない。一部のアングロ・サクソン七大王が生き残ったのなら怪人の性質上、自分を頂点とした王国を作りには必ず動く。七王国は成立しない。

「世界線の違い。キャメロットが勝てば伝説寄り。ゲルマン人が勝てば史実寄り」

そもそも伝説にしか登場しないアーサー王と円卓の騎士が登場す

る以上、伝説寄りだと判断しても良いのだけれど、キャメロット崩壊の象徴である反逆の騎士モードレッドがいなかったり、ローマ皇帝が史実に登場する暗君ホノリウスだったりと首を傾げる事が多い。アーサー王伝説に登場するローマ皇帝はルキウス・ティベリウスだ。他にもアングロ・サクソンを倒していないのにアーサー王のガリア遠征が成功してフランスあたりの土地を征服済みだし。

ブリトン人のアーサー王がローマ帝国にガリア人扱いされてるのはこのせい。どっちかというところローマ帝国の支配から蜂起して独立したと見られている。

過去にローマ帝国の英雄カエサルに敗れて苦汁を飲まされていたヘルウエティイ族なんか一族を上げてアーサー王に従っているし。呪殺や暗殺されたローマ帝国の士官は多いらしい。こりや原作における忍者的な位置にヘルウエティイ族はいるな。もしくはアサシン。残酷竜を封印していたセイイツや残酷竜の子孫を自称していたデスポーンの竜盟九闘士の前組織だと思われる竜盟会とワンパンマンの原作に関係する組織や、巨人や湖の乙女や有名な魔女モルガンの姉妹達、9人の魔女とか勢力図が混沌としていて先読みが出来ない。

モルガンとよく混同されているアーサー王の異父姉であるモルゴースがいるし。ガウエイン、ガヘリス、ガレス、アグラヴェインはこの世界だと彼女の子供だ。

逆に魔女モルガンは妖精モルガンという名も持っていて、湖の乙女との関わりやケルト神話の女神モリガンとも同一視されたりと考察するほど頭が痛くなってくる。

実際に情報を探ってみれば魔女だ妖精だと既にこの時代から真逆の評価をされていて、モーガン・ル・フェイの実態が掴めない。伝説級の力を持つ魔女だったのがハッキリしてるくらい。こりやモードレッドが生まれるか分かんないわね。伝説の島、アヴァロンを統治する9姉妹の長女である優れた医術を持つ心優しい歌姫の可能性が出て来た。

「アングロ・サクソン七大王とローマ帝国の二正面作戦をアーサー王は取った。だが、キャメロットはガリア支配で経済的に豊かになりつ

つあり、崩壊の原因となったモードレッドもいなくてランスロットとグイネヴィアが正式に結婚して盤石な体制となっている。アーサー王はグイネヴィアの姉妹であるギネヴィアを王妃とした。おまけに不老不死をもたらずエクスカリバーの魔法の鞘を盗まれていない！
明らかに変だ。アーサー王伝説におけるキヤメロット破滅フラグという物がことごとく取り除かれている。聖杯探索で死ぬ予定の円卓の騎士すら生還して戦力が減らない。13の円卓の席では伝説に登場した騎士の方が多くて足らず、S級ナイト相応のA級ナイトなんてもので生まれる始末」

なるほど。アーサー王が二正面作戦に踏み切る訳だ。戦力は足りていると判断したのでしようね。

このまま本当にヨーロッパを支配する新たな大帝国の王に成り上がっても変じゃない。不老不死の王を抱く大帝国だ。歴史すら変わるのでは？

いや、ここはワンパンマン世界。現実の歴史通りにならなくて良いのか。ワンパンマン世界は統一政府によって統べられている。このままアーサー王が全世界を支配しても教科書の内容が多少変わるだけで原作通り。原作時間軸にアーサー王が生存していても実は不自然じゃない……の？

キヤメロットには老いを克服する武術流派まである。円卓の騎士が寿命で死ぬ事すら期待できないかもしれない。

そもそも聖杯も既に持ち帰っているのよね。聖杯に注がれた飲み物を飲むと、傷や病気が治り、不老長寿をもたらすというアーティファクトの杯。え、もう寿命は克服しているの？

「マズい。本当に勝てなくなる。サイタマの出現前にアーサー王によつて怪人が駆逐……」

されるか？ 巨人の女王と元円卓の騎士の婚姻を認めたアーサー王が怪人だからと無差別に排除するか？

「思い違いをしている？ 地球意思の目的が人類の排除ならば突然変異で生まれる怪人はもつと強くても良いはず。地球意思ですら、アーサー王の覇道を認めているとしたら」

確か未来予知が可能となる第3の眼を習得した超能力者サイコス
は未来を見て発狂してこう言った。

【世界征服に意味はない。人類は、ホモサピエンスは調和が出来てい
ない。食って糞して交尾して増えるだけ増えて何もしない。滅ぼさ
なければならぬ】

そう言つて、彼女はヒーロー協会を追い詰める怪人協会を結成し
た。一人の人間が作り上げた組織にしては異常に強力無比な組織を。
どんな未来を見たのかは不明だが、おそらく地球意思の影響化に
あつたと思われる。

世界征服に意味はない。既に試した事があるかのように断言して
いる。

調和とは発見した怪人を基本的に残さず滅ぼしていた原作の人類
を批判しているのか？

増えるだけ増えて何もしない。これは可能性を狭めていると言ひ
たいの？ だが、何をさせたい？

生命の目的である生きる事ならば人類以上に上手くやっている生
物はいない。

環境汚染で環境が激変しようと地球自身にとっては問題ないだろ
う。単に住む生物が一旦全滅して新たにやり直すだけだ。いや、ワン
パンマン世界において、人類は恒環境生物と呼ばれている。環境さえ
も自分達の為にコントロール出来る特殊な生物。たとえやり直して
も人類だけは滅びないと予測した？ いや、逆か？ 既に一旦生物が
全滅してやり直している最中なのに、科学力で人類が無理矢理に生存
し続けていたとしたら？

怪人とは進化した汚染環境に適應した生物群の総称なのか？

だとしたら次世代の生物の正当な進化を阻む、前時代の環境を否定
した生物が人類。ホモサピエンスという事になる。

なるほど病原菌。害悪文明か。ワンパンマンの原作に最初に登場
した怪人ワクチンマンの言葉通り、人間つてしごとすぎて一周回つて
気持ち悪いな。

地球の目的は生命の進化だとして。科学力で問題を乗り越える人

類はアウトか……。いや、それとも単に宇宙に追い出したがつているだけか？ 地球環境を悪化させて進化の終点に到達した人類を惑星外に巢立たせ、新たな生命体の可能性を探っている。コジツケだけでなく、納得できてしまうわね。

「生命の進化を地球は目的としてるのに、例外のバグとして個体の強さが飛び抜けたサイタマが種族としての強さを追い求めている怪人を一方的に打ち負かす。なるほど、腹が立つでしょうね」

状況推測はこれで正しい気がする。単に人類を地球意思が何の意味もなく滅ぼそうとしてるより、人類の瑕疵が原因で地球に滅ぼされようとしてるって方が納得がいく。

そうなるよ。

「アーサー王は地球意思の期待を背負って、イナゴのように安全な地と食料を求めて暴れる怪人ゲルマン人と科学文明で環境汚染を繰り返しているローマ帝国と対峙して調和をもたらそうとしている理想の王。こういう事？」

私がこの地に送り込まれたのは人類を滅ぼす為ではなく、アーサー王に助力して原作のような失敗をしないよう導けて理由。かもね。

……。様子見を継続しよう。誰を敵に回すべきか、また白紙になつた気がする。

どう転ぼうと良いように強くならなきゃ。

十八話 『女キラー』 カーミラ

現状、七ヶ月の鍛錬で幻影飛翔剣にそこそこ熟達したのと、人間の眷属化に手応えを感じ始めていたのを除いて魂を参照する事での強化は特にない。

安全なB級依頼を好んで受けていたから、あのハゲ山賊以外にろくな獲物がいなかったのも理由の一つね。

怪人もそこそこ退治していたから生態として異能を持った怪人も何人かはいたけれど。金の亡者の怪人が持つ、金持ちを見分ける物欲センサーとか。怪人ならず者が持つ、強そうなオーラを発する強者擬態とか。戦闘には寄与しない異能が多い。一応、何かの役に立つかと習得してはみたものの、イワンの嫉妬エネルギーとエネルギー過剰放出による肉体強化とは比べ物にならないシヨツパイ異能ばかり。

エネルギー過剰放出による肉体強化は気を習熟したら効率が良くなったし、血液のストックを消費しないでも気で代用できるし、一瞬の放出に抑えれば燃費も気にならない瞬間加速が可能だったり、凄く便利な異能だって判明した事で私の中でイワンの株が上がり続けている。うん、イワンは褒美として眷属に迎えてあげましょう。キャサリンと約束もしてるしね。

人間の眷属化に魂を使用すると記憶や技術の参照元がなくなるから不便だけれど、イワンの事はもう生まれて死ぬまでの記憶を根掘り葉掘り調べ尽くしたし、問題ない。

怪人のDNAの調査とか科学での解析はまだ私には出来ないけれど、魔術に関係すると思われる魂の仕組みに関してはそこそこ詳しくなってきたと思う。眷属の吸血鬼を血から発生させて直ぐに血を吸って体内に魂を取り込んだり、どうでも良い下っ端犯罪者の魂を素に吸血鬼モドキの肉人形を作り出して、また魂を吸い取って解析したりと試行錯誤を繰り返した。

おかげで見た目だけなら人間に見える元人間の怪人を発生させる事は出来るようになってる。

腕力が異常に強い癖に肉体は普通の人間より脆いとか失敗作続き

だけれど、自動で組み上げられる眷属のバンパイアをそっくりそのまま真似した怪人なら、近いうちに自力で生み出せるようになる。バンパイア以外の怪人を生み出したかったら、ゼロから肉体を生み出すより怪人細胞みたいに怪人に変貌する血液を飲ませた方が安定しそうですね。そっちは難易度が違い過ぎるから、まだまだ時間が必要だと思っただけ。

おそらく、人間の眷属化は最初から出来るようなイージーモード。私を送り込んだ神様の保障付きだしね。

それ以上を求めると最初に選ばせて貰ったチートの一つ。使い魔作成に該当するんでしょ。千年間の時間と引き換えのチートが易々と手に入るなら苦労はしない。

あと、人間の中に魔法を自力で使えるようになった賞金首がいたからちよつとした手品なら出来るようになってる。

指からライターの火を出す。そよ風を吹かす。掌に水滴を溜める。野宿の際に下の土を少し軟らかくする。

その程度の事しか出来ないけれど、魔力や魔法があるのは確か。これがドルイドの精霊術なのか、ピクト人の魔法なのかは知識不足で分からないわね。

それで、私が安全なB級依頼ばかりを引き受けていたのは単にチキンって理由だけじゃない。

幻影飛翔剣を習得しきれていないのも研鑽の時間が足りなかったからって一面もある。私が幻影飛翔剣を後回しにしてその時間、何をしていたかって言うと。

「ワン・ツー・スリー。回って、ワン・ツー・スリー」

「もつと一撃に命を込めろ！ 防御など考えるな！ 一撃で相手の息の根を止めろ！」

「おら、気を失って倒れるな。邪魔だ！ ヤカンを持ってこい。水をぶっ掛ける！」

カマセ隊の隊員が習得していた爆裂流の道場で指導を受けていた。本当にカマセ隊の武術家は手習いに過ぎなくて、魂を参照するだけ

じや爆裂流の深奥には全く届かなかったのよね。記憶には結構、凄い達人が多くて中途半端なのは勿体ないと道場の門下生となった。

S級ナイトの一人、鋼の肉体を持つ漆黒の女パロミデスが爆裂流の達人らしいし門戸は広い。入るだけなら紹介状もいらず紛れ込むのは楽だったわね。

「カーミラさん！ お手拭きです、どうぞ！」

「キモい。その布、貴方の汗の臭いがするわ。デレデレと私の胸を見てないで真面目に訓練したら？ 二度と、私に話し掛けないで」

「ありがとうございます！」

銀髪赤眼の巨乳美女な私は道場の門下生となった時から大人気で注目の的になっている。女なら一夜の相手をして上げても良いけれど、むさ苦しい男に付き纏われて正直ウンザリ。あしらおうとキツイ口調で罵れば一部の豚が喜んで一層纏わり付いて来るようになった。まあね、気持ちは分かる。

夜道で襲い掛かって来てくれたら逆に美味しく新鮮な血を飲めるのだけれど、変に礼儀正しくて一線は越えてこない。せいぜい立ち稽古中に身体に触ろうとスケベ顔で向かってくるくらい。いや、もう死刑で良いんじゃないかしら。

パロミデスに憧れて門下生となった数少ない女門下生と仲良くなれていなかったら爆裂流の道場はこの世から消えていたわね。

「カーミラ、雑魚に構ってないで俺と立ち稽古をしろ。今日は俺が勝つ」

「へえ。ボコボコにされて泣いてた雑魚がイキってるわね。何、私と貴方が対等だとも思ってるの？」

「爆裂流以外の流派を頼みにしている貴様が俺より格上のつもりかっ！ 死にたくなかったら、その口を閉じておけ」

メラメラつと怒りに燃える大男ゴツサムがそう言っつて隅のリングを指さした。簡易なヒモで覆われただけの板張りのリングだが、一種の结界になっていて内部の衝撃を外部に通さない仕様となっている。攻撃の威力が高い爆裂流の必需品魔道具だ。錬金術で比較的安価で作れるらしく大量に出回っている。

こういう不可思議なアイテムを当然のように用いたり、単なる一武術流派のトップ程度の男が災害レベル鬼である私と渡り合えたりと色々とバグっているな。

ゴツサムは他流派との親善試合や闘技大会で何度も勝ち上がっているような武術界でも有名な男だが、当然S級ナイトのパロミデスはこの男の比ではない。

以前、爆裂流に遊びに来たパロミデスに勝負を挑んで痛い目を見たらしく、それ以来この男は強い女というものを毛嫌いしている。それでS級ナイトの卵と賞賛された私にも突っ掛かってきたのだ。面白から幻影飛翔剣を利用して散々いたぶって遊んでやったら道場を出くわす度に勝負を挑まれるようになってしまった。

止めてよね。成長スピードでアンタが私に勝てる訳ないじゃない。実際、魂の記憶を利用しない普通の鍛錬であつても私は爆裂流を中々のスピードで習得していつている。

流石に幻影飛翔剣ほどの習得速度じゃないけれど、何人もの魂を吸収した私は武術の才能も高いのだと思う。ま、普通の新人と比べたらの話だけど。

「おお、『男の中では最強』ゴツサムが、『女キラー』カーミラとやるつてよ」

「何だと！ あのホモホモしいゴツサムがガチ百合のカーミラとやってる!？」

「おい、向こうでカーミラがSEXしてるらしいぞー！」

「何だつて!？」

本気で皆殺しにしてやろうかな。こいつら。

十九話 武術の最果て

「ふんぬア!!」

爆裂流の雄ゴツサムが拳を振るうと空気が爆発したような爆音を奏でた。特殊な気の配分と卓越した肉体操作で拳が炎に包まれ燃え上がっている。

これが爆裂流の達人が至る境地。爆裂炎上拳。爆竹のような音が鳴るだけの攻撃など爆裂流では未熟者の証なのだ。

炎が拳に纏わり付こうと爆裂流に精通すると火傷はしない。気で炎に対する耐火性が上がっているのだと思う。

パロミデスのように達人を超えて名人の領域に到達すると溶岩の身体を持つ怪人を素手で一方的に殴り殺せるようにすらなるらしい。ビームとか撃たれても武術で逸らせるのは原作のS級ヒーロー、バングと兄のボンブが証明している。こんな攻撃くらい武術家ならば常識なのよね。

「フフッ」

それを私は馬鹿にしたように笑って無防備に受ける。当然、炎を纏った拳は私に直撃するが、景色が揺らめくように私の姿は掻き消えた。

残念、残像だ。

ゆらりと特段に早くもないスピードで放たれた私の拳は、しかし幾つもの軌道を描いてゴツサムに直撃する。こちらは幻覚。

特殊な足運びで間合いを悟らせず、トントンとゴツサムの周囲360度から足音が響く。これが飛翔。

身体操作と気の間隙を突き詰める事で現と幻の境を操る。

これで、幻影飛翔剣。

剣術の一つだけれど、剣がない程度で無力化は不可能。私も人間の身体能力で到達できる限界距離までコウモリを広範囲にばらまいて無差別攻撃をしていなかったら逃げられていたでしょうね。逃げ場の少ない交易路が戦場で幸運だった。

「ヌガア！ カーミラ、本気でやれえ！」

私の拳が何度も何度も全身に叩き込まれているのに微塵も効いてないようでゴツサムが吼えた。一応は爆裂流で攻撃を叩き込んでいたのだけれど、爆竹の音が3倍近く大きくなった程度ではゴツサムの鍛え上げられた肉体と気は突破できないようね。嫌になるわ。怪人の身体能力でぶん殴ってるのにまるで効かないんだから。

幻影飛翔剣もあの山賊だったら数十の幻覚を操れるのに私は十も行かない。身体能力の差で飛翔こそ私の方が上回ってはいるけれど。練度不足だと言外に突き付けられて眉をヒクつかせながらも、ゴツサムの要望通り威力を増して上げた。

本当なら肘から鎌を生やした拳と斬撃のフルコースをお見舞いしたいけれど曲がりなりにも爆裂流は素手の流派。半殺しにするなら、素手でやれって怒られる。

だから問題ないようにイワンの異能、エネルギーの過剰放出による肉体強化の応用を利用する。攻撃するタイミングで肘からエネルギーを一気に噴射する事で一撃の威力を飛躍的に高める気力放出。肉体の強化はされない代わりに、災害レベル鬼の怪人であるバンパイア女王の私の腕が折れる程の威力を持つ攻撃を繰り返せる。

この攻撃なら、頑固なゴツサムも泣いて喜んでくれる。

「アツガガガ」

爆裂流の威力増強も併せた全方位からの拳の爆撃にゴツサムが血達磨に整形されていく最中、それでも反撃として繰り返された燃える蹴りが偶然、私のいる位置に届いた。

偶にゴツサムの攻撃が幻に惑わされなくて私に直撃する事がある。本人は直感の一言で済ませるから、対策の立てようがない。

「グゲアツ」

ガードは成功したのに燃え盛る蹴りは私の腕をこじ開けて内臓を破裂させた。空中に吹き飛ばされた私は追撃に入るゴツサムの姿を見て、咄嗟に気力放出で着地点をずらす。何人もの私が板張りの道場に着地する中、ゴツサムは吹き飛ばした軌道から予想しただろうズレた着地点にいた幻の私に拳を叩き付けた。

「脳筋が変に頭を使うから、こうなるのよ」

「ぬおおお!?!」

お返しに気力放出で加速した蹴りでゴツサムの息子を蹴り潰してやっつて立ち稽古は終了した。

「ひい。流石は『女キラー』カーミラ。男には容赦がねえ」

「誰か師範代を呼んでこい。セインツ程じゃないが、治療を出来るはずだ。これはあまりにも可哀想だ」

「おいおい。誰もがサグラモールみたいに気での自己治癒が得意な訳じゃねえんだぞ。最悪のパターンも考えてやれよ」

「突っ込まれる側なら潰れても支障ないんじゃないやね?」

「お前、何言ってるの?」

「ん? 女の顔を狙うようなアンタラが、何が可哀想だつて?」

「そうよね。セクハラも酷いし」

「ゴツサムのせいで女門下生の立場が悪かったけど、カーミラさんが来てくれて本当に助かったものね。強さは正義よ」

「綺麗で気持ちいいしね」

「ちよつと待った。貴女、私から離れてくれる?」

「あつ」

道場中の注目を集めていた立ち稽古を終えた私は歓声で迎えられた。

パロミデスに一方的に確執を持つてるゴツサムのせいで爆裂流では男女の間に亀裂が入っている。あんなでも武術界でトップレベルの武術家だから信奉者も多い。パロミデスに憧れて女性もよく入門してくるのにセクハラに耐えられなくて女門下生が少数しか残らないって事態になってるくらい。

まあ、そのおかげで私も美味しい思いが出来てるから、良いけれどね。

「ふうー。未だにゴツサムに苦戦しちゃうとはね。私の爆裂流の成長って本当に順調なの?」

そう私は爆裂流の師範代である爺さんに尋ねた。パロミデスと共にキヤメロットまで旅をしてきたサラセン人、イスラム教徒へ。

いや、この世界だとサラセン人はサラセン人で宗教は関係ないかもね。キリスト教とセインツは何か微妙に別物っぽいし。そもそも時系列的に創始者のムハンマドが生まれてないからイスラム教だって誕生してないし。

セインツとは別の体系の奇跡の行使者。それがサラセン人だと覚えときや良いかな。

「順調すぎて怖いくらいじゃ。立ち稽古の度に研ぎ澄まされていく技の冴えにゴツサムも焦っておる。お主が色々と幅広く技術を追い求めていなければ既にその拳に炎を宿していたじゃろうな」

「ふうん」

やはり成長スピードは早いのか。魂の記憶の模倣ってズルだけじゃなく、複数の人間の魂を集める事で才能すら高めていけるという予想は正しいみたいね。

じゃあ、とゴツサムを治療する師範代の爺さんを見て私は聞いた。

「パロミデスに勝てるようになると思う？」

カッと目を見開いたゴツサムと私の視線に爺さんは難しい顔をすると一言だけ告げた。

「それは怪人に人間は勝てるのかという問いと同じじゃ」

才能と鍛錬によって人間は怪人に勝てるようになる。

だが、普通は素の戦闘力で怪人を人間が上回ることはない。それどころか怪人は鍛錬などしないにも関わらず、S級だろうと勝てるか怪しい災害レベル竜や竜以上の怪物として生まれる事がある。

パロミデスに勝つなら、人間の限界を超えろと爺さんは言ったのだった。

二十話 悪魔の囁き

「クソがつー」

バゴオンと炎に包まれた足を振るいゴツサムは裏路地のゴミ箱を粉砕した。

何時も不機嫌そうな顔をしている男だが、今日は一段と荒れている。私との立ち稽古に敗れたからか、男のナニを蹴り潰されたからか、或いは。

「フッフ。お前ではパロミデスには勝てないと師範代に言われて苛立ってるの?」

「カーミラ」

獣のような眼光で睨み付けてくるゴツサムにこの推測が当たっているのだと私は確信を持った。

そもその話、ゴツサムは確かに荒くれ者だが元々はこんなに女を見下すような性格ではない。それは門下生から聞いて分かっている。

ゴツサムがここまで拗らせたのはパロミデスと試合をしてからだ。女は男が守るべきなんて古風な価値観で女門下生の入門に反対して文句を付けていたゴツサムをパロミデスが半殺しにしたらしい。まあ、爆裂流はパロミデスの同郷の爺さんが師範代だしね。一門下生に過ぎないゴツサムが凶に乗っていたのを懲らしめたに過ぎないから、それは問題ない。ゴツサムも立場は弁えた。

初めての敗北を経験して誇りに傷が付いたなんて事もない。ゴツサムは強者だが、キヤメロットには怪物が多い。これまで何度もゴツサムは負けて、その度に相手より強くなる為に鍛錬に集中して最後には勝ってきた。私に何度も立ち稽古で敗北しているが、その事をゴツサムはそれ程、気にしていない。

おそらくは私になら勝ち筋が見えるからだ。勝利には何が必要か立ち稽古の中で見定めて具体的なビジョンを思い描いているのだろう。

だが。

「ゴツサム。貴方、パロミデスに自分ではどう足掻いても勝てないっ

「て認めたわね？」

「き、さまっ」

怒りに声は震えているけれど目に宿る虚無が私の発言を肯定していた。

なるほど。S級ナイトとはそれ程の存在か。そもそも目指そうとすら思えないような人類のハイエンド。そういう生き物か。

怪人の物差しだとS級は絶対強者って訳じゃないけれど、まあ災害レベル虎のノイ達が災害レベル鬼の私を見る視線を思い出せば分かんなくはない。

私だつて魂の蒐集という反則技を持っていなければ未来に現れるサイタマの影に怯えながら自堕落な日々を続けていたでしようし。次元が違い過ぎて日々の鍛錬での強さの積み重ねが馬鹿馬鹿しくなってしまうのよね。ゲームに例えるならレベルキャップに到達してもラスボスが倒せない強さに設定されてるようなもの。ネトゲの類いならともかく一人用ゲームでエンディングに到達できないってのは欠陥。レベル上げすら億劫になる。

「お前はパロミデスを知らないから、そうも気楽に構えていられるのだ！」

「凶星を指されて真っ赤になつてる。クスクス」

「……っ!!」

怒りに震えるゴツサムを笑い、私は瓦礫に腰掛けた。この男ならきっと乗る。只管に強さのみを追い求めて人としての正道など目に入らない、この男なら。

「ねえ。もし魂を売ればパロミデスに勝てるかもしれないと言つたら、どうする？」

悪魔の囁きに怪訝そうな顔でゴツサムは続きを促した。

「バンパイア一族。人間の怪人化か。身体能力の向上と驚異的な再生能力。ふん、話にならん。それではパロミデスには勝てん」

「かもね。怪人の中では非力な方だし、身体強化はちよつと筋肉が増えるだけって可能性もあるわ」

「時間の無駄だったな」

興味深そうに吟味こそしたものの、そう言ってゴツサムは背を向けた。

ま、そうでしょうね。怪人を一方的に葬る円卓の騎士を知ってるゴツサムが怪人化に期待を抱くはずがないもの。

「でも、寿命はなくなるわよ?」

「なに?」

ピタつとゴツサムの足が止まった。

その利点を武術家であるゴツサムが思い至らないはずがない。

「人間は歳を取ると身体が衰える。特に爆裂流は強靱な身体能力があつて初めて真髄を発揮する。ゴツサム、貴方19だっけ。若いけど50年もすれば老克流の老人達に勝てなくなるんじゃない?」

「……………だが、それでは意味がない。それはパロミデスより長生きすれば勝てると言ってるようなものだ」

考え込んだゴツサムに私は一つの毒を吹き込んだ。

「円卓の騎士は聖杯を持っている。彼らに寿命なんてないわ」

「なん……………だと……………」

一方的に自分だけが衰えてパロミデスは只管に強くなり続ける。

そんな事、貴方は耐えられるかしら。ゴツサム。

「私が与えるのは膨大な時間。果てしない時の流れの中で地獄の鍛錬を続けてみなさい。S級だろうと強さの為だけに生きるなんて難しい。もしかしたら千年後には貴方の方が強いかもよ?」

「……………、カーミラ。貴様、人としての人生では、俺がパロミデスに勝てる可能性などはないと思ってるな?」

「ええ。貴方もでしょ?」

飢えた獣のような眼光のゴツサムと私の目線があつた。おそろく、私も似たような眼をしている。

私はS級ナイトの強さを感じた事はないけれど原作という運命の流れを知っている。S級ヒーローの強者達でも災害レベル竜には苦戦する事も、災害レベル竜以上には勝ち目がない事も、災害レベル竜以上がサイタマを本気にすら出来ない程度の実力だという事も、全て

が理想通りに上手く行こうとも私が到達できる位階は災害レベル竜以上だろうという事も、私は知っている。

別にサイタマと戦う必要性はない。むしろ戦う状況に陥ってしまった段階で私の敗北が決まったようなものだ。

だが、怪人としてのプライドが矮小な人間の顔色を窺って生きるという状況に納得がいかない。

災害レベル竜が激突している戦場であるゲルマン戦線を避けて、S級ナイトを刺激しないよう大人しくしているのは構わない。その安全策が戦略的に必要だからだ。強くなりさえすれば、どうとでもなる。アングロ・サクソン七大王も円卓の騎士もいずれは何人か眷属にしたいと思ってるくらいだし。

でもサイタマは駄目だ。そもそも生まれさせないか、関わらないか、頭を垂れて陣営入りをするかの選択肢しかない。戦う前から敗北している。

それが、どうしようもなく我慢がならない。

「いいだろう。その提案に乗ってやる」

飢えた獣が牙を剥いて笑った。

よし、爆裂流の達人の魂ゲット。若いのにA級上位の実力に至る才能も併せて入手。

フフフツ。ちゃんと約束は守って上げるから安心なさいゴツサム。貴方の全ての技術を模倣した後で、人間の眷属化技術が完成したらね。

二十一話 バンパイアと言うよりサキユバス

ゴツサムの魂を手に入れてから、本当に世界が変わったと錯覚するくらい楽に爆裂流も幻影飛翔剣もマスター出来た。

魂の記憶による模倣も相当なズルだけれど、並外れた才能って奴も同じくらいにズルい。中途半端な幻影飛翔剣を獲得するまで7ヶ月も必要だったのに、二つの流派を完コピするのに3ヶ月ちよつとで良かった。そうよね。思い返せば、あの山賊が幻影飛翔剣を訓練した時間は30年。ゴツサムが爆裂流を習って5年。6倍近く費やした歳月が違うのに、戦えば多分ゴツサムが勝つもの。

それにも関わらずゴツサムは才能のなさに苦しんでいたんだから酷い話ね。下手に頂点が見える位置にいると自分も至れるのではないかと誤解してしまうのかもしれないな。

ゴツサムとパロミデスの模擬戦。ゴツサムの記憶を手に入れて真っ先に見たのだけれど。

パロミデスにゴツサムは掠り傷も与えられてない。避けたんじやない。避ける素振りも見せず平然とゴツサムの拳を受けて、そのまま殴り返してきてる。

その上、パロミデスは一撃でゴツサムを仕留めてしまわないよう爆裂流を使用しなかった。ただの大振りのパンチの威力がゴツサムの爆裂流の威力を凌駕しているのだ。

これはゴツサム以上の攻撃力と耐久力に幻影飛翔剣での攪乱が可能になった私でも勝ち目がないわね。

パロミデスが円卓の騎士じゃ弱い方だって本当なのかしら。災害レベル竜とは戦わせて貰えないって彼女が愚痴を言ったらしいのを私は知っているのだけど。

それが本当なら、パロミデスの強さはS級ヒーロー最弱のぷりぷりプリズナー以上、災害レベル鬼上位の深海王以下って事になる。

いや、パロミデスが原作の武術家スリユー並の強さで、ゴツサムがその他のモブ武芸者って方が分かりやすいか。

「これは眷属が災害レベル虎で最弱なのと同じように私も災害レベル

鬼の中じや最弱の強さに設定されてたわね」

災害レベルは上に行くほど同位階でも強さに大きな開きがある。爆裂流と幻影飛翔剣を獲得して、やっと私も災害レベル鬼と名乗っても恥ずかしくない強さを得られたのかもしれない。

「A級賞金首、挑戦してみる？ 今なら……いや、その前に人間の眷属化を先に完成させちゃいましょうか。パロミデスとの繋がりがあつのに、ゴツサムが行方不明のままなのはマズい」

他にも気になる情報があるし、先にそつちを確かめに行きたい。賞金狩りではなく傭兵の一員として動いてみるのもありね。

で、人間の眷属化の目処が立ったのが、更に二月後。ワンパンマン世界にやって来て1年半が経った頃。

下つ端犯罪者の魂を繰り返し実験台に使い続けたら摩耗して消えて魂すら不滅じゃないんだと驚いたり、原作の怪人である転生フェニックス男が冥界からの援軍だと死者蘇生を行った事を思い出して瞑想してみたり、魔術師の魂を吸収して知識を蓄えた方が早いと諦めたり、体内に異空間を作り上げられれば便利だなと同じく転生フェニックス男を参考に固有結界を作ろうと試行錯誤して、だから魔術師の魂を吸収した方が早いって頭を掻きむしったりして。

最終的に魂へエネルギーをこう、ふわつと込める事で人間を眷属に出来た。

理論的に理屈だつて人間を眷属にしようと思つたら何度やつても失敗する。無理。もつと霊的知識とか天才的な頭脳が必要ね。本能任せで何となくこうだつて頑張つた方が遙かに上手くいく。

まあ、本能任せの自動生成だと怪人細胞の血液バージョンは何時まで経つても出来ないけれど、そつちはゆつくりやろう。これからは頭脳派の人間も狙つて吸血すれば良いんだ。

約束通り、眷属にイワンとゴツサムを。ついでにキャサリンとリリシアを生まれ変わらせた。単なるハーレムメンバーの二人を眷属にしたのは純粹に危ないから。

キャサリンは18、リリシアは15になつて食生活が改善した事で

ますます美人になってたしね。この時代だと無力な人間は食い物にしてくれって言うてるようなものだし失いたくないならハーレムメンバーはバンパイア一族に迎え入れた方が良いのだ。永遠の若さを手に入れた二人は村の女性から羨望の目で見られてた。

ハーレム入りを許した女性達はワザと眷属にしてない。バンパイア一族を至高の存在として崇める価値観を村の人間に完全に植え付けたいからだ。

最終的にハーレムメンバーは全員バンパイアにするけど、そうしたら今度はハーレム入り自体のハードルを上げる予定。

選ばれた者のみが血族に迎え入れられるという文化を定着させて、私以外のバンパイアも人間の眷属化が可能になればキヤメロットも下手に手出しを出来なくなるはず。特殊な一族なのだと言文化理解を名目に共存の道を探らせれば、一部のバンパイアが暴れても一族にまで類は及ばない。私の異能でポンポンと怪人を誕生させ続けていたら脅威を感じる層は必ず出てくるだろうし用心しないと。

それで、残りの男達なだけど。

気付いたら五ヶ月も経過してて私と実力に大きな開きが出来ていたゴツサムはむすつとしてたわね。嘘は吐いてないから詐欺だと糾弾も出来ないでしょう。そもそも私は魂を吸収すればするほど強くなるチート能力者なんだからゴツサムがライバルのつもりなのは烏漕おこがましいわ。

悔しかったら鍛錬で強くなれば良いの。怪人は場合によっては急成長する事があるって怪人化の秘法の情報を教えて上げたんだから、頑張つて欲しい。

最期に怪人、寝取られ男に突然変異する程、私を恨んでいるイワン。キヤサリンとの約束もあるし、私のパワーアップに結構な貢献をしてるしでイワンには何らかの褒美を上げなきゃいけない。でも間違いないく逆らつて問題を起こすって悩んでいたのだけれど。怪人としての実力が災害レベル狼にまでダウンする代わり好きな容姿のバンパイアを生み出せるようになっていた私は閃いた。

そう、もういつそイワンもハーレムに入れて上げよう。

「やめへ。やめえー」

結論を言おうとイワンをTSさせた。

ロリ巨乳の金髪美人バンパイアとして肉体を生み出し、そこに新たな魂が宿る前にイワンの魂を埋め込んだ。

キャサリンやリリシアと姉妹に見えるような外見に変貌して愕然としていたイワンを見て、どうやら人体実験は成功したようだと思つてなんかない。これはイワンとキャサリンの夫婦円満の為に……。ちなみに男のアレも付けた。私は嫌だけどキャサリンにはあつた方が良いみたいだしね。

「大丈夫。直ぐに気持ちよくなれますから」

「キャサリン。イワンが大人しくなるまでドロツドロに汚し尽くすから協力してね。とりあえず男だつて矜持を粉碎する為に男のアレを模したオモチャを用意したから後で使つて。リリシアも明日は協力してくれるみたい」

「う、うーん。あの娘も、ですか。ちよつとそれは抵抗が……」

「既に私と三人でやつてるし、姉妹同士でやらせた事もあるのに？ 妊娠が気になるなら攻めに専念させれば？」

「それなら」

「もう無理。許して、暴れないから許してえー！」

シチュエーションが完全にエロゲね。可哀想。フフツ。

二十二話　ローマ帝国 V S 円卓の騎士

イワンをTSさせて遊んだ後、私はノイ達バンパイア傭兵団のボスとしてラウンドナイトの依頼を受けた。

村は災害レベル虎の吸血鬼が4人もいるし大丈夫でしょう。暴走しそうなイワンも大人しくなったし、同じく村に来た時、有無を言わず殺した村人を思い出して眷属にしてケアさせてる。TS仲間として、仲良くなれると良いわね。フフフツ。

頭が良くなった原因である青年の魂を切り離しても知能が低下した感じはしないし、才能なんかの基本スペックは魂の蒐集時に向上して下がらないみたい。

未熟だけど将来を期待されているホープあたりを乱獲するのも良いわね。今回の依頼は人間同士の戦争で諜報員として活動する事だし、怪人バンパイアとして動くのは狙いを誤魔化す事にも繋がる。

そう今回、私達はラウンドナイトの依頼で円卓の騎士とローマ帝国軍との戦争に加担しようとしてるのだ。

死ぬまで血を吸う事で記憶を得られるってシノン経由でラウンドナイトに情報を伝えているからね。いずれはこういう依頼が来るんじゃないかとは予想してた。それが狙いでわざわざ能力の一部を見せびらかしたんだし。そうでないと困る。

警戒はすれどラウンドナイトにとって私は簡単に始末できる程度の実力。利用する方に踏み切ると思ってた。

その程度の度量がなきゃ12人の円卓の騎士を身分の上下はないと自分と同じテーブルには着かせない。アーサー王を直接は知らないけれど、怪人に対する偏見もないでしょう。そうでなきゃ湖の乙女を殺した罪で円卓の騎士ベイリンを地下牢に閉じ込めたりはしないしね。

アーサー王にエクスカリバーを渡した湖の乙女を殺害、か。地球意思に力を渡されたホームレス帝の同種が湖の乙女だとすると災害レベルは竜つて事にならない？

それを円卓の騎士が見ている前で止められる前に殺害する円卓の

騎士ベイリンか。コイツも尋常な人間じゃないわね。

そう、ローマ帝国と円卓の騎士の激突風景を見て思う。

『ザッザー、繰り返す。ザー、諸君はローマ帝国の領土を不法に占拠している。ザッー、直ちに退去を——』

【怨】

ヘルウエティイ族の復讐者ブルーノが数キロは離れたローマ帝国の士官を見て一言呟いた。それだけで勧告は途絶え、士官は死んだ。

ブルーノの魔眼による遠隔透視。射程は短くなるが途中に障害物があるうと透視能力で透かし見て問答無用でターゲットを補足する恐ろしい目。そして姿を見てしまえばヘルウエティイ族の呪術で殺せるという理不尽な組み合わせ。元S級賞金首の暗殺者。

遠隔呪術では災害レベル狼末満しか殺せないらしいけれど、一族を奴隷としてこき使った挙げ句、父親を蛮族だと不当に殺したと恨まれているローマ帝国の人々は生きた心地がしないでしょうね。ブルーノの復讐相手は暗君ホノリウスだが、皇帝はセインツに守られて手出し出来ない。結果として哀れなローマ帝国の士官達がターゲットとして日々狩られ続けている。

士官を殺されたローマ帝国軍が反撃だと、一斉に数キロ先から砲撃を繰り返してきた。戦車砲だ。

そう、ローマ帝国軍は現代兵器を利用している。これがカメラロツトで聞いた錬金術の正体。純粋科学のみではなく、魔法知識も利用された砲弾はピクト人従軍者の張った魔法の障壁を貫通し、ラウンドナイトに被害を与えている。

「こんなの、こんなの人間の戦争じゃねえよ……」

「痛い。足が、足がアッ！」

死にきれなかったラウンドナイトの兵士が呻く地獄の光景を一人のアイドルが笑って闊歩する。

「大丈夫。大丈夫。痛い痛い飛んでけー」

吟遊詩人のトリスタンが謳いながら手を振ると、欠損していた手足

が瞬く間にニヨキニヨキと気持ちの悪いスピードで生えだした。

即死さえしなければトリスタンならその場で治せるのだ。また、同時展開でバリアの結界を空中に張り、幾つもの砲弾を弾き返している。

「マズい。戦闘機だ！」

ラウンドナイトの哨戒部隊が備品として渡されている双眼鏡を手に空中を指さした。そこにはこちらの陣地を爆撃しようと高速飛行をする戦闘機が群れをなしていた。

「ベディヴィエール卿、槍筒です」

「すまないね」

爽やかに笑った隻腕の青年が笑顔で槍が何個も入った筒を自分の周囲に幾つか置くと、ふうーと精神統一の為か息を吐き出した。

そしてマツハ1以上の速度、時速約1200キロ以上で高速飛行する戦闘機へと次々と槍を投げ始めていく。

ギョルつと高速回転した槍が対空砲のように戦闘機へと次々と命中して空に爆発の煙を上げさせた。投げ槍による狙撃だ。しかも、ちゃんとエンジンを狙って投げている。あまりの勢いに吹き飛びそうになっている周囲の槍筒をラウンドナイトの兵士達が必死になって押さえ付けていた。

「派手にやるね。このままじゃ俺達は引き立て役だぜ？」

【我慢ならんな】

「だろ？ お前の走りを魅せつけてやろうぜ兄弟」

【良かろう！】

巨大な獅子、災害レベル竜の怪人が咆哮して背に円卓の騎士ユーウェインを乗せてローマ帝国の戦車隊へと突撃していく。

当然、幾つもの砲撃が巨大な獅子に命中していくのだが、まるで意に介さず笑い続けている。それはユーウェインも同じなのだが、破片で傷を負っている事から直撃してしまえばマズいのではないだろうか。何故、ああも楽しそうに死線を潜っているのか。

「お前らまた隊長が暴走してるぞ！」

「今日こそ死ぬんじゃない？」

「ハハッ。じゃあ、俺は生きる方に10銀貨な」

「ちよ賭けるなら俺も生きる方だっつーの」

「じゃ俺、今日こそ死ぬ方に20銅貨な」

「お前が死ぬ」

笑ってユーウェインの配下のラウンドナイト達が騎獣にした災害レベル鬼の四足動物を戦車隊へと突撃させていく。ユーウェインの配下部隊である獣騎士達だ。

ラウンドナイトで最も死傷率の高い部隊であるにも関わらず、入隊希望者が絶えないというラウンドナイトの花形部隊。場合によっては獣騎士達だけでローマ帝国の戦車隊を片付けられたんじゃないかと思う程の高い戦闘力を持っている。

「これ、傭兵を雇う必要あった？」

ズタボロにされていくローマ帝国軍を見て、私は頭を抱えた。

二十三話 原作と史実と伝説の闇鍋世界

ローマ帝国が現代文明並の科学技術を保有している事に最初は驚いたけれど、ここがワンパンマン世界だと思えば、これはそう不自然な事態ではない。

1500年後の原作の時期には戦闘ロボットにサイボーグが一般社会に溶け込み普及しているのは、身体改造者達が戦うサイボーグファイトが行われている事が証明している。ジェノスを改造したクセーノ博士やS級ヒーローのメタルナイトを作り上げたボフォイ博士のような一握りの天才でなくても、ロボットやサイボーグは民間の科学者でも作れるのだ。

おそらく、性能面では比べ物にならないだろうが。

文明を破壊する者と恐れられたアッティラの襲撃によって科学文明が衰退しても尚、現代の時間軸にはそこまで発展してるなら、理想郷のようにヨーロッパで持ち上げられるローマ帝国が現代社会の文明レベルなのは納得できなくもない。

近隣にこれ程の文明があってもキャメロット付近が中世の文明レベルなのはアレだ。怪人や人間が強すぎて現代科学程度じゃ力不足で侵略できないんでしょうね。平和裏に飛行機を飛ばして貿易しようとするしないのは、怪人や山賊が魔法で空を飛行して襲い掛かってくるからかな。防衛都市を作って引き籠もろうって選択するのも分かる。A級賞金首、空賊スカイ団は近隣じゃ実力以上に有名だし。

原作でも災害レベル鬼の強さに過ぎなかつた覚醒前のガロウが、A級ヒーローデスガトリングのガトリング砲を防ぎきってるしね。

おまけにデスシャワーという全ての砲弾を撃ち尽くすあの必殺技は気を込めていたんじゃないかと思う。ネオヒーローズに在籍していた資産家の社長であるゼイダッツは、C級ヒーローがA級ヒーロー並の実力を発揮するバトルスーツを更に大金を掛けて強化した特注装備を纏って戦ったにも関わらず、災害レベル鬼の怪人に瞬殺されている。使う人間によって兵器だろうと性能が大きく変わるのだ。

一番、分かりやすいのはサイボーグのジェノスね。最初は災害レベ

ル鬼のモスキート娘や深海王に負けていたジェノスが単独で災害レベル竜を倒せるようになるまで成長している。新しいパーツを手に入れたっただけじゃ強化され過ぎているわ。我流で気を兵器に込めて威力も耐久力も底上げしてらんでしよう。

早い話、この世界じゃ銃弾の早さや威力すら使い手によって違うのだ。兵士の促成栽培が近代兵器の取り柄なのに真っ向から否定されている。

災害レベル竜とすら戦える円卓の騎士に気の補助がない普通の戦車や戦闘機では不利。うーん、もしかしてこれが未来でサイボーグやロボットタイプが兵器の主流になった原因なのかしら。AIだから気は扱えないと決まった訳じゃないし。『組織』のロボット怪人あたりはもう生命体にしか見えないもの。

「君がバンパイア傭兵団のカーミラ？」

「ええ、そうよ」

ラウンドナイトとローマ帝国軍の戦闘を考察しているとS級ナイトのブルーノに声を掛けられた。カメラロットに訪れる前に感じた視線の持ち主候補の一人である遠隔透視の魔眼保持者。他の候補は超遠距離の戦闘機を精密狙撃できるベデイヴェール。こっちは本当にただ目が良いだけ。接近戦が苦手な円卓最弱を自称してる馬鹿だ。

私なら何としてもベデイヴェールを真っ先に殺しに掛かるけれどね。他の円卓の騎士じゃ無双は出来ても戦闘機から配下を庇えないでしょ。戦争には勝っても配下がいなきゃ土地の占拠は出来ない。「幕僚格の捕虜を何人が拿捕した。身代金と引き換えにローマ帝国に引き渡すつもりだけど、君に一人渡すから帝国の内情を出来る限り教えて欲しい」

「構わないわ。でも同じ人間を食料として提供しても心は痛まない？」

「……怪人は似たような事をよく聞くね。ローマ帝国が言うには、ヘルウエティイ族は人間じゃないらしいよ？」

蛮族だと怪人と共に長年苦しめられてきた一族は赤い目でニイッと嗤った。

うーん。まだ中学生くらいの子なのよね。こりや修羅道に堕ちちゃってるわ。血の匂いがプンプンする。

「それに、裏の世界じゃ食人鬼なんて珍しくないし。人間がやった事に比べればボクにはキミ達の方がマシに見える」

「どういう意味？」

「捕虜の記憶を見れば分かるさ。ローマ帝国は一刻も早く滅ぼさなきゃならない」

ブルーノの意味深なセリフに眉をしかめて私は彼女に付いていた。

「ひっ、ヒイイ。血が、俺の血がっ。金なら幾らでも払うから、助けて……」

「ごめんなさいね。こっちも仕事なの」
「ひよんな」

口元にベツタリと付着した血を舐めて私はブルーノの意見が正しい事を知った。

駄目だわローマ帝国。本当に早く滅ぼさないと。

あの国、災害レベル鬼以上が出現したら核兵器で片っ端から滅ぼしてる。

そりやミサイルを弾くシエルターをぶち抜くような怪物が災害レベル鬼だけどさあ……。ミサイルの飽和攻撃じゃ死なないんだろっけどさあ……。

曲がりなりにも人間だと認めているラウンドナイトには凄い紳士的に振る舞っていたのね。ガリアが不毛の大地になってしまったら戦争をする意味そのものがなくなっちゃうだろうし。でも、結構な範囲が既に核兵器で駄目になってる。

しかも現代社会の核兵器より威力が高い。災害レベル竜にも効果があるよう命中率や運用性よりも威力を高める事を優先して研究し続けて来たのね。それを何千発も生産して躊躇なくバンバン撃ってる。地球の広さとか自然環境の回復とかの知識体系や倫理感が発達

してないんだわ。まだ、世界地図すらローマ帝国には存在しないもの。住めなくなったら遷都すれば良いって思ってる。怪人が強すぎで交易網が発達しなかった弊害か。

アレだわ。原作でイケメン仮面アマイマスクが言ってた第一次変革期と第二次変革期。

地球上の複数の国家が土地や資源の奪い合いで大きな世界戦争を何度も繰り返す。やがて人口が減少し種の保存が優先となった人類は言語を統一し包括政府が生まれる。これが第一次変革期。この土地や資源を奪い合った相手は人間だけじゃなく怪人一族も含んでの事だったのね。

世界戦争の影響で地球が蝕まれ自然環境の毒化や急激な気候変動と海面上昇に害悪生物の大量発生により他の土地を捨て超大陸を重点整備して一斉移住する。これが第二次変革期。

そして地球意思が人間を滅ぼそうと動き出したのかもしれない自然発生型や突然変異型の怪人大量発生が原作。第三次変革期。

今、私は第一次変革期の大きな世界戦争の只中にいるのか。

アッティラによるローマ帝国への侵攻やゲルマン人の民族大移動、アーサー王のガリア遠征。中国も前王朝を滅ぼして新たな王朝が生まれるのは日常茶飯事だ。もしその争いに核兵器が使用されていたとしたら……。

そりゃ地球意思もアーサー王に肩入れするわ。早く世界征服して無駄な争いをなくしてくれって思うでしょ。

湖の乙女を通じてエクスカリバーをアーサー王に渡したって事なら、まだ地球意思は人類を見捨ててない。少なくとも第二次変革期の超大陸の重点整備。これがなきや自然環境と一緒に人類は滅びるか。災害レベル神が動かなきゃならないような事態には発展しない。

「ノイ」

「はっ」

敬礼するノイに私は宣言する。

「本格的にアーサー王に肩入れするわよ。とりあえずはローマ帝国を滅ぼすわ」

打倒すべき敵を見付けて薄らと私は笑みを浮かべた。

二十四話　ローマと書いて世界と読む

本格的にアーサー王に肩入れすると決めてから、私はずっとヘルウエティイ族と行動を共にしている。

ヘルウエティイ族はラウンドナイトの諜報・暗殺を手掛ける暗部であり情報機関だからね。私の特性を活かすなら彼らの仲間になるのが手っ取り早い。

正直、災害レベル鬼の私でようやく戦力として数えられる練度だからノイ達バンパイア傭兵団は足手纏いにしかなってないけれど。彼女達、半分怪人化してるわね。仲間の怨念の積み重ねによる歴史がヘルウエティイ族を強化してる。血化粧という仲間の遺体や強敵から採取した血を利用した身体強化呪術の効率がエグい。特にローマ帝国との戦争では誰もがA級以上の戦闘力を持つと思っただけくらいね。

バンパイア傭兵団が結成されて一年。9人のメンバーはノイと副長のサード以外は2巡くらいメンバーが死んで入れ替わっている。死線を潜った事でノイとサードの戦力は災害レベル虎でも上位にまで成長してると思うけれど、集団戦闘の専門家が直ぐ傍にいるのだ。バンパイア傭兵団をヘルウエティイ族に指導して貰えるよう頼んである。

地獄を生き抜いてきただけあって、バンパイア傭兵団は誰もがヘルウエティイ族の許で指導を受けることに抵抗がなかった。ノイすらも。よっぽど、無力感を覚えていたんでしょね。

引き換えにローマ帝国関連依頼を優先的に受けるよう約束したけれど、最初からそのつもりだったし問題ない。

問題なのは、ローマ帝国が予想以上に手強かった事。

「ちっ、もう感知された。赤のバイク隊が迫ってきている。カーミラ、今のうちに錬金術師の魂を吸い取っておけ」

「OK。無理を言って悪いわね」

「これで貸し借りはなしだ。呪いで死ぬのを免れた事には感謝しているが、俺は貴様の眷属になつたつもりはない。今もまだヘルウエティ

イ族だ」

「分かっているわ。カイン」

好都合な事にヘルウエティイ族は血化粧で驚異的な力を授かる引き換えに呪いに汚染されて身体が段々と壊死していく。

中にはブルーノのように完全に克服するようなS級の人材もいるが、多くのヘルウエティイ族は無理をして苦しみの中で死んでいくか、戦線離脱して腐った身体を抱えて病床で呻きながら生きるかだ。セインツに頼めば浄化して貰えるだろうけれど、彼らはローマ帝国側だ。ヘルウエティイ族は意地でも頼らない。

だが、解呪は専門外であるピクト人やドルイドの応急処置では余命を伸ばす事しか出来ない。聖杯は円卓の騎士か、相当な手柄を上げないと使用許可が下りず、一般兵は近付く事すら許されない。

何度かトリスタンに頭を下げて治療して貰う事もあったらしいが、治しても治しても自ら呪われに行くヘルウエティイ族に流石のトリスタンも怒ったようね。今では高額な料金を請求するようになった。それで、一部のヘルウエティイ族が病床で倒れたままなのを知って、バンパイア一族の眷属に誘った訳。

相性が良かったのか、バンパイアとなれば呪いに汚染される事もないと、既に10人近くが私の眷属と化している。このまま行けば、バンパイア一族がヘルウエティイ族をそっくり乗っ取れるかもしれないわね。呪術の知識や暗殺技術もタップリ学べたし大満足。

まあ、眷属だろうと自由意志があるから私の指示なんて聞きやしなだけれど、今回みたいにローマ帝国へ潜入して科学者もとい錬金術師の魂が欲しいと言ったら手伝ってくれるくらいの関係にはなれた。ローマ帝国の錬金術師は元から暗殺ターゲットだしね。

「貴様ら、ろ、ローマ帝国に逆らって、平気だと思っているのか!? 悪い事は言わん。私を解放しろ! 神の火で焼かれたくなければ!」

「核兵器を神の火呼ばわりは止めた方が良いんじゃないの? またセインツに苦情を言われるわよ?」

クスクスと錬金術師を無理矢理に宙吊りにして私は牙を見せ付けた。

ホームレス帝のように強力な神通力を授かっている訳じゃないけれど、セインツもまた神、地球意思の力の一端を振るう者達だ。自然を荒らす核兵器に良い感情は抱いていない。ローマ帝国軍にセインツの従軍神官が混じっていないのは内部でも相当な争いがあるから。ローマ帝国も一枚岩ではないのだ。

「ミュータントの化物め！ お前らには何時か神の天罰が下るだろう！」

「アハ」

あまりにも面白い事を言った錬金術師を笑って私は彼を吸い殺した。

知ってる？ 私こそが神の天罰だって事をね。フフツ。

「来たぞ」

神の天罰は下らないが、ローマ帝国の怒りには触れたらしい。ギャガッとバイクに乗ったまま豪邸の二階にまで飛び上がったローマ帝国の特殊部隊、赤のバイク隊が空中で銃を構えたのが見えた。

窓越しにあつた視線が苛烈な意志を伝えてくる。人の守護者。正義の執行者だ。

ローマ帝国のヒーロー協会。それが赤・青・緑・黄・黒、五色のレンジャー部隊。

赤はバイク。青は戦闘機。緑は戦車。黄は重装歩兵。黒は悪魔憑き。

帝国軍でも選ばれた一部のエースだけが所属するローマの守護者達。

その中でも感知と即応性に優れたヘルウエティイ族の天敵が赤のバイク隊である。

「人間の生体反応はない。フルバースト使用許可」

「了解」

キューインと光る銃口が屋敷に向けられて、携帯可能な銃とは思えない威力で屋敷毎、私達を吹き飛ばした。

「ペツペ。あー、酷い目にあつた」

「下水道をコウモリ形態で通った程度で泣き言を言うな。赤のリーダーはS級ナイト並の実力を秘めている。俺達の実力では敵わん。無事に済んだだけ御の字だ」

二人という少人数でローマの帝都に侵入したのはこうやって最初からマトモにやり合う気がなかったから。

拡張に次ぐ拡張で迷路のようになっていているローマの地下下水道は潜入に慣れているヘルウエティイ族くらいしか案内できない。

私もヘルウエティイ族の魂は眷属として放流したから、完全には覚えきれてないのよね。何か異界化しつつあるとかで、偶に道筋が変化するらしいし。

「でも囮として身体半分だけを自立行動させるとか器用な事をするわね。頭が痛くならない?」

「面倒だが、右手で絵を描いて左手で手紙を書いて足でサッカーをする程度の難易度だ。問題ない」

「そうね。私も今度、挑戦してみようかしら」

おかしな事だが、本当にその程度なら普通に出来るようになっていくのよね。

たぶん、ヘルウエティイ族に由来する器用さの向上が起きたんでしよう。暗部としての特殊な鍛錬が異常なほどの精密動作を可能とする。

今の私なら米粒に絵を描く事も普通に出来る。

それでもベディヴィエールの所業は頭がおかしいとしか表現できないけれど。

「あ、そういうえば宝石とか貴金属を流通させるルートヘルウエティイ族は持つてる?」

「大丈夫だが、あの緊急事態で火事場泥棒をしていたのか?」

「まさか」

顔をしかめたカインに笑って私は答えた。

「無機物生成よ。錬金術師の知識があれば血液から宝石だろうと生み出せそうなの」

「それは……」

あまりの反則ぶりにカインは溜息を吐いた。

「鉛を黄金に変えるのが錬金術士の最終到達地点の一つじゃなかったか？」

バンパイアのチートさが、また一つ判明したわね。

二十五話 ベデイヴェイエル

「ベデイヴェイエル卿、流石です。ローマ帝国の誇る空中戦力を、戦闘機を全て一方的に撃墜してっ！」

「勝てる。勝てるぞ、この戦争」

「ああ。円卓の騎士がいる限りラウンドナイトは負けない！」

希望に満ちた顔で戦場を眺める部下にベデイヴェイエルは苦い顔で首を振った。

「いえ、防衛ならともかく侵攻は無理ですね。円卓の騎士が最低3名はガリアを守る必要がある。ゲルマン人との戦争に唸る獣の対策。現状維持が我々には限界です。戦線を抱えすぎている」

違う。ローマ帝国を滅ぼさないよう戦力を手薄にされた疑いすらもある。

そうベデイヴェイエルは内心で呟いた。元々アーサー王は権力志向の薄い人物ではあるが戦争での人死にを憂う心優しい人物でもある。王の差配ではない。

おそらくは宮廷魔術師のマーリンが裏で糸を引いている。何かを待っているのだ。

だが、何を？ 未来予知の出来ぬ己では深淵の魔術師の狙いが分からない。

そうベデイヴェイエルは溜息を吐いた。

「何、辛気くさい顔をしてんだ？ 今回の大金星だろ」

ズンと地響きがして、ぬうつと巨大な獅子が顔を向けてきた。円卓の騎士が一人ユーウェインと相方である災害レベル竜の怪人であるアイオンだ。

体高3メートルの獅子という災害レベル竜にしては小柄な体格の獅子が、ガフツと噛み千切ったのであろう戦車の砲塔を吐き出した。

ブワツと吹き掛けられた息に思わずベデイヴェイエルがうわつと悲鳴を上げると、ガハハとアイオンが笑った。からかわれたのだ。彼の知性は人間と変わりはない。本物の動物のように獲物を見せびらかすような趣味は……ちよつとしかない。

「おいおい。戦闘機を撃墜するような騎士がビビるなよ。可愛いもんじゃんか」

「円卓最弱の私には恐ろしいですよ。ちよつと踏み付けられただけで死んじやいますって」

「いやいやいや。戦闘機をどうにか出来る奴なんて……そりや何人かいるけど、部下を守り切るのは難しいぞ。誇って良いと思うんだが」首を傾げるユーウエインをベデイヴェイエルは苦笑して見た。

円卓最弱。この自称は決して間違っている訳ではないのだ。

S級ナイトなら、いやA級ナイトの上位ならば単独で災害レベル鬼を討伐できて当然だとラウンドナイトでは言われている。それくらいこの騎士達がアーサー王の配下として辣腕を振るっているのだ。ちよつと昔の選定の剣をマーリンに唆されて抜いた頃のアーサー王では考えられない事だ。

喜ばしい事ではあるが、まかり間違つて円卓の騎士に選ばれてしまったベデイヴェイエルには大きなプレッシャーとなつてその事実がのし掛かつていた。

彼は円卓の騎士にも関わらず、災害レベル鬼に勝てないのだ。

その過去が無くした腕を見る度に戒めとして心に刻み込まれる。今回の戦果で勘違いしてはいけない。自分は単に槍を投げるのが少し上手いだけの、何処にでもいる普通の騎士に過ぎない。そうベデイヴェイエルは思う。

遠槍流という投げ槍を専門とした流派がキヤメロットにはある。飛距離で投げ槍の威力が変わらない特殊な技巧を教える流派で、極めると数十キロ先でも狙撃可能だと謳っている。身体能力に自信のなかったベデイヴェイエルは目が良かった事もあり、この流派を極めるまで修練し続けて、一端の騎士になつたつもりだった時期がある。

遠槍流の他の門下生は数キロ先に槍を投げる事は出来ても動物的に当てる事は出来なかつた。目標が遠すぎて槍が届くまでに避けられてしまうのだ。

ベデイヴェイエルはその問題を槍に特殊な回転を加える事で補つた。的が避けようが槍に追尾させれば良い。それだけの事を何故、出

来ないのか。ベデイヴィエールは首を傾げたものだ。

新たな遠槍流の奥義ともいえる追尾回転を発明したベデイヴィエールは天才だともてはやされた。

技巧として追尾回転を習得したものは他にもいたが、これは単に野球でストリートしかなかった世界にカーブという変化球が加わっただけの話だ。ベデイヴィエールがどうやって百発百中の命中率を叩き出しているのか、遠槍流の師範代にさえも理解できなかった。

天才だと持ち上げられて、その気になったベデイヴィエールは意気揚々と災害レベル鬼の怪人を討伐に出向いて、片腕を失った。

威力が足りないのだ。虎までならともかく、鬼を倒すには圧倒的に威力不足なのだ。

他の門下生は当たりはしないが、直撃すれば災害レベル鬼だろうと重傷を負うような威力を出せていた。

だが、ベデイヴィエールは必ず当たる代わりに、多少のダメージを負わせるのが精一杯だった。

そして遠距離狙撃に拘らなければ的に着弾するまでの距離が短くなるほど当てやすくなる。

『ああ……腕が、僕の腕がつ。助けてくれ。頼む、頼むっ!』

泣きながら怪人に命乞いをするベデイヴィエールを駆け付けた同じ遠槍流の門下生達が次々と槍を投げる事で救った。感動的な逸話だろう。

だが、安心して顔を上げたベデイヴィエールが見たものは白けたような顔でこちらを見る同門の門下生達だった。

大変だったなと口では慰めるが、こんなものかと目が語っていた。こんなものを自分達は持ち上げていたのかと。

それを今でもベデイヴィエールは憶えている。

「ローマ帝国には実は感謝しているんです」

あん？ と疑問の声を上げるユーウエインにベデイヴィエールは感情の籠もらない声で続けた。

「私が活躍できるような敵を用意してくれて」

戦闘機はマッハーで高速飛行して驚異的な機動力を誇る、ただの鉄

塊だ。その程度の防護ならベデイヴィエールにも突き破れる。

こちらを爆撃しようとする強力な武装を積み込む程、ベデイヴィエールには撃墜しやすい鴨となる。

アーサー王の初期の仲間であるという以外に円卓に選ばれた理由が欠片も分からなかったベデイヴィエールが戦闘機を見た時、彼の顔には自然と笑みが浮かんでいた。今のような。

その凄絶な笑顔を見たアイオンは一步、後退った。

災害レベル竜の怪人である彼がベデイヴィエールに一瞬、気圧されたのだ。

「へえ」

ニヤツと笑ったユーウエインはそれでこそ円卓の騎士だとアイオンから飛び降りざまにベデイヴィエールの背中をバシツと叩いた。

が、彼は災害レベル竜の怪人同士の争いに介入できるような騎士であり、身体能力が一般兵とは比べ物にならない。

「くふっ！ つ！ ……っ…っ！」

「あ、わり」

身悶えして震えるベデイヴィエールに、確かに接近戦は厳しいかもなどユーウエインは肩を竦めた。

二十六話 理想の王を強いられているのだ！

ローマ帝国で錬金術師の魂を獲得してから、私はジャブジャブ貴金属や宝石を血液から錬成してヘルウエティイ族経由で換金し続けていた。

で、その金で生け捕りにされた賞金首や敵国の捕虜や奴隷を購入して魂と更なる貴金属の材料をゲットするという、好循環が発生している。高ランクの賞金首は捕獲の難しさから金額が高騰していて、それでも購入できてないけれどね。無理矢理に命令を聞かせるフィクションによく登場する奴隷の首輪でもあるのかしら。

なら低レベルで良いからと、ピクト人の魔法やセインツの奇跡にドルイドの精霊術といった摩訶不思議な力を持った人間の奴隷を優先して回してもらえないかとヘルウエティイ族に頼んだら、それぞれB級並の知識と異能を持った魂を手に入れられた。奇跡は何故かセインツの経路で力を引き出そうとするとかかなりの抵抗があるけれど。

地球意思に拒絶されてる感じじゃなくて、仕様外の存在が無理矢理に力を引き出そうとするせいでエラーが出ちゃってる感じなのよね……。これに関してはもつと、比較対象が欲しい。

ヘルウエティイ族側も有象無象の能力持ちが高目で売れてホクホクだったしウインウインね。私が裏切った場合、裏目に出るけれど。まあ、ヘルウエティイ族の執念深さは心の底から理解してるから敵に回そうとは思わない。5, 6世紀近くも延々と復讐の機会を狙い続けてきた一族に恨まれるのは勘弁だ。

でも、竜術は竜盟会の血族内の結束が固くて犯罪者だろうと金じや手に入らなかつたし、黒魔術はローマ帝国の秘奥らしく嚴重な警護が敷かれてて攫えなかつたりと金で全ての体系だった異能が手に入る訳じゃないのよね。ああ、錬金術もまたローマ帝国の秘奥だったわね。有り難く有効活用させて貰ってるわ。

ま、ジエノスを改造したクセーノ博士のような天才、被造物がS級の實力を持つようなS級科学者じゃなかつたけれど。潜入して襲った錬金術師の爺さんもA級並の實力は備えていた。ガトリング銃や

軽戦車くらいなら一から設計できる。

呪術はヘルウエティイ族から幅広く学んでるし、こつちもA級、いやA級上位並の実力には達しているんじゃないかな。私の実力も災害レベル鬼の上位には届いたかも。

分かりやすくステータスに表すとこんな感じ？

・カーミラ　・災害レベル鬼＋　・怪人バンパイア女王　・発生から2年3ヶ月

(筋力／頑丈／敏捷／器用／耐久／回復／異能／知力／意思／武装／知名度／勢力)　(鬼－鬼－鬼＋　鬼＋　竜－竜－鬼＋ A＋ B－ A－ A　 A－(S))

・習得技能

バンパイア異能S＋＋(コウモリ化・無機物生成・ソナー・眷属生成・吸魂)　爆裂流A、幻影飛翔剣A、暗殺殺法(血化粧)A＋

気力放出B＋、物欲センサーC、強者擬態C、嫉妬エネルギーC

呪術A＋、魔法B－、精霊術B－、奇跡C－、錬金術A＋　装飾

品作成A＋、兵器作成A＋、語学S、薬学A

ゲーム脳だけど、こういうステータス表記にすると滅茶苦茶わかりやすい。怪人換算が鬼や竜で、ヒーロー換算がAやS表記。

勢力の(S)はヘルウエティイ族を私の配下換算した場合ね。S級ナイトのブルーノの陣営にバンパイア一族が吸収されてるのが実情だけれども。

筋力と頑丈はこれでもゴツサムの魂を得てかなり強化されてるのよね。逆に耐久と回復は最初から竜並にあったと思う。バンパイアは血液さえあれば不老不死に近い。異能は成長性を考えなきゃこんなもので、敏捷と器用はヘルウエティイ族の素質で向上している。

敏捷と器用の能力アップといい呪術に暗殺殺法といいヘルウエティイ族は本当に私の強化に貢献してくれてるわね。知り合えて良かった。

お礼に錬金術を利用して現代兵器の代名詞たる銃や、ローマで最先

端の医薬品を彼らに卸したりもしている。幾つかの素材は購入して
るけれど、その気になれば部品も薬品も無機物生成で血液から作れる
んだからバンパイアはズルいわ。ヘルウエティイ族も貴金属と寶石
の流通に価値の低い欠損奴隷の処分先に情報収集と既に私を切り捨
てる事は出来ないでしょうね。

ノイ達バンパイア傭兵団も私謹製の現代兵器スタイルでヘルウエ
ティイ族に教えを請うた暗殺部隊としての動きをするようになった
からA級傭兵でも上位のグループとして最近では頭角を現わしてき
ている。下手に有名になりすぎるのも考えものだけれど、少し羨まし
い。

賞金首には脅威度として階級が付くけれど、賞金狩りは基本的には
依頼を受注せず、指名手配書を見て動き成果と引き換えに金を受け取
るスタイルだからこういう階級制度がないのよね。普段、狩っている
賞金首から便宜的にA級相当S級相当と勝手に噂が出回るけど、賞金
狩りは秘密主義が多いし実力も能力も分からない奴らばかり。

原作で世に出なかつた実力者は多かつたし、実は賞金狩りの中にS
級ナイト並の猛者もいるのかもね。傭兵はゲルマン戦線かローマ戦
線に実力者が出向いているのかキヤメロットじゃS級ナイトと並ぶ
と思う傭兵団には出会わなかつた。

少なくとも私が見た有名なS級傭兵は軍団規模に人数と装備を整
えた軍勢ばつかでS級ナイトに比較する個人は見たことがない。

原作時期と違い、今は魔法文明が隆盛してるせいで摩訶不思議な一
品物の魔道具を持つてる奴も多いから格下だと油断したらマズいけ
どね。

私もクソ高い金額をオークションで払って一つ魔道具を手に入れ
ている。

ローマ帝国の闇市から流れてきた黄の重装歩兵が愛用してる籠手
だ。気とも魔力とも違う未知のエネルギーを噴射して打撃の威力を
高めるとか何とか。

それを見て、パワードアーマーの腕部分だと分かった時、色持ちの
重装歩兵の正体を悟って頭が痛くなつたけどね。

もう既に原作に登場したバトルスーツの雛形が完成しているのだ。魔法技術も盛り込まれた量産品には不向きな一品物っぽいけど、職人が手作業で一部隊分は揃えてしまっているようね。

最近は錬金術師の知識を利用してパウードアーマーをこちらも作成できないか基礎研究を始めていたりしている。私が魂を吸い取った錬金術師は兵器研究の専門家だったし出来なくはない。資格習得のノリで日本の薬剤師並の知識と鉱石知識を蓄えてた生き字引だし、生前の私とは頭の出来が違うのだ。

魔法や精霊術と興味深い知識体系も習得したし、最近は机で作業してる時間の方が多いな。おまけにキヤメロットは武官ばかりでこういう事に向いた人材は少なく、色々と手広くやっているとあれもこれもと依頼が殺到する。キヤメロットには農薬すらないと知った時の私の驚きが分かるだろうか。

これは偶には前線で暴れないと取り返しが付かないかもね。戦場に出るなんてとんでもないと非戦闘員化する未来が見える。

「非戦闘員化と言えば……」

この間、ハーレムメンバーはどうしているかと様子を見に行った時、農地を耕してたボンゴに呼び止められたんだけど。

何と嫁が出来たからバンパイアの眷属にしてくれってお願いされた。

へーって何というか、どういう反応をすれば良いのか分からなくなった。ボンゴは髭の生えたダンディ系のオッサンだが、生後2年の生まれたばかりの子供でもあるのよね。まあ、生まれた直後から眷属に手を出してる私が言うことじゃないけども。

嫁さんは普通の容姿で食指がそそれなかったし、普通に眷属にしてあげた。マジで感謝して欲しい。

気になって少年タイプの眷属ファーンの様子を見に行ったら、こっちはハーレムめいたラブコメやってた。しかも私が性癖を歪めたりシアの女友達。

こう、微妙にファーンが中心じゃなくて女同士で嫉妬し合ってたあたりちやんと爪痕は残せたらしい。とりあえず干渉せずに見守る事

にした。リリシアが日記に詳しい事情を書き綴ってたので、無断で見たら意外と面白かったし。恥ずかしがるリリシアと合わせて二重に美味しかった。

ドロドロとした昼ドラはキャサリンとイワンで堪能できているので、あつちには甘酸っぱい青春を期待しよう。蹂躪するばかりがエロじゃない。

「円卓の騎士も昼ドラ的なドロドロとした関係を伝説じゃ築いていたけどね。実際に調査してみればイズルデを取り合うはずのトリスタンとパロミデスは単なる女友達だし、アーサー王とランスロットの決裂の原因の王妃の不倫もない。せいぜい、未亡人モルゴースの年若い愛人であるラモラック卿が火種になりそうなくらいかしら。亡き父親の仇の息子と関係を持った母親に円卓の騎士ガウエイン卿の弟のガハリス卿がキレて母親をぶつ殺すのが伝承の流れなのよね」

A級ナイトではあるがS級の円卓の騎士と同等の武力を持つラモラック卿と、S級のガウエイン卿に同じくS相当かもしれないA級ナイトのアグラヴェイン卿、ガハリス卿、ガレス卿が対立する構図になっている。ラモラックの兄弟には同じ円卓の騎士であるパーシヴァル卿もいて、A級ナイトにトー卿、アグロヴァル卿もいる面倒くさい状況。

「いや、それ以前に」

ガウエインの父親であるロット王を殺したペリノア王が生きて円卓の騎士として活躍しているのだ。

S級ナイトの中でも更に上位の災害レベル竜を殺せる人類のハイエンド。ペリノア王。

ロット王がアーサー王に反逆した故にペリノア王に討伐されたって頭では分かっているだろうけれど、バリバリに子供達はペリノア王に隔意があるのよね。騎士にとって肉親の復讐は美德とされる文化があるし……。

そりゃアーサー王も伝承でランスロットを処罰したからないわ。こんな面倒くさい対立構造がある中で、アーサー王が王として即位する為のブリテン統一戦争に力添えをして結果として自分の国を滅ぼ

されたバン王の息子がランスロットなんだし。バン王と同じ経緯を辿っている兄弟のボールス王の息子のボールス卿とライオネル卿もランスロットの派閥だろうし、ランスロットの息子のガラハッド卿は聖杯探索を成功させた騎士の一人だしランスロットの異母弟にS級ナイトのパーシヴァル卿と同等の勝負をしたエクター・ド・マリヌ卿もいる。

円卓の騎士は複雑怪奇な人間関係と派閥問題があるのだ。

おそらくアーサー王のガリア遠征は祖国を滅ぼされたランスロット派閥の為だった一面もある。バン王とボールス王の国があつた場所こそガリアだし。

伝承上でもランスロットはアーサー王を討ち取れる状況であつたにも関わらず、止めると部下のボールス卿を止めてアーサー王の命を救つてるのよね。アーサー王側も最初は不義の罪で火刑にしようとしていたはずの王妃を一度ランスロットが救つた後、アーサー王の許に戻ってきてるのに有耶無耶にして処罰してないし。体面上、仕方なく罰則を与えたに過ぎなかつたのが分かる。お互いに馴れ合つて本格的な戦争に発展していかないのだ。

アグラヴェイン、ガヘリス、ガレスと三人も弟をランスロットに殺されているガウエインは怒り心頭だつたでしょうね。よくまあ、最後までアーサー王に従つて反逆しなかつたものね。ガウエインはラモラックを弟達とモードレッドを加えた四人掛かりで殺したりと結構ネチネチと何時までも恨みを忘れないウジウジした側面もあるが、その忠義は本物だつていう。自分がランスロットを許さなかつたせいでアーサー王の国が滅亡すると死に際に後悔してるし。

「バン王とボールス王の末路は伝説と同じなのよね。舞い戻つたガリアで国を守つて戦死してる。ロット王も普通に反逆してるし、全ての歴史がアーサー王の望み通りには進んでいない。いや、アーサー王の覇道を考えれば好都合なのかな?」

ペリノア王が円卓の騎士の中で一人だけ王の呼称で呼ばれているように、ラウンドナイト内でアーサー王は必ずしも絶対的な権力を持っていない。

アーサー王を玉座へと導いたマーリンの影響力も大きいし、国家の政権としてみると実はグダグダなのだ。

円卓の騎士をアーサー王が同じテーブル席につかせ身分の上下はないと宣言したのは、実はそうでもしないと国として纏められなかったという側面もある。

実権を手にはできない情勢下であったからこそ、アーサー王は理想の王として敬われる必要性があったのだ。

「だからこそ王妃の不倫は致命的だった。アーサー王を偶像から人へ戻してしまつた」

さて、この世界でアーサー王は地球意思の期待通りの理想の王たり得るのか。ちよつと楽しみね。

ロット王の系譜

・ガウエイン ・アグラヴェイン ・ガヘリス ・ガレス
ペリノア王の系譜

・アグロヴァル ・トー ・ラモラック ・パーシヴァル
バン王とボールス王の系譜

・ランスロット ・ボールス ・ライオネル ・エクター・ド・マリス ・ガラハッド

※どいつも英雄な上に湖の乙女のような人外に祝福されたり神器を持っていたりアーサー王より強い奴がいたりするぞ。

ランスロットと敵対したらガリア支配の正当性が揺らぐし、ロット王の系譜とペリノア王の系譜の争いを止める中立が消えるぞ。

ちなみにガウエインはアーサー王の甥で、ランスロットの父親は国を亡くしてまでアーサー王の王位確立に尽力した立役者で、ペリノア王はアーサー王に勝つたにも関わらずマーリンの説得に応じて配下に加わった客将だ。ロット王を討伐したのはアーサー王に逆らつたからでペリノア王に瑕疵はないぜ。

二十七話 バンパイア傭兵団の仕事風景2

「今回の任務は敵中で孤立した味方の部隊を逃すためアングロ・サクソン七大王、嫉妬のエンヴィーが繰り広げるヘドロモンスターの足止めだ。遠距離から一方的に銃撃して爆弾で広範囲を焼き払う。移動の足であるヘリコプターは絶対に死守しろ。コウモリ形態では敵に堕ちたバンパイア一族に纏わり付かれて逃げ切れん」

「聞いたかお前ら。了承の声は！」

「了解しました」

バンパイア傭兵団の隊長ノイと副長サードの声にバンパイア達は直立不動で返事をした。

初期の舐め腐った発言をしていた部下の姿はない。そもそも初期の部下の生き残りはサードくらいしかないし、ヘルウエツティイ族に厳しく教育された結果、部隊行動で上官に刃向かう愚かさを嫌と言うほど理解させられている。上官が正しいか間違っているかは問題ではないのだ。命令が上官の意思通りに遂行されない軍隊など烏合の衆と変わらないのである。有能な命令違反をする部下よりも、命令を忠実に熟す無能な部下の方が戦場では頼りになる事もある。

それを実体験として嫌になる程、ノイは味わわされた。

今のノイならば舐め腐った発言をした部下がいたら躊躇わずに一発、銃撃して黙らせるだろう。どうせ、その程度ではバンパイアは死なないのだし。

「アツハハ。何してんですかノイ隊長。まるで本当にちゃんとしたリーダーみたいですよってえー」

「ノイちゃん。無理しなくても良いんでちゅよー」

ちようど、今のように。

「問答は必要ない。撃ち殺せ」

「はっ！」

携帯したガトリング砲を担いで移動中のヘリコプターから敵に取り込まれたバンパイアをターゲットに弾をばらまく。

銃撃の反動はバンパイアの強力な筋力で押さえ込めるが、ヘリコプ

ター自体が反動で傾いてきりもみ回転しそうになり、それを背中から巨大なコウモリの羽を生やしたノイの現部下が空中から押さえ込む。そこをかつてのノイの部下が急襲しようとして、ノイとサードの早撃ちが頭部と心臓を穿った。

泥で構成された身体が崩れ銃撃されたバンパイア達は残らず落下していく。これが本来のバンパイアなら再生して襲い続けてくるので継戦能力はノイ達の方が上であった。

「これで4度目か。仕留めても仕留めても復活してくる。カーミラ様が考案なされていた不死化の秘術を既に嫉妬のエンヴィーは実用化済みか」

「化物ばかりで嫌になりますね」

「だが、カーミラ様は僅か2年で実力がS級ナイトに迫りつつある。ヘルウエツティイ族と渡りを付け勢力的にも無視は出来ない存在へと成長した。科学者としてなら既にキャメロット随一だ。バンパイア一族は決して無力な存在ではない。我らも多少なりとも貢献しなければ。奴らのように足を引っ張る訳にはいかん」

ふん、と敵に堕ちた部下をノイは罵った。

ハッキリ言って敵になってくれてスッキリした気分である。下手に味方だと考えるからストレスが溜まるのだ。敵の罵声だと思えば気にはならない。

「隊長、巨人王を僭称するイスバザデン2世がどうやら退却の妨害をしている様子です」

キイキイとコウモリ化してばらばらになっていた身体を頭部のみ実体化させてバンパイア傭兵団の哨戒を担当していた部下が報告しに来た。

科学技術が発達していないキャメロットで上空からの哨戒が可能なバンパイア傭兵団は遠隔視の魔術師並にラウンドナイトに頼りにされ始めている。同じく飛行可能なライバル魔術師がいるので唯一無二ではないが、トランシーバーで即座に本部と情報交換が可能である事もあり、バンパイア傭兵団は戦略上必要不可欠な部隊と化しつつあるのだ。

まあ、ライバル魔術師も念話で似た事をやっているが。

「災害レベル竜に至らぬ身で巨人王など片腹痛い」

「おい、ファイフスースリー。カーミラ様も災害レベル鬼の上位だ。口には気を付けろ」

「はっ失礼しました！」

円卓の騎士を中心に物事を考えると災害レベル鬼が大した事のないように思えてくるが、一勢力の王として災害レベル鬼は十分にその資格があるのだ。

同じ巨人族の雑兵にも鬼クラスの実力者が混じっているせいで失笑されてしまうのだが巨人族の女王となったオルウェンもまた同じく災害レベル鬼である。竜と鬼の間には怪人だろうと理不尽に感じてしまうような隔たりがあった。

前王である巨人王イスバザデンが規格外であったのだ。円卓の騎士が数人係で挑むような災害レベル竜は伝承のラスボスとして謳われるような存在ばかりである。

そいつを個人で打倒してしまう上位のS級ナイトすら何人も生まれる人間種族はやはり何かがおかしい。太古から続く怪人一族が片っ端から人間に滅ぼされて姿を消していく未来が訪れるのも納得がいくだろう。

「僭王イスバザデン2世はラウンドナイトに任せておけ。我らは時間を稼ぐ事に専念する」

津波のように迫り続けるヘドロモンスター群れに焼夷弾をばらまきながらバンパイア傭兵団は空中から一方的に攻撃し続けた。

武装庫のように扱われているヘリコプターから爆弾を持ったバンパイア達が空中から敵に投下し続ける。消えない炎は確実に敵を焼き払い周囲を火の海とし有効な足止めとして機能していた。生き返ると言っても恐怖心が欠片もない訳ではないのだ。

そろそろ日も暮れる。真夜中はバンパイアの時間だ。他種族の索敵能力が低下する中、バンパイア達はソナーで正確に敵の位置を読み取る。

そうノイ達がほくそ笑んでいた時、ヘリコプターにジャンプで飛び

かかってくる影があった。

「よう。良い物、持ってんじゃねえか。俺にくれよ」

返り血で真っ赤になった身体を振り回し、体内から幾つもの剣を飛ばしてきた巨大な体躯の男をノイ達は険しい顔で睨んだ。

アングロ・サクソン七大王が一人、強欲のグリード。

無機物を取り込んで複製、強化する怪人一族ゲルマン人の武装供給者。難民に過ぎないゲルマン人が一人残らず武装して軍のように襲い掛かってくるのはコイツの功績が大きい。絶対にローマ帝国の兵器を取り込ませるなどカーミラが厳命した相手だ。

「爆破しろ」

「はっー」

自分達では抵抗しきれないと判断したノイはヘリコプターに積んだ爆薬に火を放たせた。帰りの足が消えるが、ゲルマン人に現代兵器を渡すよりは良い。

「勿体ねえな、クソ」

弾け飛んだヘリコプターを見て心底、惜しむ顔をしたグリードが全身から銃口を生やした。

マズルフラッシュの光を発してばらまかれた弾が次々とバンパイア達の全身を穴だらけにしていく。既にグリードは幾つかのローマ帝国産の兵器を取り込んでいた。

災害レベル鬼の気を込められた銃撃は防げるようなものじゃない。一方的に身体を撃ち抜かれたバンパイア達は落下して、途中でコウモリにばらけて逃げ始めていく。

不老不死の代名詞であるバンパイアの不死性を甘く見てはいけない。全身に穴を開けられた程度では彼らを殺す事は出来ない。

それを忌々しそうにグリードは見て、太陽レーザーの奇襲を身体を捻る事で何とかやり過ごした。

片腕をもがれた苦痛に歯を食いしばって耐えグリードは背中に爆弾を生み出し落下地点を変えて何とか生き残った。

2度、追撃として放たれたレーザーはグリードの身体を削るだけで致命の攻撃とはならない。

重傷ではあるがアングロ・サクソン七大王の一人、怠惰のスロウスの治療を受ければ後遺症も残らず戦線に復帰してくるだろう。

「惜しい。やっと一人、アングロ・サクソン七大王を始末できると思ったのですが」

円卓の騎士ガウエインはそう言つて溜息を吐いた。もう日が沈む。陽光エネルギーの残量も心許ない。

深追いして戦線を崩壊させる訳にもいかないと彼は僭王イスバザデン2世を葬つた太陽の残光を宿した剣、ガラティーンを振るつて血を落とした。

神秘的な見た目ではあるが、彼の愛剣は太陽光と相性の良い鉱石で作られただけの人造物であり、エクスカリバーやロンギヌスの槍といった本物の伝承上に現れる聖剣聖槍の類いではない。その事に少し思う所のあるガウエインの心を反映したように剣から太陽の光が消えた。

「ちっ」

心を反映して効力が変わる自らの異能にガウエインは舌打ちをして戦場を後にした。

清廉潔白な騎士。太陽の力を宿す光り輝く者。

そうであるかを心の底から常に審判され続けているガウエインに気の休まる時はない。

邪念を抱いているかを常に他者に分かる形で判別し、相応しくあらねば途端に弱体化する異能などガウエインは欲しくはなかった。

戦場で血に濡れるのが騎士なのだ。その戦場で崇高な志を常に抱ける程、ガウエインは聖人ではないのだ。

自分の異能と同じ仕組みで使い手を強化していた選定の剣カリブルヌスを問答無用の暴力で打ち砕かれたアーサー王が、ガウエインは少し、羨ましかった。

二十八話 爆裂流爆破

バンパイア傭兵団から危うくヘリコプターがアングロ・サクソン七大王である強欲のグリードに奪われそうになったので爆破した。と、聞いて、私は頭を抱えながらも新しい大型ヘリコプターを血液を材料に生成していた。定員20人。9人の少数精鋭であるバンパイア傭兵団には大きすぎるけれど、半分は携帯可能な武器庫を兼用しているから、これで良い。

本当なら攻撃ヘリコプターとして機関砲・ロケット弾・対戦車ミサイルを搭載したいのだけど、強欲のグリードのせいで生成できずにいる。現代兵器は常に補給が必要な為、威力の低い拳銃あたりは面倒くさがって部下に与えてないようだけれど、攻撃ヘリコプターくらい便利な物を与えてしまったらゲルマン人一族の飛行部隊が戦線に登場するようになると思う。責任追及されたくないし、自重しないとけない。

それにしても怪人の異能が便利すぎる。無限の配下に武装とかチートと言うしかない。いや、私にも当てはまるけれど、血液の補給がないと直ぐにガス欠するのでアングロ・サクソン七大王ほど戦略的な影響力を持ててないのよね。嫉妬のエンヴィーは確保した魂をワザと苦しめて恨み辛みの感情を発生させ、その感情エネルギーを用いて泥を生成しているみたいだし、強欲のグリードは無機物、そこら辺の土でも取り込めば兵器の材料に出来るというズルとしか言いようがない補給を可能にしてる。

まあ、これでも原作に出てた災害レベル竜の怪人、黒い精子ほどのインチキ具合じゃないってのがワンパンマン世界のインフレを現わしてるんだけどね。

奴は1兆以上の怪人の群体であり1兆の命のストックを削りきらないと始末できないという怪人バンパイア以上の生命力を持ってる。不死身さだけで見るなら竜以上という評価を下せるのだ。タンパク質を取れば簡単に命のストックは増えるし、単体なら普通の子犬にも勝てないらしいが、修練次第でそれも覆せるんじゃないかと

思う。強力すぎる異能に胡坐あぐらをかいて偽りの全能感に浸って努力をしない典型的なタイプ。

調子に乗りやすいのが怪人の致命的な欠点なのよね。向いてない事に挑戦したり限界を乗り越えようとはせず、地道な努力を厭う。だから基本性能では圧倒的な格下であるはずの人間種族に駆逐される。「まあ、精神的な敗北をすると戦闘力すら急激に弱体化する恐れが怪人にはあるし、必要な性質なのだろうけれどね」

それが原因で人間との共存が難しいのもまた事実なのだ。簡単に凶に乗るから、暴れて民間人に被害が行く。

核兵器での自然破壊は人間種族だけの責任とも言えないわね。どんなに弱い怪人だろうと人間と共存しようだなんて自分から言い出した怪人は見た事がないし。怪人としては最低ラインの実力だろうと民間人よりは強いから勘違いをしてしまうのよね。怪人を大人しくさせるには一回シメル必要がある。

ま、力関係を理解してても私のように潜伏して力を蓄えるようなものもいるけどね。フフツ。

そう怪人は基本的に自分本意で傍若無人。たとえ元人間だろうと怪人になったのならば怪人の本能とでも言うべきものが備わる。

誰かの風下に立つのが気に食わない。その性質が気付かれないよう人間に紛れ込もうとするような類いの思考回路を許さないのよね。たとえ元人間の突然変異型だろうと容易には人間社会に溶け込めないだろう。原作のイケメン仮面アマイマスクのように。表向きだろうと人間の序列に従う事は難しいのだ。

「それで案の定、問題を起こしたのね。怪人である以上、眷属も何時かは暴走するだろうとは思っていたけれど。よりにもよってゴツサム、人間出身の貴方が、円卓の騎士と繋がりのある爆裂流の道場で、門下生全員を師範代ごと半殺しとは」

「こんなカス共と訓練し続けるくらいなら自主練した方が何倍もマシンだ。カーミラ、貴様には感謝してやらん事もない。思った以上に怪人化による強化は効果があった」

「うう……カメラ。来てくれたか……」

「痛つてえ。ちくしょう。指導でボロボロにすんならまだしも、ゴツサムの野郎。明らかに、いたぶりやがった」

パウードアーマーの基礎研究はゴツサムの暴走によって爆裂流の道場が半壊した事で一旦、中断する事にした。

こういう馬鹿を黙らせるだけの圧倒的な力を早急に手に入れなきゃならない。今の私ではまだ良い勝負になってしまいうからね。

ラウンドナイトが駆け付ける前に知らせてくれたジェントルには感謝しないと。以前にも思ってたけど、あの執事っぽい爺さんは不死化の秘術が確立したら真つ先に候補に入れて上げましょう。

それにしてもちよつと研究・生産で忙しくて爆裂流の道場に顔を出せていなかったからつて、良い練習相手がいなくて暴れるとか、我慢強くないにも程があるわね。コイツは私の言った事を本当に理解してたのかしら？

「随分なはしやぎようだけれど、もしかして今ならパロミデスに勝てる気なの？ 私は言ったわよね。千年後は強さが逆転してるかもつて。決して今の話じゃないわよ？」

「千年も待てるか。怪人化の秘法だったか？ 死を乗り越える事での急激な進化。確証はないが、怪人の情報を調べた限り貴様の言葉を否定するような情報は出てこなかった。幾つかの噂にはそれらしいものもあった」

ならば、そうゴツサムが気炎を吐いた。

「爆裂流を潰す事でパロミデスを挑発する。本気で殺しに来るパロミデス乗り越える事で俺はアイツを超える強さを得る」

「馬鹿が」

コイツも幻の強さに魅せられて無駄死にしようとする夢想家なのね。救いようがないわ。

私は死ぬレベルの鍛錬を乗り越えろと言っているのに、死ぬ危機を自ら招いてどうするのよ。たとえ偶然、命が助かってもそれだけで強くなれる訳ないじゃない。

都合良く覚醒できるなら誰も苦勞はしないんだよ、この現実の見え

ないクソガキが。

「パロミデスの前に私が殺して上げる。現実の見えない甘ったれたガキをね」

「やってみろ。まずはお前を乗り越える」

「なあ。私をノケモノにして結論を急がないで欲しいんだけど」

バチバチと鬨気の応酬をしていた私とゴツサムは、ドンッと震える大気にバツとそちらを振り返った。

放出している鬨気の量が私達とは比べ物にならない。

そこには、褐色の肌をした黒い女が、額に青筋を浮かべて佇んでいた。

「で、私は誰をぶっ殺せば良いわけ？ 立ってるのは全員、始末して良いわよね？」

ラウンドナイトの誇るS級ナイト。誉れ高き円卓の騎士が一人。

鋼の肉体を持つ漆黒の女。パロミデスに敵対宣言された私は溜息を吐いて天を仰ぎ見た。

今日は厄日だ。

二十九話 S級とA級の格差

「待っていたぞパロミデス。俺は今日、お前を凌駕する」

「……………。その前にアンタは誰なのよ。爆裂流の門下生なのよね？」

「アツハ。ゴツサム、貴方。名前すら覚えられてないじゃない。知ってる？ それ自意識過剰って言うのよ」

まさかのパロミデスの言葉に思わず失笑してしまった。なるほど、ゴツサムはパロミデスにとってその程度の相手だったのね。

私達の発言にゴツサムのこめかみからブチブチブチつと音がして真っ赤になったゴツサムが咆えてパロミデスに呐喊した。

爆裂流の独特な空気を爆破する音を奏で、全身を炎に包まれて。

ふむ。身体の一部ではなく全身の爆裂炎上拳。確かにちやんと鍛錬は続けていたらしいわね。強くなっている。

「やっぱ門下生なのね。殺したら爺さんが五月蠅いし、手加減しなきゃか」

「なめるなア!!」

おそらく攻撃の威力のみで考えるなら私以上の爆裂流の一撃をゴツサムは繰り広げ、それを涼しい顔でパロミデスは無防備に受けた。ダメージはない。

逆にあまりにも攻撃の威力が高かった為にゴツサムの腕の方が折れている。惨い格差だ。

「おおおおおおおつ!!」

「再生スピードが速すぎる。怪人？」

腕が折れようが構わずゴツサムは攻撃を続行し続け、腕を引いた時には骨折が完治している事もあり攻撃が途絶えない。

その異様な回復力にパロミデスも僅かに目を見開いた。

「ゴツサムはバンパイア一族に迎え入れたから、急所を狙わなきゃ死なないわ。多分」

「ふうーん。貴女が原因なのね」

「暴走してるのはパロミデス、貴女のせいだと思っただけけど…………」

このままじや事件の黒幕扱いされると私は首を振って否定した。道場の再建代を弁償するくらいならともかく、問答無用で殺されるような気がするからパロミデスは怖い。脳筋女め。

「俺を見ろおおおっ!!」

殴りかかっているにも関わらず、無関心なパロミデスにゴツサムが懇願するように咆えて。

そのゴツサムにパロミデスは仕方なさそうに構えた。

「よく見ておきなさい。これが本物の爆裂流」

キュゴつと音がしたような気がする程、一点にパロミデスの気が収束し、褐色の腕が熱せられた鉄のように赤い灼熱の色に染まった。

ゆつくりと突き出されたように見える拳は炎を纏わず、ただ拳の内部に膨大な熱量を秘め、ゴツサムの腹部に当たって弾けた。

ペアアンとゴツサムが拳の威力と炎の勢いに身体を真つ二つにされて地に落ちる。

指向性を持った炎はゴツサム以外には影響を与えず、板張りの道場は燃え後すら残ってない。恐るべき練度の爆裂炎上拳。

「ねえ。これ、本当に死なない?」

身体を真つ二つにされて燃やされたゴツサムが血反吐を吐いて再生しないのを見て、パロミデスは私に再確認した。

私はパロミデスとゴツサムを交互に見て、先程の発言を訂正した。

「ゴメン。私が間違ってた。急所を狙わなくても死ぬわ」

「ちよ!?!」

血液のストックを攻撃の威力で消し飛ばされたゴツサムを見て、急に強くなろうと私は改めて決意した。

死に際のゴツサムを吸血して魂を確保した私をパロミデスが疑わしそうに見ていたので、その場でゴツサムを再び眷属として新生させた。

全身の爆裂炎上拳。あれをラーニングしたかったのだけど仕方ない。

意識を取り戻したゴツサムが再びパロミデスに襲い掛かり、それを

今度は足を消し飛ばす事で対処したパロミデスが今度は私の番と私に向き直った。

「貴女も早く来なさい」

「……ねえ、私もやらなきゃ駄目？ 別に私は何もしてないのだけだ」

「馬鹿に刃物を持たせちゃ駄目でしょうが。監督責任を怠った貴女も同罪。いや、それだと爺さんも当てはまっちゃうか。仕方ない。一発、先に殴らせてあげるから、私も一発殴り返すわ。それでチャラね」
子供に飛び掛られたら大人が本気でゲンコツを落としても良いと笑顔で言い放つパロミデスを、大人としての忍耐力で私は付き合っ
て上げる事にした。

「分かったわ。動かないでね」

「ええ」

その場で微動だにしないパロミデスの至近距離にまで私は近付き、
マジマジとパロミデスの容姿を観察した。

躍動感あふれる黒人系の美女。肩に掛かるくらいの長さに結ばれたポニーテールの濡羽色の髪にDカップくらいのそこそこ大きな胸にくびれた腰と同じくそこそこ大きいお尻。

うん、イケる。

「………………。ねえ。胸を揉みしだくのが貴女の攻撃？」

「持続攻撃だから耐えてね」

「へえ」

ニコリと笑ったパロミデスに胸を千切れるかと思う程の力で抓られた私は真面目にやろうと距離を取った。

多少のセクハラなら笑って許すし、いいわね。将来的にパロミデスも眷属にしたい。

本気で挑んでみよう。現時点の私がS級ナイトにどれくらい抗えるかも確認しておきたいし。

そう思った私は血液のストックを加工せずに指先から溢れ出させ、
身体にペイントのように塗り始めた。

ヘルウエツティイ族に伝わる特殊な呪術模様。血化粧。

私の血に宿る恨み辛みの思念が身体を蝕み、引き換えのように身体能力が大幅に向上する。肉体再生と同時に発動する関係で消耗は大きいけれど、エネルギーの過剰放出で身体を強化するより何倍も効率が良い。あつちは気力放出に特化して訓練した方が良いわね。

「む。ブルーノの一族？」

「関係者よ。ヘルウエツティイ族にも私の眷属になった人間が何人かいてね。まあ私はブルーノ陣営の客將的な立ち位置かしら」

「面倒ね。そういう派閥政治とは距離を置きたいのに」

うへえと別の意味で嫌気が差したラウンドナイトの武術界の大御所がうめき声を漏らした。

ラウンドナイトの円卓の騎士の中で、素手で戦うのは彼女とペリノア王の二人。ペリノア王は流派を修めている訳ではなく、単に本気で戦ったら武器が壊れるので仕方なく強靱な身体能力で暴れているだけのサイタマタイプの理不尽だ。話もあまり通じないし武術界からは怪人と変わらないと距離を置かれている。

結果としてパロミデスは武術界の期待の星+広告塔として盛大に利用され尽くしている。奇跡を操るサラセン人でもあるし色々と気苦労が絶えない立場。

派手に爆裂流の道場が崩壊したのに彼女以外のラウンドナイトが来ていないのは場合によっては何もなかった事にする為にワザと見逃されているのでしょうかね。

あちこちに配慮して動かないとならないラウンドナイトは思った以上に政治色の強い組織なのだ。

「武器の使用は構わない？」

「いいわ」

パロミデスの許可を得た私は肘から鎌を生やした。対戦車、対艦船用の徹甲弾に用いられる金属であるタングステン製。

包丁の形にしたら25年に一度しか研ぐ必要のない切れ味が続くという炭化チタンや、大量破壊兵器の材料にもなるレアメタルのレニウムなんかも扱えるようになりたいけれど、まだローマ帝国じゃ実用化されてなかった。代わりにワンパンマン世界独自の金属があつて、

そつちがタングステン以上にローマ帝国に重要視されて発掘され続けている。

ミスリル・オリハルコン・アダマンタイト・ヒロイカネ・ダマスカス鋼なんかのファンタジー金属を。

しかも怪人の骨や鱗が上記のファンタジー金属すらも超える生体鉱物の可能性があるのだから、やってられない。

タングステンはこの世界だと安価に利用できる低品質金属という訳。

その低品質金属で形成された強靱な鎌にヘルウエツティイ族の暗殺殺法に由来する技術で気を丁寧に染み込ませる。これで更に強度が跳ね上がる。

次にパロミデスに強化された脚力で飛翔して接近する。幻影飛翔剣の技術を接近する為だけに用いる事で余計な負担を負わずに威力の底上げを図る。練度の低い魔法の類いは邪魔なだけだから使用せず、気力放出で一撃の威力を底上げし爆裂流の炎を鎌に纏わせる。

これが現状の私の最大の一撃。血炎気翔閃。

ギユガツと白色に熱を放射する鎌がパロミデスの腕に直撃し――
一筋の傷跡を残して折れた。

引つ掻き傷。それが私の全力を受けたパロミデスのダメージ。

「思ったより、やるわね」

痛みを感じたパロミデスが笑顔で平手を私の頬にお見舞いし、私の意識を刈り取った。

三十話 不貞寝とヤケ食い

一撃でパロミデスに意識を飛ばされた日から、3日。私はヘソを曲げて村で放蕩の限りを尽くしていた。

S級が非常識な奴らだっという知識はあつたが、もう少し良い勝負が出来ると思いがついていたのだ。A級並に鍛えた3つの技術を組み合わせ使用する私ならS級ヒーローを降して見せた深海王のように打倒可能なのではと。その可能を持つのが災害レベル鬼の上位の怪人だしね。

その想定が覆された理由は多分、ラウンドナイトの戦力が全体的に原作のヒーロー協会より高いからだと思う。

S級メンバーの素質が上回っているとまではなく、単純に戦闘経験が豊富なのだ。ヒーロー協会は出来て3年の新興組織な上に基本的にS級ヒーローが同格の相手と戦う機会なんて滅多にない。逆にアーサー王の円卓の騎士達はブリテン統一戦争を勝ち抜いて11人の王を打倒したり、災害レベル竜の怪人である巨人王を代替わりさせて同盟を結んだり、ドラゴンを諫めたり、定期的なS級同士の模擬戦を繰り広げたりと戦力向上に余念がない。

S級同士の争いを止める常識的な判断をしたヒーロー協会と違い、ラウンドナイトは常に互いの武を誇るようにぶつかり合っている。アーサー王に絶対的な権力がないからS級が暴走しないよう発散する場を提供してるだけって見方も出来るけれど。いや、これはトップが現場を知っているかの違いかな。S級は必ずしも絶対強者ではないのだとアーサー王は理解してるのね。

S級ヒーローの閃光のフラッシュをサイタマが無意識のうちに指導していたように、ペリノア王という理不尽が定期的に暴れてS級ナイトの鼻っ柱を折って向上心を抱かせているみたいだし。………………。ペリノア王は何処までの強さなのかしら。災害レベル竜以上に届くのか、戦慄のタツマキと同じ災害レベル竜の上位並なのか。まさかサイタマ並って事はないわよね。

強さの次元が違うから、大まかな見通しすら立たない。

「ひい」

「きゆうけえしまひようよお……」

「あつあつあ。もう、無理いい」

汗だくになった身体をよじって胸やお尻を震わせる女性が3人。私の身体の下で喘いでいる。くちゅとネバネバした液が私の太股を濡らした。

ノイほど巨乳じゃなくキャサリンとリリシア姉妹ほど貧乳じゃない健康的な可愛い女性達。ウズウズと牙が疼いた気がして紛らわせるよう身体に舌を這わせた。

ちなみに今回の相手は眷属になりたがっていた村の女性達。望み通りにバンパイアにしてあげると言って3日、食事も睡眠も取らせず只管、蹂躪している。

こういう分かり易い下心で近付いてきた相手をひいひい鳴かせるのはそれはそれで気分が良い。無垢な相手を蹂躪するのも良いけれど、不純な相手だからこそ、いたぶった時の快感は大きいよね。

「なあに？ 私に意見をするの？」

「あうう」

「ごめんなひやい」

下手に打算的だから私を怒らせた時のリスクを考えてしまって反抗できず泣き寝入りする。うーん、キャサリンやリリシアは私から求めた事もあって平気で意見をするようになって来たし新鮮。ノイのような絶対服従でもないし、イワンのように反抗的でもない。

容姿は生まれながらのバンパイアのような神聖さすら感じる美貌じゃないけれど、逆にそれがそそのるのよね。メインヒロインよりチラツと出てくるモブヒロインが気になってしまう心境というか。こう、媚びたような笑みと上目遣いで見られるとムラムラつと嗜虐心が刺激される。

「ほら血を吸うから首を差し出さない」

「干からびちゃう。もう、干からびちゃう」

このまま本当に殺されるんじゃないかと怯える女性と更に身体を重ね、絶頂と一緒に血を吸って魂をゴクリと呑み込んだ。ヤリ殺し

た。

だって一回は殺さないと眷属に出来ないのだから。仕方ないわ。

「ああ……」

「やあ」

もう声を張り上げる事すら出来ない女性達の悲鳴を聞いて、ニイと笑って私は目を細めた。

「ミミ・キキ・ココ。目を覚まさないな」

「あ、あれ？」

「生きてる？」

「何で……？」

ボンヤリした様子で私を見返す村の女性達を呆れたように私は見た。

「貴女達が眷属にして欲しいってお願いしてきたんじゃないの。忘れたのかしら」

「えっ」

「じゃ、本当に？」

「騙されたんじゃないんだ」

失礼な事を言っただけで身体を確かめる三人の様子を果物をシャクリと食べながら観察する。リンゴのはずだけど、品種改良されてないせいで、かなり酸っぱい。食べ物は交易が出来ないせいで本当に前世とは比較にならないわね。色々と試行錯誤はしてるのだけど自然環境が毒化するらしいし、血が極上の味に感じるバンパイアに生まれ変わって良かったかも。

「凄い肌が綺麗になってる」

「髪がサラサラ。やっぱり眷属になったら美貌が磨かれるのね」

「やった。もう老いないんだ」

三人とも、ちゃんと生前と同じ記憶と意識のままバンパイアと化している。もう人間の眷属化は失敗しないわね。犠牲になった山賊達に感謝しなさいな。

元人間だろうと怪人化した者を眷属にする事は成功していないか

ら、まだまだ研究は続けなきゃだけどね。

人間と怪人で難易度が違うのは強力な眷属に生まれ変わるからかしら。そうだったら、異能や技能を持たないタイプの怪人の魂も蒐集する価値があるのだけど。いえ、強制的に命令できるようになるか容易くは覆せない力量を持つ部下を揃えないと単なる反逆者を生んで終わるな。嫉妬のエンヴィーはどう解決してるのかしらね。

「約束は破らない主義なの。余程の礼儀知らずでなければね」

フフツと意味深に笑った私に、慌てて三人は頭を下げた。さっきの反応は私を信用してなかったと白状したようなものだもの。当然ね。

「じゃあ、続きをするわよ」

「へ？」

ポカンとする三人にベッド方を指さすと青ざめた顔でイヤイヤと首を振った。

大丈夫。そのうち、だらしない笑顔で自分から催促するようになるから。フフフツ。

最終的に十日間、ベッドで語り合い続けたら三人の目にハートマークが浮かぶようになった。

少しは息抜きになったわね。娯楽目的の眷属化か。そういうえば奴隷にも見目麗しいのや道化師っぽいのもいたし、今後はそういう視点で一族を増やすのも良いかしらね。

三十一話 ローマ帝国

ローマ帝国。ローマ市内。

現代社会並の科学技術で守られたその都市は至る所に監視カメラがあり、現代兵器で武装した兵士が絶えず巡回する中世とは思えない様相の風貌の街並みだ。

行き交う人々はコーカソイド、白人が多く、怪人めいた特徴のある存在は一人もいない。ローマでは人間か確認をする為に検問所で常に体内をスキャンしているのだ。

これがキヤメロットなら鋼鉄の皮膚の持ち主や3メートル越えの身長の大男や身体に鱗が生えている人間が当たり前のように彷徨っている。知性と協調性があれば人間だと大雑把に分類しているキヤメロットとローマでは文化が大きく違うのが分かる。戦争状態に突入する前から二つの文明圏では様々なトラブルがあった。ローマ帝国の言う蛮族とは怪人を受け入れた人間国家の事を言っているのだ。

ローマ側の言い分は国内へ怪人陣営のスパイや危険分子を入り込ませる危険性を許容できないと言うものだが、キヤメロットから見れば人間だって突然変異で怪人と化す世界で何を馬鹿な事をと笑ってしまうような言い草であった。怪人だろうとその気になれば人間のスパイを利用可能なのだ。怪人一族ゲルマン人は知性を持った歴とした一種族だ。人間の土地を支配下に置いたら、住んでいた国民は二級市民、最低でも奴隷待遇として労働力に用いる。無差別な虐殺など滅多にしない。利益にならないからだ。

その点だけで見ると発見した怪人は一族諸共、皆殺しにし続けているローマ帝国の方が遙かに野蛮だ。

結局は本能的な忌避感が理由なのだ。基本性能が圧倒的に弱い人間種族が技術が発達していなかった古代に、身体能力の格差が原因で各地に隠れ潜んで暮っていた鬱屈とした感情が未だに本能に刻まれて忘れられないでいるのだ。

人間種族全体に宿る太古からの怪人への怨念。これが地球意思すら悲鳴を上げた人間の暴走の理由なのかもしれない。

「グオオオオオツツ。俺の偏差値が30だからって馬鹿にしゃがってよオオオツ。そんなに学歴が大事か、アアン!？」

「うわあつ。怪人だ、逃げろお！」

「キヤアアツ！」

だが、そういう本能に根ざした偏見でローマ帝国が怪人を忌避するのは仕方ない一面もある。

片っ端から異端として異種族や自然発生の怪人を排除していった結果、ローマ帝国の人間が最初に見るスタンダードな怪人は人間からの突然変異が殆どなのだ。

時間経過で冷静になった後ならともかく、突然変異で怪人になるというのは種から逸脱する程に感情が昂ぶって暴走した挙げ句の事である。まず間違いない会話の通じない狂人めいた言動を取っている。オマケに怪人特有の自分本意な思考や強化された肉体から来る全能感で気が大きくなり、周囲に多くいる無力な人間を馬鹿にしていただろうとするのだ。

しかも力関係が逆転しなければ、いや自分の立場を教え込まれようが更生する怪人は一部だ。これで共存しろなんてのは無理難題というものだ。

実は人間と共存する可能性が最も高いのは最初からそういう生命体として生まれた異種族型の怪人なのである。

そして、ローマ帝国はそういう怪人達こそを片っ端から滅ぼしてきた。もうローマ帝国は後戻りの出来ない程に修羅の道を突き進んでしまっていたのだった。

「あ、ああつ」

「おう？ おい、シヨンベン漏らしたそこのガキ、てめえの偏差値は幾つだ？」

「ええつと……」

「安心しろよ。お前の返答で俺の行動は変わんねえから」

ニイと笑ったモヒカン頭の怪人はゲラゲラと笑いながら座り込んだ子供を嘲笑った。

「偏差値が低けりゃ俺の仲間だ。お前も俺の一部にしてやる」

「た、高かったら……?」

「お前の脳味噌をすすって賢くなるのさ」

ベロンと口から舌を伸ばした怪人が子供の身体を巻き取り、空中に浮かせた。

キヒヒヒヒと笑う怪人はとても元人間だとは思えず、子供は泣き叫んだ。

「助けて。誰か、誰かーっ!」

救いを求める子供の声はローマ市内に大きく響き渡り、当然の如くその声は——人の守護者へと届いた。

「平気か?」

「え? う、うん」

一瞬で怪人の伸ばした舌を切り裂いて子供を救出した黄の重装歩兵はそう言つて子供を地面に降ろした。

色持ちはローマ帝国の誇る決戦兵器であり、単なる一兵士だろうとA級の実力を誇る。

だが怪人と化したモヒカン男は地味に肉体を鍛えた武闘派であり、種族を逸脱した事で災害レベル虎の実力を持つ。

A級の実力でも相性次第では危険な相手なのだ。

「痛つてえな。兄ちゃんよお。俺の舌の落とし前、どう付けてくれんだあ?」

「既に再生してるようだがな」

「バアーカ。目には目をつて言葉、知らねえのかあ?」

俺と同じ目に遭わせてやるよと、げひた笑みを浮かべるモヒカン男に黄の重装歩兵は丁寧に訂正の言葉を言った。

「目には目を、歯には歯をと定めたハンムラビ王は復讐しろと唆しているのではなく、こちらがやられた以上の過激な報復をするなど諫めているのだ。馬鹿が」

「てめえ、俺を馬鹿だと言いやがったな!」

「馬鹿だから仕方ないだろう。この馬鹿が」

「仏の顔も三度までだぜ!」

怒り狂ったモヒカン男が猛烈な勢いで突っ込んでくるのを正面か

ら受け止めて、黄の重装歩兵の男はもう一度、重ねて言った。

「仏の顔も三度までは温厚な人でも無礼を繰り返せば怒るという意味だ。馬鹿め」

「てっめ」

「何よりな」

ヒュイインと黄の重装歩兵の男が纏った鎧、パワードアーマーが光りを発しメキメキと肉体を強化する。

そう、この重装歩兵の男はパワードアーマーの力を利用せずにモヒカン男の突進を受け止めたのだ。素の身体能力が怪人を大きく凌駕していたのである。

「子供に危害を加えるんじゃない。この馬鹿が!!」

「あびゃ？」

モヒカン男の肉体を強靱な身体能力で押し潰し、肉塊に変えて、黄の重装歩兵の男は話を終えた。

これがローマ帝国の誇る決戦兵器の一人、黄のリーダー……と言う訳ではない。

単なる十人隊長だ。この男レベルの実力者が後何人か黄の重装歩兵隊には存在しており、それを統括するのが黄のリーダーなのだ。

ローマ帝国は史実でも原作でも伝説でも滅びる運命にある。

だが、それはローマ帝国が弱い理由にはならない。

三十二話 怪人バンパイア女王、災害レベル鬼十

最初に訪れた樵の村、いやバンパイア村落に追加の眷属を誕生させてから私はキヤメロットに舞い戻った。

何時までも遊んでいるとヘルウエツティイ族からの美味しい依頼が他に流れるからね。諜報の専門家は私以外にもいるし、化学製品も魔道具で再現できなくもないし。

それでしばらくは真面目に仕事を熟して。好い加減、本格的に戦力強化へ邁進しようと思いを切り替えた。

流石にワンパンは不味い。相手がS級だろうと逃亡すらも出来ないのは問題外。

感覚的なモノに過ぎないけれど耐久力と回復力が災害レベル竜なのは間違いない。パロミデスが相手だろうとワンパンで倒されたのはやっぱり変なのよね。吸血鬼としての特性はラーニングしたモノと比べて飛び抜けている。身体のコウモリ化も器用の向上や基礎異能の練度向上で迅速に分裂できるようになったし一匹の強さも増してる。血液タンクのおかげで当初の3倍はコウモリの数も多くなってるし、眷属が血を吸う度に少しずつ強化されていってるし。忘れてたけれど、そういうチートも神様に貰っていたのよね。吸魂と比べて地味だけれど。シンクロ強化とでも名付けるかな。

で、話は戻るのだけど、そこまで頑丈じゃないから私がパロミデスのビンタで大ダメージを受けるのは分かる。ゴツサムもパロミデスの通常攻撃でズタボロにされてたし。でもゴツサムが耐えられたのに私が耐えられないってのは筋が通らない。ゴツサムの生まれながらの頑強さ、その素質はラーニング済みだ。

男と女の違いや体格なんて細かな違いは影響しない。筋力の重さなんて常識的な概念はワンパンマン世界では無力。私とゴツサムの肉体的な強度はイコールか私が若干、上回っているでしょう。

休暇を満喫しながら、じゃあ何でこんなに私が打たれ弱いのか考えていたんだけど。原因は一つしか思い浮かばなかった。

即ち、精神力の差。

ワンパンマン世界で最も重要な要素が私には不足しているのだ。「何てこと。この世界じゃ精神力次第で物理的な限界をも凌駕可能なのに。そこが最も欠けているなんて」

そもそも怪人は精神的な強者という訳ではないけれども。

ワンパンマン世界でのインフレ要素。成長リミッターの解除と怪人化の秘法。この二つは死を乗り越えるか、死を潜り抜けるかで道が分れる。この二つは似てるようで大きく違う。成長リミッターの解除は覚醒であり、怪人化の秘法は進化であると言い換えても良い。

進化とは即ち逃避だ。

他の生物より大きくなることで生き残った恐竜は一見強くなったように見えて、実は同じ大きさでの縄張り争いから逃げている。本質的には身体を小さくする事で生き残ったネズミとの違いはない。生存競争をより有利にする為に現状から逃避する生きる為の手法。それこそが進化なのだ。

だから怪人の進化の際、そう例えば。怪人である転生フェニックス男が着ぐるみの内部に入り込んだ虫のような機械にクスグリ殺されるのを避ける為に、ヒヨコのような大きさと実力に弱体化するなんて事が起こり得る。これも進化の一形態。退化と進化は紙一重なのだ。

トレーニングの延長線である身体能力の強化に過ぎないリミッター解除とは大きく違う。こっちはバトル漫画の覚醒と同じだ。人間としての性質を変えないままに個体としての強さだけがバグみために強化されるのだ。だから実はマントを羽織っているのにサイタマは空を飛べなかつたりする。寿命も普通の人間と変わらないだろう。

……その割に精神世界へとノックして侵入して来たりするが。これは戦慄のタツマキの超能力ではサイタマに干渉できなかったのと同じ理屈かな。強靱すぎる気が世界への影響すらも遮断したのでしよう。ギャグ漫画だからって身も蓋もない理由じゃなければ。

サイタマはそういう常識を無視する頭の悪さも強さの秘訣なのよね。

原作で竜以上の怪人になったガロウがもう一步で成長リミッター

を外せる所まで来ていたのに、最後の最後で常識的な枠組みに収まっ
てしまったのはそういう常識に囚われてしまったからでもある。下
手に武道を学んでいたから人間の限界ラインが見えてしまっていた
のよね。それが自己流で師匠のいなかったサイタマとの違い。あつ
ちは競い合うライバルすらいなかったから、これくらいが人間の限界
だって知識すら希薄だった。

だからジャンプで月にまで到達できるような身体能力にまで到達
した側面があるのだ。

「つまり、成長リミッターを解除するだけじゃサイタマ程には強くな
れない？」

ありそうね。ライバルとの競い合いすらも駄目だとか厳しすぎる。
本当にサイタマは例外なのか。

もし、サイタマ以外の人間がサイタマ並の実力を備えるなら、二人
は成長リミッターを解除した人間が必要でしょうね。普通は自己鍛
錬のみで肉体を極められる人間なんていない。サイタマは中国の仙
人のような求道者的な側面があるのよ。

「いえ、私は成長リミッターの解除も怪人化の秘法も頼らないと決め
た。精神力なんてあやふやなモノを鍛える為に実戦を繰り返し窮地
に陥るのは本末転倒。ロジックが足りない」

そう。精神的な弱さが原因で打たれ弱いなら、精神的な弱さを抱え
つつも打たれ強くなれば良いだけ。

心の強さが戦闘の強さだなんて現代戦では嘲笑の的だ。精神論で
現実が変わらない。

「痛みの緩和は既に出来てる。それでも意識が落ちたのは許容できる
刺激を超えたからか、人間だった頃の常識が身体の破損を受け入れら
れなかったのか。錯覚、幻肢痛。後者ね。一定以上のダメージを受け
ると精神が死を錯覚して、強制シャットダウンをすると考えとらし
く思える」

それなら拷問を受けて痛み慣れるのは意味がないな。そういう
外部刺激では常識を変えられないし、バンパイアは容易く肉体を作り
替えたり再生するから痛覚は鈍く出来る。それが、精神的な脆さが原

因で死んだバンパイア（血統書付き）のように成長を阻害してる面も否定できないけど。

「あ、ヘルウエツティイ族のカインがやってた分身。あれを参考に体内に思考する脳を増やしたり、二人に増えて過ぎたりすれば人間としての常識も崩壊するかも」

科学者としての仕事も忙しいし、単純に手数を増やすのは有り。何で思い付けなかったのか。

試しに限界分裂数まで肉体を増やしてみよう。カインは一時的な分裂が限界だったけど、私は眷属を生み出したように生命体すらも作り出せる。常時稼働させる事も可能でしょう。偽物じゃなく、どっちも本物だから、自分殺しが起きるか？ いやでも、吸魂で自分自身の魂を吸い取れたら……。禁忌に近い。でも、やっぱり試してみる価値は高いな。

「自分の複製は無理でした」

「肉体の常時分裂は可能だったじゃない」

「凄い負担だけけどね。科学者としての仕事を出来る気がしない」

「脳はちゃんと人数分あるのに」

「魂が薄く人数割りになってるせいかしら」

「コウモリ時に高度な思考が出来なくなってたのは魂に原因があったのね」

「でも戦闘行動は本能的に可能よ」

「9人が限界なのかしら」

「今はね。これも研鑽次第で増やせるわ」

魂が繋がってるから完璧な意思疎通で連携可能な災害レベル鬼の怪人が9体。

ふふっ。思わぬ戦力アップじゃない？

三十三話 空賊スカイ団

多重影分身モドキを習得した私はやっとA級賞金首をターゲットに狩りをしようと動き始めた。今なら多少、格上だろうと逃げるだけなら簡単だし爆裂流のゴツサムや幻影飛翔剣の山賊レベルの相手なら得るものもあるしね。

そう思っただけで何件か独力で賞金首を退治したんだけど、A級でも下位はB級と個体としての力量は変わらなかった。違うのは人数と装備。バンパイア傭兵団の魔道具バージョン的な物を身に付けてた。空飛ぶ絨毯とかね。研究素材として一応、確保してる。

これなら最初からいけたわね。どうやら階級ばかりに目が行って必要以上に慎重になりすぎていたらしい。師範代レベルの武術の達人はA級でも上位なんだろう。最初のB級依頼、本当に外れだったのね。私じゃなかったら端金で死地に追いやられていたんじゃないかしら。

でも金稼ぎとしてならともかく、目的は戦力アップ。A級でも上位のターゲット、高名な犯罪グループを狩らなきゃならない。

美味しいのは本格的な知識が不足してる魔法関係。錬金術は科学的知識で大体は説明がつけちゃうから、今の私じゃまだ魔道具を作成できないし二重に旨味がある。

「それで近隣の有名所、空賊スカイ団を狩ろうって訳ね」

「……何故。それで俺がカーミラ、貴様に協力しなければならん」

「貴方が暴れて破壊した爆裂流の道場の再建代を誰が払ったと思ってるのよ」

「ちっ」

S級賞金首でこそないけど空賊スカイ団には敵に回してはマズい相手がいるかもしれないと借金をカタにゴツサムも無理矢理、参加させる事にした。扱い辛いけど、ゴツサムは眷属の中じゃヘルウェツティイ族並の強者だからね。修行途中の清流拳のジェントルに抜剣術のソウルや現代兵器で武装したバンパイア傭兵団じゃゴツサムには勝てない。

「貴方もね。パイヤ。今度、逃げたら容赦なく身体に埋め込んだ爆弾を破裂させるから」

「あの。もう無駄な抵抗はせんので体内に仕込んだ爆弾を取り外して欲しいなって……」

「活躍したら考えても良いわ」

同じく動員したパイヤは例の幻影飛翔剣の達人であるハゲ山賊。放っておくのは勿体ない戦力だと眷属にしたら即座に逃亡しようとしたので心臓と脳に小型の爆弾を埋め込んだ。バンパイアだし爆発してもその程度じゃ死なないけれど、元人間のパイヤなら首輪になる。これで駄目だったら、もう一回、吸魂しようかなと考えてたし。それを察したから逆らわないだけかもしれないけどね。

「カーミラ様。バンパイア傭兵団および武術連盟の一部、それと便乗してきた傭兵団の準備、整いました」

「ありがとうノイ。……それで、嗅ぎつけてきた傭兵団は白だった？」
「はい。スパイの線はないかと。情報は武術連盟経由で漏れたものと思われます」

「ちつ。ジェントルとソウルが世話になってるから一枚噛ませてやったのに。オカゲで無駄に手間と費用を浪費したわ」

空賊スカイ団の保持している空船や技術者を確保する為に外様の傭兵達には略奪を禁じ割高な報酬を約束して手付金を支払ったから、今回の討伐は結構な出費が掛かっている。一部は宝石や貴金属を生成する事で賄うにしても血液が原料になるからリソースが削られる事に変わりはない。バンパイア傭兵団が作戦の為に用意した幾つもの大型ヘリを物欲しそうに見ていたし。大きく動いた今回、情報はある程度、拡散してしまうと覚悟した方が良いでしょうね。

これでターゲットの賞金首共が大した実力を持っていなかったら大赤字だ。

「良いわね、可能な限りターゲットは生きてそのまま拿捕する事。そうじゃなきゃここまで戦力を集めた意味がないわ。故意に殺害したと判明したら違約金を分捕るから。そう他の傭兵団にも伝えなさい」
「了解しました」

敬礼するノイを引き連れ、私達もまた大型へりに乗り込んだ。



「姐御！ バンパイア傭兵団と武術連盟が手を組んだっつーのは確かだったみたいですよ。ローマ帝国産と思わしき純科学製の大型へりが複数接近してきやす」

「へえ。たかがA級賞金首にたいする対応じゃないねえ。こっちの情報が漏れた形跡は？」

「少なくとも姐御の存在は知らないんじゃないか？」

木造製の空飛ぶ船の甲板上で如何にもな海賊姿の男が双眼鏡を片手に背後で仁王立ちをする女に告げた。

顔に残る大きな傷を隠そうともせず、むしろ誇らしげに晒す巨乳の女は赤くハデな衣装で自らの存在を隠そうとする素振りすらない。

これはラウンドナイトの本拠地、キャメロット近郊の賞金首ではあり得ない態度であった。天変地異すら個人で起こしうるS級ナイトが何人も屯する大都市の傍で後ろ暗い犯罪者は息を潜めて隠れ潜むのが常だからだ。

その超越者集団に名指しで賞金を掛けられ、それにも関わらず堂々と振る舞うなど彼我の力量差すら測れない阿呆か、もしくは。力量差など笑って踏破しようとするようなド阿呆かだ。

「あの無敵艦隊を沈めたエルドラゴを相手にするにや戦力が足りないでしょ」

「違いねえ」

馬鹿笑いする手下の声に機嫌が良さそうにニヤリと笑った女は大声で号令を掛けた。

「ヤロウども、時間だよ！ 嵐の王、亡霊の群れ、ワイルドハントの始まりだ！」

女性の声に不自然に大気が荒れ狂い黒雲に太陽が陰っていく。

遙か未来。かのアーサー王や北欧の神オーディンとすら習合されて同一視された嵐の化身。

フランシス・ドレイク。

時系列も作品世界すらも無視して彼女は確かにそこに存在していた。

「アタシの名前を覚えて逝きな。テメロツソ・エル・ドラゴ！ 太陽を落とした女ってな！」

大航海時代。誰もが見果てぬ夢を海の先に求めた時代において。

世界帝国の地位をスペインから奪い取ったイギリスの英傑が今。

千年の時を遡って歓声を上げた。

三十四話 捕らぬ狸の皮算用

パラララツと軽い音とは裏腹にカーミラの作成した大型ヘリは時速360キロの速度で目標の空中船舶に接近していた。

最大速度ならともかく、250キロのスピードが推奨巡航速度の機体がさらに100キロオーバーのスピードで平然と飛び続けているのはワンパンマン世界独自の法則。気による運動エネルギー強化の影響故だ。鍛えれば生身の人間が隕石を砕く事すら可能となるこの世界では機械さえ使い手によって性能が異なってくる。

大型ヘリの操縦者であるバンパイア傭兵団の人員は災害レベルで虎クラスの怪人に過ぎないが、虎クラスの怪人は相性と状況次第ではA級ヒーローすら打倒可能な怪物である。この程度の超常現象は訓練さえ積みめば容易く行ってくる。

気による機体性能の強化はスピードだけではなく縦横無尽な変速軌道をも可能とする。現実では反則級のヘリ運用が可能なのだ。

この物理法則に喧嘩を売る変速軌道の大型ヘリが3機。奇襲をするように雲海の中から唐突に空中船舶、フランシス・ドレイクの愛船『黄金の鹿号（ゴールドデンハインド）』へと襲い掛かったのだ。

そう、つまり――。

たかが時速360キロ程度のスピードで一直線に突っ込んでくるバンパイア傭兵団はS級並の力量がある英霊にとってこの上ないカモであった。



急激な魔力の高まりと共に晴天だった空が暗雲に包まれていくのを見て、奇襲が失敗したのを悟って私は舌打ちをした。

流石は高名なA級賞金首、空賊スカイ団。危機察知に天候操作と面白い余技を持っている。そう内心で評価をしているとヘリの内部にいるにも関わらず、凜としたハスキーな女の声が聞こえてきた。

『アタシの名前を覚えて逝きな。テメロツソ・エル・ドラゴ！ 太陽を

落とした女ってな!』

何処かで聞いた覚えのある声と台詞に途轍もない怖気と寒気が走った。マズい。私は何かを決定的に間違えた。

幸運な事に私は三つに分裂して各ヘリの副操縦席に座っている。分身学習によつて学習能力が向上可能かテストしようなんて呑気な真似をしていたのが功を奏した。咄嗟にヘリの進行方向をねじ曲げて可能な限りの気で防護をしておく。あまりもの急激な方向転換は通常の物理法則下ではきりもみ回転をしただらうけれど、ワンパンマン世界なら気合いで何とでもなる。

ドンツ。そう世界が震えて、一拍置いてシューインと甲高い音が響いた。

おかしな事に火線は遠目に見えていたガレオン船のカルバリン砲からだけじゃなく、周囲に浮いた幾つもの小舟からも放たれている。

いったい何時の間に現れたのよ。

カルバリン砲は長さ335センチで重さが2トンある15世紀から17世紀の欧州に登場する大砲だ。

およそ18ポンド(9キロ未満)の重量の弾丸を発射する近代兵器。有効射程は500メートルあり、90メートル先の厚さ15センチの板を貫通可能な、いわば一昔前の時代遅れな兵器となる。

5, 6世紀で時代遅れも何もないが、文句はローマ帝国に言つて欲しい。既にあの国は現代兵器を大量生産してるのだ。カルバリン砲なんてハツキリ言つて産廃。

こちらの大型ヘリに積んである歩兵用小火器の方が余程ヤバイ。対戦車用のビルを破壊可能なロケットランチャーまで用意してるからね。

だから空飛ぶガレオン船にカルバリン砲があるのを見ても何とも思わなかった。簡単に避けられるし、気でヘリコプターを防護すれば弾ける。まるで無意味だと。

そう、あのガレオン船が単純に錬金術や魔術で飛行可能となつてるだけなら問題はないのだ。

本番はヘリでガレオン船に接舷してからだと。下手に殺傷して乗

組員の魂を取り込めなくなったらマズいとゴツサムにパイヤだけじゃなく武術連盟にも声を掛けた。

そう、私は常識で判断してしまったのだ。

一面を覆い尽くすような火線は砲弾の姿が見えず、まるでビーム攻撃だった。

有効射程は500メートル所か、地平線の先まで届く。少なくとも十倍の5キロ以上はある。

気で覆ったヘリコプターの装甲はガリガリと容易く削られ、熱でドロリと溶け始めている。咄嗟に緊急回避で直撃を避けなくては消し炭になっていた。

「ちよつとは物理法則、仕事をしなさいよ！」

ワンパンマン世界に常識を期待した私が間違っていた。

三十五話 カミーラさんによる現状解説回

出会い頭の一斉掃射を辛うじて躲したヘリコプターの副操縦席で私は大混乱に陥っていた。

転生したのは間違いないワンパンマン世界のはずだ。神様直々にそういう説明をされ、サイタマの存在する未来まで見せて貰っている。

確かにアーサー王や円卓の騎士が存在する事に若干首を傾げはしたが、その程度ならあり得るのではないだろうと納得できた。ワンパンマン世界の過去には残酷竜を封じた封印師とかいるし。超能力者や予知能力者、バンパイアに死者蘇生と基本的に何でもありの作風だ。ワンパンマン本編で『世界の脅威に対抗する為、中世時代から理想の王が目覚められたのだ!』とかモブが言い出してアーサー王や円卓の騎士が登場しても読者はふーんと流すだろう。

というか、流水で凍り付いていたのを蘇生したって体で既に原始人スツポンっていう原始時代の人間を本編に登場させてたわね。

まあ、だからラウンドナイトは普通に受け入れられた。魔法に呪術も似た物が本編に登場していたし、忍者と同じような集団が隠れ潜んでいる可能性もあるなど展開予想をして楽しんでた。だが。

「視力強化(ヘストレンジスアイ)」

数キロ先の光景をピクト人の魔法で視力を強化して確認すると、標的のガレオン船に海賊帽を被った女が見えた。赤い胸元の開いた上着に白いズボンと黒いブーツ。赤髪の巨乳で顔の中心を大きな傷跡が斜めに走っている。前世で見覚えのある顔だ。

ガレオン船に乗った顔に大きな傷を持つ赤髪の子の海賊姿の巨乳美女。自称、テメロツソ・エル・ドラゴ(恐ろしき悪魔)。

真名は恐らくフランス・ドレイク。推測が当たっているなら16世紀に暴れ回った海賊の船長。遠方の空中船舶に乗るあの賞金首は無理だ。どう足掻いてもワンパンマンには登場できない。

何故なら彼女は『Fate/Grand Order』というアップ

リゲームに登場するサーヴァントの一人だからだ。

サーヴァントとは人類史に残る功績を上げた史実および創作上の人物の逸話が形となって現れた存在。死後の英雄が信仰によって昇華された英霊の一側面。

世界の外側にあるという英霊の座に登録された本体からコピーをした虚像を召喚しているが故に、時間軸を超越してサーヴァントが存在できるのは確かだ。Fateシリーズの作中でも未来の英霊というのは登場していた。

だからワンパンマン世界の5, 6世紀に居てもおかしくはない？ この世界の16世紀にもフランス・ドレイクはいるだろうって？

馬鹿！ おかしいに決まってるでしょ！ 色々と妥協して16世紀のフランス・ドレイクが5, 6世紀の欧州に召喚なり転移なりしていたとしても！

容姿は絶対に違う！ 著作権の壁があるわ！ 怖くてワンパンマンの作者も『FGOのフランス・ドレイク』っているでしょ。実は作中の過去編に登場させようと思ってる。え？ 全く同じ容姿でですけど？』なんて冗談でも言えないっての！ 炎上するから!!

じゃあ史実準拠なんだろうって？ 史実のフランス・ドレイクは男だ！

つまり。目の前にいる賞金首は特大のイレギュラー。

私、カーミラと同じ世界に混入した異物な訳か。

一先ずの結論を出す私と私は即座にFGOのフランス・ドレイクの情報を出し始めた。確か切り札的存在である宝具は愛船であるガレオン船だったはず。

周囲に展開している小舟も彼女の宝具効果によるものと考えて良いだらう。対軍宝具。元は海賊でありながらもスペインの無敵艦隊を葬ったイギリスの艦隊副司令官へと成り上がった彼女の逸話が形となった力だ。個よりも群での戦いにこそ本領を発揮するタイプ。

だが、フランス・ドレイクの最も恐ろしい点は宝具ではなく……。

「っー」

科学者の頭脳を手に入れたオカゲで私の思考速度は大幅にアップしている。混乱していたのは十秒にも満たなかっただろう。

だが、カルバリン砲の次弾を装填するには十分だったらしい。特徴的な発光が大砲から漏れ出ている。

少なくともF G Oのアプリゲームでは宝具の連射は基本的に不可能だったし、F a t eシリーズでも魔力リソースの問題でマスターが干からびると禁じ手だったはず。

弱体化したサーヴァントではなく生前の本体なら連射可能な奴もいるが、それは神代出身や豊富な魔力を持つ一部の英霊だけであって、生前のフランシス・ドレイクなら魔力すら持たないはずだ。宝具連射なんて出来るはずが。

いや、余計な情報に惑わされるな。冷静になれ。

近代とはいえ軍事兵器が一発しか撃てないはずがないんだ。大砲も銃も弾がある限り継戦可能。当たり前前の事だ。

ビーム兵器めいた攻撃はフランシス・ドレイクの魔力による威力底上げだろうが、弾丸は恐らく普通にカルバリン砲の物を使っているんだ。ワンパンマン世界独自の法則、使い手による兵器の性能強化。それを恐ろしい程の練度でやっているに過ぎない。

つまり敵に魔力切れはない。攻撃間隔は手動で大砲に弾を詰め込んだら即座。

「冗談でしょ」

超遠距離からの一方的な宝具の飽和攻撃？ それはもう現代の軍隊がやる事よ。

個人武勇の力量を競う聖杯戦争のキャラクターが使って良い概念じゃない。最強の代名詞であるギルガメッシュでさえ頑張れば刀剣が届く距離で戦ってるの。

それを空中飛行する船でキロ単位離れた距離から、十秒間に何発も掃射してくる？ 持久戦も可能？

「なんてインチキ」

私の泣き言は一発でも直撃すれば沈む破滅の光りに遮られた。

三十六話 S級の戦闘速度

カルバリン砲の砲撃は一見ビーム兵器のように見えるが、正体は弾丸を魔力の膜で覆った実弾兵器だ。

魔力自体が高度なエネルギーを秘めているのか弾丸が直撃しなくても掠めただけでヘリの装甲を溶かす程の威力を持っている。直撃した際の威力と衝撃は考えたくもない。

故に避けるしか対処法はないのだけれど、カルバリン砲の弾速もまたフランシス・ドレイクの性能強化の恩恵を受けているのか反応仕切れず。

カルバリン砲の砲口初速、砲口から弾丸が発射された時の速さは秒速500メートルだとされている。この速度は拳銃の砲口初速、秒速381メートルを上回っていて決して遅くはない。その弾速が体感では倍の速度に強化されているように思える。

秒速を時速に変換するとカルバリン砲は音の速さである1225キロを軽く凌駕する。その倍の速さだとすると、音の三倍の速さ。マツハ3か。

前世の最新鋭戦闘機の速さが確かマツハ3だったわね。つまり、戦闘機の突撃を躲せと強要されているようなもの。

単なる投げ槍で戦闘機を撃墜してのけたベディヴィエールといい、S級は狂っている。

本人は単に目が良いだけだと謙遜していたが冗談じゃない。あの妙技は数キロ先の光景を視認できるだけでは達成できない。音速を超える速さの機体に反応できる超人的な動体視力と精密な未来予測が最低限必要なのだ。何せベディヴィエールが投擲していた槍は私でも反応できた。つまり、槍の投擲速度は拳銃並だったという事。奴は拳銃で戦闘機を撃ち落としていたのだ。

こちらの大型ヘリコプターの推奨巡航速度は時速250キロ。専属の眷属が操縦して時速360キロ。災害レベル鬼である私なら頑張れば時速500キロは行く。

つまり拳銃の砲口初速の半分程度のスピードだ。

その程度のスピードじゃ放たれてから2, 3秒で襲い掛かってくるカルバリン砲は避けられない。そもそも私が反応仕切れない。

「ガアツツ！」

当然の帰結として、カルバリン砲は私が操縦するヘリコプターに大穴を開け、ついでとばかりに副操縦席に座っていた私を焼き焦がした。

「やってくれる」

ヘリのメインローターを破壊されて墜落していく僚機を見て私は舌打ちをした。

内部で私が生存しているのは分裂した私自身の事だから分かるが、戦列復帰には多少の時間が必要だ。ちよつとでも時間稼ぎをしなくてはならない。

敵のガレオン船に接舷するには距離が離れすぎている。推奨巡航速度の倍は速度を出せる私でも30秒は必要だ。3回の宝具掃射を受けて無事でいられる訳がない。そもそも最短距離で近づく想定に無理がある。近接戦闘には5回は宝具を対処する必要がある。

「損切りしなきゃか」

この後の戦闘でフランシス・ドレイクを捕まえて魂を奪える可能性はゼロに近い。なら今回の出兵はたとえ勝ったとしても無意味。

戦闘を続行する事、そのものが無駄だ。だが、現状では逃亡すらも難しい。

この場を切り抜けて生存するにはフランシス・ドレイクに深追いは危険だと判断させるしかない。

「ノイ、その身を捧げなさい」

「はっ」

私が操縦しているヘリコプターはノイ達、バンパイア傭兵団だけが搭乗している機体だ。何をやろうと反対する人員などはいない。

操縦席に即座に集まるよう団員に指示をするとノイは無骨な隊服を破り首筋を曝け出した。私が何をしようとしているか察したらしい。話が早い。

「良い娘」

微かに微笑むと私は頬を赤く染めたノイの首筋に噛みついた。牙がガブリと食い込む感触が堪らない。

「ああっ」

血を吸われる事に快感を覚えているのか身動くノイを抱きしめて私は血を啜った。血を吸う度に性感を刺激していたから条件付けされちゃったのね。

まるでブドウジュースを飲んでいるかのような甘くてまろやかなノイの血は精気と魂の吸収による強化も相まって心身を高揚させる。ワインを思わせる程、熟していないのもイケない事を教えているように楽しい。血の味わいは個々によって千差万別で奥が深い。

まあ、時に外れもあるけれど。対象が病気だったりすればヘド口を口にしたような不快感で吐きそうになるから。不潔な奴隷を取り込む際に味わってしまった。それ以後はお風呂に入れたり十分な食事を提供したりと健康的な生活をさせるよう心掛けている。

「よし、行ける」

吸魂して灰となったノイのオカゲで身体中に力が満ちている。今なら多少の無理が利く。

私はローマ帝国の錬金術師、いえ科学者の魂に記録されている兵器の設計図をダウンロードして搭乗しているヘリコプターへと導入した。

元々、このヘリコプターは血液を材料に私が産みだした物。接触しているならその場で多少の修復・改造は容易い。

「そっちがビーム兵器なら、こっちは機関砲に空対空ミサイルを使うまで」

幸い、弾は私の後ろで整列して待機してくれてるわ。

三十七話 絶望のち希望

秒速1500メートルで目標へとばらまかれる最速の徹甲弾AP FSDS、マッハ5以上の速度で目標まで飛翔する極超音速ミサイルと最先端の現代兵器は速度面でフランシス・ドレイクの宝具を大きく上回っている。ある意味、当然ね。世界一周を偉業として讃えられた時代の兵器と、民間人が旅行として気軽に行える時代の兵器を比べているのだから。

頻繁に飛ばしすぎて、さほど気にされなくなった北朝鮮のミサイルの最高速度はマッハ1.5だったと言えば時代の違いが分かるでしょう。

だから近接戦闘を諦めた段階で戦闘の軍配はこちらに上がると私は判断していた。

そう、ワンパンマン本編で深海王がミサイルの直撃に耐えられるシエルターをぶち抜いたり、ローマ帝国が円卓の騎士に苦戦していると知っているにも関わらず安易に判断してしまったのだ。

「ガレオン船って木造の帆船だったわよね」

「間違いないかと」

「じゃあ、何故あの船はミサイルの直撃を耐えられるの?」

当たっている。もう、何度も徹甲弾の嵐やミサイルの雨を降らしている。それにも関わらず、フランシス・ドレイクの愛船はその威容を保っていた。

アレは船というよりは空中要塞と言った方が相応しい気がするわね。

「……船体の一部に穴が開いています。無敵ではないはずですよ」

「そうね。ここが海水の浸水しない空中でなかったなら意味があったかもね」

笑ってしまう程にA級賞金首、空賊スカイ団は強い。強すぎる。

現代兵器は強力な反面、燃費が悪い。僅か一秒に何発も撃てるという利点は今、最悪の欠点として私の前に立ちはだかっていた。

「カーミラ様、現状を引き延ばすしか出来ない我々をお許し下さい」

涙ながらに襟首を引き千切り首筋を晒す最後の眷属の献身に私は苦笑するしかなかった。

受け取らない訳にはいかない。私は彼らの女王なのだから。

「そうね。次はもうちよつと頑張りましょうか」

「はっ」

こうして、私は広い鋼鉄の箱の中、一人になった。

破滅の光りが私を終わらせる少しの間だけ。



「遠距離戦闘で勝ち目はないのね」

宝具に消し飛ばされて鉄屑となったへりに分身の生命反応を感じられなかった私は溜息を吐いた。どうしよう。現状を打破する手段がない。いつそ、コウモリに化けてバラバラに散った方が助かる確率は高いんじゃない。

そう、背後の荷物を見殺しにすれば、まだ何とかなるかもしれない。「だから早く外に行かないとマズいんだってばー!」

「ハハ、そうだな。笑っちゃう程、ヤバいみたいだから嬢ちゃんは大人しく座ってな。今、大人が大事な話し合いを」

『その話し合いって、勝ち目ないからバンパイアの親分の餌になりましょうって終末カルト的な妄言ですよねー? ルビーちゃん、ドン引きなんですけどー』

私の搭乗しているへりには協力者である武術連盟と急遽乗り込んできた傭兵達が乗り合わせている。

最初に墜落したへりの搭乗員はゴツサムにパイヤと死にそうにない面々だし何とかかなりそうだけど、こいつらはへりが墜落したら普通に死んじゃいそうなのよね。

目覚め悪いし、別組織と関係悪化しそうだからバンパイアにしてやるってジェントルとソウルから説明させたんだけど、もめるもめる。簡単には纏まりそうもない。

ちよつと、気になる娘が一人、バンパイア傭兵団のライバルだって

説明されたから死なせたくはないのだけでも。

いや、逆にひよつとしたらひよつとする？ 単なるそっくりさんだと思っただけけれど、フランシス・ドレイクがいるっぽいし。

「おいおい。そこの変な棒。俺の本音を言うなよ。武者震いが止まらなくなるだろっ」

『うわあ。この人、面白いくらいに震えてるんですけどー。本当に武術家なんですー？』

羽の生えた星が先端に付いてる奇妙な棒が独りでに喋ってはソウルの連れて来た抜剣術の門下生をからかう。

空中に浮いた奇妙な——ステッキ。無機物の癖に澆刺とした軽快な声。私は、あの杖を知っている。

「もうルビー駄目だよ？ 死ぬのが怖くない人なんていないんだから」

『そうですね☆ 周りの強面の傭兵が怖くて、小学生に真っ先に絡んでくるような人に度胸があるわけありませんでした☆』

「ちよいちよいちよい！ 誰が怖くて子供に絡んだだど!?!」

プラチナブロンズに真っ赤な瞳、ピンク色のフリフリ服。円卓の騎士であるトリスタンのアイドル衣装を見てるから違和感を抱かなかったけれど。

傍らの杖と併せて捉えるとあの衣装はアイドルというよりも。そう、魔法少女の衣装。

「ねえ、貴女……」

「俺は単に！ 可愛い娘がいるから仲良くなりたかっただけだ!!」

『うわあ』

「うわあ」

ある種の確信を持って少女へ声を掛けようとする、仁王立ちした変態に遮られた。

まあ気持ちは分からないでもないから、殴るのは止めて上げましょう。時間もないし。

「あのね」

「！ ついに強制的な吸血をつおお？ 何という美女。これは血を吸

われても役得なのでは？ いや、血を吸われる際に合法的に抱きつけるなら、むしろ得しかない！」

何故かキス顔でこちらに飛び掛かってきた変態を裏拳ではたき落とすと、私は少女へと声を掛けた。

「急で悪いんだけど、貴女の名前を聞いても良いかしら」「ふえ？」

注目されるのに慣れていないのか、あわあわと手足を動かした後、少女は意を決した顔でその名を告げた。

「い、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンです」

三十八話 笑うという行為は本来攻撃的な（ry

「グウツツ」

メインローターを破壊されたのか、真つ逆さまに墜落していくヘリの中で私は重度の火傷を少しでも治療しようと操縦席に座っていた眷属を無理矢理に引き寄せた。辛うじて生き残っていた眷属は熱で癒着した衣服を肉ごと自ら引き裂き、吸血し易いよう配慮をしてくれている。この献身と忠誠心は人間上がりの眷属にはない長所ね。その分、融通が効かない面もあるけれど。

「ジユルツズズ。一人分の血じゃヘリの復旧までは無理ね」

私のヘリはゴツサムとパイヤに運転手の眷属という接舷後の近接戦闘用に編成された部隊だ。多面的な襲撃で迎撃される可能性を少しでも減らす為に機体を多めに投入したけれど血液資源の無駄にしかならなかったか。いや、ならば逆に。

「眷属なら兎も角、無機物なら衣服と同じく私の構成要素の一種なはず」

散らばったコウモリを本体に集める感覚でヘリコプターを取り込む。よし、イケる。

多少のロスはあれど、生成した無機物は保有血液へと再び変換できた。急に中空に放り出されたパイヤが悲鳴を上げてるけど、ゴツサムは既に背中へコウモリの翼を生やしている。状況判断が速い。

「パイヤ、遊んでないで幻影飛翔剣でヘリの残像を生み出して的確に絞らせなさい。ゴツサムは爆裂炎上拳でヘリを急加速して軌道をずらして回避を……」

「ぐだらん。それでは時間稼ぎにしかなるまい」

「時間稼ぎをしろと言ってるの！」

相変わらずゴツサムは一々こちらに反抗してくる。武術家としては一流でも、部下としては三流ね。

ソウルやジェントルがもう少し流派を学ぶ時間があれば眷属内でゴツサムが最上位の力量を持つなんて助長しそうな事態は避けられたかしら。今でも私と対等な立場にいるという誤解を頑なに解かな

い。

「俺は敵の殲滅へ向かう。邪魔をするな」

「ハッ。遠距離攻撃手段すら持たない脳筋が何を言ってるの？ 足手纏いはいららないのよ？」

「貴様から先に始末してやろうか」

ヒリついた空気は味方へりの急変貌によって途絶えた。何者かの攻撃かと分身体と意識の波長を合わせて状況を探る。なるほど、土壇場でのヘリコプターの武装化ね。生成物は後付けでも改造可能と。流石は私、冴えてる。

支援攻撃があるなら多少は接近戦に持ち込める可能性もあるか。爆裂流の習得も済んでいるしゴツサムは自由にさせましょう。

「命が惜しければ引っ込んでなさい。パイヤ、貴方は攪乱役ね。逃げたら殺すから」

「ふん。ジョークにしては笑えんな」

「け、剣以外の幻影はちよつと難易度が高いなって。いや、やります！ やりますとも！」

渋るパイヤに起爆スイッチを見せて脅迫した後、私は12人へと分身した。このうち実体を持つ分裂体は3体、残りは幻影飛翔剣の幻影だ。血液量で計算して一人9分の1はないと弱体化するのよね。血が足りない。

それ以上に血液量を減らすと後付けで習得した異能や技術が使用できなくなってしまう。もっと血液を保持できれば良いのだけど、血液タンクは吸血鬼にとつてのHPみたいなものだから、長い年月を生きて少しずつ大きくするかS級や災害レベル竜を取り込むかしくはなくてはならない。原作で登場する豚神みたいな奴をね。

実はアングロ・サクソン七大王に耐久特化みたいな奴がいるから狙ってるんだけど、拠点から動かないから手が出せないのよね。

下手にラウンドナイトへ情報を与えてしまうとこちらが吸収する前に殺害されかねないから秘匿している。他のアングロ・サクソン七大王と違って放っておいても脅威にならないし。あの怠惰の spokeswomanは。

善良な怪人か。やつぱり探せばいるところにはいるのよね。他の比較対象が悪すぎるだけかもしれないけれど。

怪人は悪辣な程、強力な傾向が高い。精神性によって強さが変わるワンパンマン世界の法則を度外視しても手段を選ばない方が強いのは道理。ま、だから善良な怪人は弱々しくて淘汰されるのかもね。

私だって後先を考えず民間人を襲って吸血すれば分裂しても能力は弱体化しないし。自意識が完全に分れて多重人格者と化すリスクを呑み込めば竜の怪人である黒い精子の真似事だって可能。流石に11兆の群体へ増えるのは無理があるけど、数百万くらいなら本編前に到達できるはず。

もし、サイタマを敵に回してでも人類を淘汰しなきゃならなくなつた場合の切り札ね。ふふっ。

「そうね。仮想敵を考えれば強くてもS級一人くらいは乗り越えなくちゃならないか」

相手はA級賞金首。殺害しても何処からも苦情が出ない、私が求めていた強力な個体。

諦めるのはまだ早い。

「英霊フランス・ドレイク。本物か偽物かなんてどうだって良いわ」
重要なのはその強さだけ。ただの帆船を空中要塞と化す卓越した武装強化能力。

その力をローマ帝国産の現代兵器に流用したら、どうなる？

「貴女は私の獲物よ」

私は確固たる意思でそう言葉を発した。

フランス・ドレイクのカルバリン砲は銃弾の弾丸を視認して避ける事が可能な災害レベル鬼の私でも反応できない。だから操縦するヘリコプターが容易く打ち落とされるのは仕方のない話。そもそも戦闘機レベルの攻防が繰り広げられる戦域にヘリコプターを持ち込んだ私が愚かだったのだ。

魂を取り込んだ錬金術師は緑の特殊部隊である戦車隊付きの兵器研究の専門家だったから砲弾関係の知識には詳しいのだけど、戦闘機

は青の領分で情報を秘匿されているから大まかな原理しか分からない。赤のバイク隊に配備されている超強力な携帯武器や黄の重装歩兵隊のパワードアーマー、黒の悪魔付きの呪われた子供達など不明な事柄はまだまだ多いのよね。

おまけに最重要議題の核兵器関連は三賢者と呼ばれる博士達が仕切っていて普通の錬金術師では情報にアクセスも出来ないらしいし。まだまだ私の科学力はS級の水準には達していない訳。足りない実力を補える程の頭脳じゃない。

そう、私は戦い方を間違えていたんだ。

『右2―5砲塔旋回20度左上』

『左1―3砲塔旋回10度下』

『敵本船は継続して支援へりを狙撃中』

分裂した私と言葉少なに思念交換をしながら飛行を続ける。ピクト人の視力強化の魔法と錬金術の分析観測で砲塔の向きは事細かに分かるのだけれど、回避に忙しくて意識の波長を悠長に合わせている暇もない。

高速で羽ばたき続ける背中のコウモリの翼が熱い。限界まで速度を出してはいるけど、音速には届いていないわね。地上ならマッハ1近くは出せるのに。

「風の精よ。怒りを静め我に道を示したまえ」

せめて周囲の荒れ狂う嵐を沈めようとドルイドの精霊術を行使するが、フランス・ドレイクの支配の方が強いのか嵐は勢いを増すばかり。まあ、元はB級並の術者から手に入れた力だ。推定S級の実力を持つフランス・ドレイクの天候支配を破れなくても仕方ないか。

フランス・ドレイクのカルバリン砲を回避するのは難しい。発射されて1, 2秒で目の前に現れる砲弾を避けられる程、私は空中戦闘に慣れてはいない。

でも、回避不可能なのかと言えば話は違う。威力も射程もスピードも素晴らしい攻撃ではあるが、直線で進む砲撃は予測が容易い。砲塔の向きに注意をしていれば射線は何となく分かる。ここら辺はリーダーと誘導ミサイルを開発しているローマ帝国の方が上ね。流石に

文明レベルを個人で全て覆すのは無理があったか。

脳裏に三次元的な地図を描き隙間を掻い潜るイメージで飛行する。物理的に避けるのではなく予測して事前に回避する。戦闘機のパイロットが空中戦闘で当然のように行うテクニク。これが出来ないからこそ、ヘリコプターは空中戦闘ではカモになってしまふのよね。

そういう空中戦闘のスペシャリストが戦闘機パイロットでローマ帝国でもかなりのエリートなだけ、それを銃弾並の速度の投げ槍で落とすベディヴィエール卿は何なのかしら。考察する程に彼の超人ぶりが目に付くのだけ。

まあ、そういう点に注意して機械的な制約がなくなって速度と機動が上がった飛行で絶えず射線を避け続ければ私でも何とかやり合える。幻影の分身に砲弾が着弾してもすり抜けるだけだし、向こうは攻撃を無効化されてるのか当たっていかないのか判断を迷うでしょうね。

最初からこうすれば良かった。訓練もしていないヘリコプターの性能強化なんて通じなくて当然なのだ。それならば慣れ親しんだ飛行と幻影飛翔剣で呐喊した方が勝率が高い。

下手に手札が多くなつたせいで血迷つたわね。私だけで襲い掛かれば基礎能力を大幅に強化する血化粧だつて使えたのに。今は血が足りないから分身の方へリソースを振り分けている。

フランス・ドレイクのカレオン船と宝具によって呼び出した小舟は併せて五隻。

砲弾は本船が10発、出現した小舟が6発ずつ発射している。フランス・ドレイクの傍に浮いている4つの砲塔が厄介だ。魔力で宙に浮いているのか照準を柔軟に変更してくる。その上、徹甲弾やミサイルの直撃を船が受けているのに微塵も動揺せず狙いを定めている。

気による武装強化能力の魔力版だと思われる力は砲撃の威力強化だけではなく、船体の防護にも使用されているのか木造だと思しきガレオン船はミサイルを受けても物ともしない。偶に船体に穴が空く事もあるけれど、そこから炎上する事も飛行に障害が発生する事も無い。宝具によって呼び出された小舟は最初から幽霊船のようにボロボロだし、船の形をしていれば機能に問題は発生しないのかも。

つまり、船体への攻撃は全くの無駄。

「攻撃はフランシス・ドレイク本人に叩き込まなければ意味はないのかもしれないわね。それか船員へのダメージが船の機能に影響している?」

弱点部位は船上の船橋で、有効ダメージは船上の甲板。他はダメージ無効。

ギミック系のボスみたいな感じかしら。

「支援へりに情報共有を……遅かったか」

後方を感じていた分裂体の命の灯火が消えた。意識の波長も感じ取れない。

私達が分れつつも繋がりを保ち続けている集合的無意識の海へと沈んだわね。こうなると深く集中しないと分裂体の情報や内包した魂をサルベージ出来ない。

戦闘経験のフィードバックも直ぐには難しいわね。戦闘中に成長なんて少年漫画的な要素は期待できないか。

「でも、この距離なら届く」

私は明確に視線の合ったフランシス・ドレイクとにこやかに笑い合った。

三十九話 嵐の航海者

視力強化の魔法を介さなくても視線が合う距離にまで接近したというのは、私にとってイコールで攻撃範囲に捉えたという意味に等しい。

【縛】

「っ！」

流石に数キロ先の人間を魔眼越しに呪い殺すブルーノには及ばないが、呪術はヘルウエティイ族から十分に学ばせてもらった。

こうやって身体を不可視の束縛で拘束するくらいは訳ない。格下殺しに特化している呪術で格上のフランシス・ドレイクをずっと封じる事は不可能だが、数秒の間、動作を遅らせるだけなら問題にはならない。

『強化装甲腕』展開」

吸血鬼の基本異能である無機物生成でオークションで買い取った黄の重装歩兵のパワードアーマーの腕部分を生成する。

分解しても全身を一から作成できる程にパワードアーマーの仕組みを理解する事は出来なかつたけれど、現物のあった腕部分のみならば正確に部品を組み立てれば作動するのは確かだ。理論が理解できなくても正確にトレースすれば同じ物は作成できる。研究開発で間違はなく遅れを取るからあまり推奨できない利用法だけでもね。

瞬時に右腕を覆った装甲は煙を吐き出して稼働し始める。内蔵した小型バッテリーは現代社会の大型船舶をも動かす事が可能なオーバーテクノロジーの結晶だ。

まあ、5, 6世紀に現代機器を作成しているローマ帝国産の物ほどもオーバーテクノロジーなのだけだね。そう考えればスマホの電池で船を動かすくらいは大した事はないか。

『爆裂槍』生成」

装甲に覆われた右腕の先に血液を材料に槍を生成する。切っ先は前世の戦時国際法で禁止された兵器であるナパーム弾。

ナフサと呼ばれるガソリンの一種にナパーム剤と呼ばれる増粘剤

を加えてゲル状にした焼夷弾で、親油性の為に人体や木材に付着すると水を掛けても消化できないという非人道兵器だ。おまけにナパーム弾は燃烧の際に大量の空気を必要とするので直弾付近にいると酸欠による窒息死や一酸化炭素中毒死の危険もある。

そう、邪魔なモブ海賊を一掃するのに相応しい性能ね。

フランス・ドレイクでさえ呼吸できなきや多少は影響を受けるはず。むしろ武装強化の特化型だったら一撃で瀕死になってもおかしくはない。まあ、そうなくても私が吸い殺すまで生きてれば良いんだから問題ないわ。

それじゃあ。

「死ね」

延々とカルバリン砲で砲撃され続けた恨みを込めて私は槍を投擲した。



荒れ狂う海。暗雲漂う空。亡者達の叫びが如き暴風。死に誘う冷たき雨。

これがフランス・ドレイクの原風景だ。彼女が宝具を振るう度に世界は塗りつぶされ大航海時代へと巻き戻る。

幾ら周囲を見回そうと陸地は見えず、空を仰ぎ見ようと星は雲に覆い隠され、現在地さえ把握できない。

減っていく一方の水と食料。航海図にすら乗っていない航路。不安と絶望に顔を歪める船員。

供に出港した四隻の僚船は既に亡者の船と化した。お前らも仲間になれと、お前らの結末はこうなるのだと見せ付けるように後を憑いてくる。

無謀だったのだ。そうフランス・ドレイクの親友でありエリザベス女王へと彼女を引き合わせた副船長トマス・ドウティの声がする。

世界一周を生きたまま成し遂げた船長など、いない。死ぬぞ。

そう死に際に忠告したトマスの目をフランス・ドレイクは覚えて

いる。反逆罪で処刑される事が決まった人間とは思えない澄んだ目をしていた。

彼がいなければ彼女が船団を結成する事は出来なかった。見果てぬ夢を語り合った唯一無二の友であった。

その親友を殺して彼女は航海に出た。迎えた海はまるで冥界のようだった。

逃げる事も進む事も出来ない。泣いても許しちや貰えない。そんな中で出来る事は強がって笑う事ぐらいだった。

「いいじゃないか、かかって来な」

満足に動かない身体でフランシス・ドレイクはカーミラに笑いかけた。

生前と同じように。何時ものように。

「ここが命の張りどころってね！」

刹那に散る花火のように生きる。それがフランシス・ドレイクという女だった。